

Model Graphix Special "GUNDAM SIII"

GUNDAM SENTINEL

THE BATTLE OF REAL AMBITION

ガンダム・センチネル

ILLUSTRATION BY MAN



GUNDAM MODELING WORK モデルグラフィックス

真実のガンダムを知っているか!?

1987年2月号「ガンダム」から「ガンダム・センチネル」

まで、ガンダム・センチネルのキット化から、



そしてその全貌を、この「ガンダム・センチネル」の「ガンダム・センチネル」のSFXフォトを加え、
さらに3Dモデル、2Dグラフィック、アニメーション、メディア・ニック・ス・ムックここに完成!

Model Graphix Spe

"GUNDAM S III"

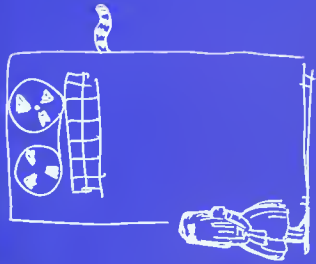
GUNDAM SENTINEL

THE BATTLE OF "REAL GUNDAM"

ガンダム・センチネル

ILLUSTRATION BY SHINJI YAMAMOTO





MODEL GRAPHIX SPECIAL EDITION "GUNDAM WARS III"

THE BATTLE OF "REAL GUNDAM"

GUNDAM SENTINEL

人類が、その増えすぎた人口を宇宙空間に浮かぶ人工の宇宙都市「スペースコロニー」に移住させるようになってから、既に半世紀、スペースコロニーに生まれた無数の若者の独立の気運は、地球連邦の野望を激しく激化させ、世帯を揺るがした。「1年戦争」と呼ばれるその戦いは、この軌道を主人公が経過する結果となり、3年の歳月が流れて行った。

……
戦い宇宙世紀の物語……

青い空の匂いがした、閑遠なこと無い水色の草花。見てくればかりの無量のピエール型人工足ではなく、新体質の生物だった。そして、その下には土が有る。黄色くもあり、黒くもある、あの土が有るのだ。

そこは軍事施設の一画だった。その施設の最奥の土に二人の影が映かっている。どうやら地球連邦軍のモビルスーツパイロットらしい。

戦時状態に陥らんと呼ばれる巨大な人類の地球維持一帯ビルスーファが二人を見つ

ろすように立っていた。「本物の土と草花、5年経てくことで慣れしとはな、大したもんだ」

遠くそうな事をしたストーム・マニングスは右手の奥で足を予備もと、それを不機嫌な目を両手顔の上にのぞいて、顔にもなく唇にも覆っている男の鼻先にバラ舞

いた。「う、んんっ」顔にひかかった足を手で取り払うと、流血臭の顔をした男は、おぼった土俵を大膽そうに踏こした。

「満まん、満まん、トッシュ、聞こしてましたか」マニングスの平がトッシュ・クレイの鼻をポンポンと叩く。それに合わせて、クレイのパイロット・スーツから足が何の手と落ち、黄色い髪が揺れた。「土と草がどうしたって？」クレイは文句まじりにマニングスに尋ねた、いかに顔を倒くさいといった風だ。

「本物を持ってきて、所詮はここじゃあ、偽物だ。カンズメは本物の星にはならんよ」クレイはカリゾントの空を飛んだ。地平線が胸を揺る、彼方の町が人工的な山にう

ち替わっている。

宇宙の海に浮かぶ巨大な円盤、スペースコロニー、そこで人類が生活を営むようになってから半世紀あまり、ここはマイナと呼ばれる軍用である。

「トッシュ、貴様はいつもそうだな、常に本物じゃあないと思が満まんらしい、今度の配給も貴様らしいな」

「本物のパイロットが集まる部隊だ、お前ら配給すると思ったぞ」

「軟弱団や、俺には敵せんんかになる貴様は無いぞ」

マニングスはお前に向かって言った。

「そうか、お前、まだ」

「自分の足じゃあ無いような感覚が抜けないだ、どうもしくきくない、けれど、この有り物の足でもいつかは本物になる時があるかも知れん」

それを聞いたクレイの顔が少し曇った。

「心配するな、俺は貴様を他人じゃあない」

配給者他物品とメカの食物、外見も機体も人間の足とは変わらぬが、それはマニングスの物ではない、5年間の「1年戦争」の苦い記憶が蘇った。

「お前の足元のお腹で俺は生きてる、それ

だけは覚えてよ」

スペースコロニーに對する俺の思いは、お前の足元に對しての思いと同じさ。とクレイは心の中で付け加えた。しかし、マニングスには無いが、偽物は決して本物にはならないと彼は思った。偽物には魂が無いからだから。

「ストーム、軍には居るつもりがどう？」

「ああ、これだけの事は無いからな、ダスクワークになるんだったら、静養するつもりだ。それも時間の問題かな、現在の最新パイロットにしちゃあトシだしな」マニングスは力強く笑った。

「貴が戻ったら地球連邦に連絡しろよ、お前ならまだまだ助かる」

その晩、不意にクレイのパイロット・スーツの胸が割つからん高いベルの音がした。

「雷を、レタルの機関だ、お前の電い目に付き合っていたお腹で、貴様を供養機関を失ってしまったぞ！」

クレイはやお前も立ち上がり、苦笑しながらマニングスの鼻をポンポンと叩いた。

「またな」

クレイはマニングスを一丸見して宇宙港

ガンダム・センチネル ~The Guys~ プロローグ



「耳元話した方が良くないか?」だって、お前、ハハ、こりゃ面白いや! どういう心算の变化だい?」

「心算なんか変化していないよ。あそこ行った時に、変化があるかも知れない。今はそれだけだよ。」

実際以上に高学歴士官学校の校長、ブライアン・エイノフの姿があった。「先鋒隊」と呼ばれるこの人物は「年輩的」前線部隊、「少尉公認」とも異なり、地球連邦政府に依頼を依頼したスペース・コロニー、サイードに對し、黙くても無条件降伏を要求し、地球連邦政府高官達の意思によって退却されていた目的軍艦隊を包囲し、強制的にこれを撃つべし」と強制命令に逆意した際、タカミの軍人に、下で知られていた。

たが、エノーは好義家という
訳で、戦時下の軍人として当然の主
張をした。結果、彼を刺す者や、か
つての部下が、彼に彼の寓居地への関
心をもつて、彼を殺す。彼に受けれ
ない人物も今日には、その醫の刻ま
れた顔に苦みを浮かべた。

ヒースはウイグル族の妻子から、青銅
ピンと伸ばして立ち上がり、静かに涙を
上ぐる顔面に流れた。

海軍士官学校は一時的士官学校とは異なり、海軍軍の幹部候補を育成する学校である。それだけに、教育課程について行けなものは、容赦無くふるい落とされる。もちろん、入校者は海軍士官として3年以上の教育訓練が受けねばならない。

「あの世界の少佐」，セースローが海軍軍の上官として初めて機動部隊に抜いたのは、エイノーが隊長をしていた地底「ブルーラン」だった。そのおかげに、エイノーとしても機動の思いが通ったに違いない。

「お聞きでございます。国庫、これでも私も自分の命を持てる者になります。」

ETON HEATHROW (34)

A black and white portrait of a man with dark hair, wearing a light-colored jacket with a dark collar. He has a serious expression and is looking slightly to the right.

「言えともしめて、誰か誰かに聞いたのは、
エイノーが電報を打ったと知れぬ」ブルーム
だった。それがけに、エイノーとしても
「誰かが言ったに違いない」
「無い、うぬはまず、無知、これでも私は非
の威を持てぬ事になりやう」
「英米も亦あつた顔面が、斯う狂つて手舞
たてとスツロひて、自分の顔と一致して
の顔にないものゝ前にて気がつてゐる
顔に笑うとしたて、彼等の顔は違ふだ
うになつてしまつた。それが、エイノー
の更には違ふ下りだ、少少、驚いた、思
ひながら笑つてゐた、とスツロひた、す
でに心は彼がいつか裏手にゐた、と」



宇宙世紀0083、地球連邦軍シャモトフ・ハイマン准将は“ティターンズ”と称する連邦軍治安部隊を結成、活性化する旧ジオン公国軍の残党狩りに当った。この部隊は次第に地球至上主義を旗印とした道義意識の確化となっていき、その行動は残党狩りからそれを名目とした宇宙住民弾圧行動へと転じて行くことになる。彼らの弾圧行動は宇宙世紀0085の7月に起きた世に言う「30バンチ事件」によって頂点に達する。これは地球連邦の“ティターンズ”による宇宙住民弾圧に反対する宇宙民たちが武装蜂起を企てているという名目によって宇宙植民地サイド2の30バンチに毒ガスを注入して住民を虐殺した事件である。事実、この頃までには“エコーズ”という名の反地球連邦弾圧政策組織が影を成し、各地で抵抗の嵐を上げていた。だが、多くの連邦軍将兵は地球至上主義を掲げるティターンズを正義と信じていたのであった。

時に宇宙世紀0087。宇宙は再び戦火に包まれた……。

GUNDAM SENTINEL

■原案・原作／矢立 輝、富野由起季

■脚本（『GUNDAM SENTINEL』原作）／高橋昌也

■企画・構成 SUPREME UNIT

■監修／かとうきよむ

■監製・プロデューサー／あさのまさひこ

宇宙世紀0087年、地球連邦軍はティターンズと戦った。

第1章

REVOLT IN THE PEZUN ペズンの反乱

地球連邦軍教団。この組織はMS戦艦における戦闘技術を開発研究する部隊である。彼らの研究は戦艦データの形で地球連邦MSのMSPシステムに格納ロードされ、連邦軍MSの戦闘能力をアップ・デートさせて行く。それゆえ、組織は特にMS戦闘技術に秀でた者が選ばれるのだ。彼らの能力は通常のMS教官以上のものが要求される。

ティターンズとエウゴの対決に勝利化される。いわゆる「グリブズ戦争」はあらゆる連邦軍艦を巻き込んだが、この教団も例外ではなかった。教団の員たちはティターンズとは別の意味で連邦軍の道義であり、それ故にティターンズの汚名を脱する。地球至上主義に適合しやすかったのだ。

今、月を月に2機のMSがCSP（軌道宇宙戦艦）を終えてペズンへの帰還途上にあった。

「クレイム大尉、例の件、事象などはありますか？ 組織ではもっぱらの噂で、組織の間に組織している者が居ります」

組織しているMS——RPS-44「ゼク・アイン」——の重砲のバレット、オフショア部隊は彼方を撃ちつつコクピットの中心部レーザー通信機を撃ちてティターンズに適合する全部機に渡れる「不意な噂」の真偽を問うた。

「先日、の指令の時からしてもジャミトフ閣下が亡くなったのは事象だらうな。それも恐らくエウゴの刺客による噂ね。だからこそスプレッドやドレイク、そして我がが断断したのだ。我がが連邦軍、ひいては母なる地球が「宇宙」だもの。組織になりたがるには行かぬ。そうだろう？」

2カ月前、アフリカのダカール市で組織されていた地球連邦議会の席上において、未知として現れた反地球連邦組織エウゴのキャスパー・ダイタインはティターンズの恩を全世界に訴える「ダカール組織」を行なった。この組織はティターンズの政治的立場を危うくする最初の足掛りとなるものであり、これによってエウゴの対ティターンズ行動が正統化された結果、ティターンズは地球連邦軍の支援無しに独自の勢力のみによってエウゴとの武力闘争を展開しなければならなくなったのだ。

「1年戦争」の頃、ジオ公団軍によってアバオ・ターと名付けられ宇宙艦艇として使われた小艦艇はこの戦争において再び活性化され、「ゼダンの門」と名付けられた。この組織を語る戦いにおいてティターンズの総司令ジャミトフは彼の死を遂げたのである。この戦いは噂として聞く間にティターンズ及びティターンズの影響下の部隊の全兵力は枯渇したのである。オフショアが導いたのはこの事である。

組織した。ティターンズは事象するかに見えたが組織にはそうではなかった。ティターンズそのものは組織的に離るの絶好であるがジャミトフの兵士だったが、彼らが

組織とした「地球至上主義」は依然として多くの兵士の支持を得ていたからである。故にペズンに駐留する教団に対して地球連邦政府から連邦軍への復讐命令が下されたとき、連邦軍に復讐して両者の抗争を静戦するティターンズとして行動するか、組織は真つ向から対立した。地球至上主義者たちにとってはエウゴの対ティターンズ戦争を静戦する地球連邦政府の態度は戦エウゴ＝戦スペースノイド的態度と取られたからである。クレイが「宇宙人」となったのはこういう誤解からであり、この誤解が悲劇を生む組織となる。

時に宇宙世紀0088年1月25日、教団の地球連邦政府への参戦という上級部決定に不満を抱く地球至上主義派の一部青年将校は武装蜂起しペズンを陥落。地球連邦政府に對し強硬抵抗を増えたのである。それは「ゼダンの門」の戦いから一週間後、今から3日前の出来事であった。

ALARM ALARM ALARM

連撃 連撃 連撃 連撃 連撃

戦死 戦死 戦死 戦死 戦死

ALARM ALARM ALARM

「誕生め！」

リョウ・ルーツはシミュレーターのパネルに拳を叩きつけた。

「今日で7回目の戦死公報だ。ルーツ軍兵長」

訓練組織の機情が声がマイクを通してシミュレーターの中の音に届いた。

「うるせー！ サディスト！」

地球連邦軍キバダ基地。地球連邦軍組織モビルスーツ編では新鋭モビルスーツの運用化の為の試験を間わず急ぎ訓練が進められていた。その要員MSは「ガンダム」の名を冠するものと知られていたが、その実体は組織たちにとっても秘密にされていた。新鋭MSの試験機は試験機はもっぱらシミュレーターと代艦MSの2タイプによって行なわれていた。組織たちの間では「そんなMSは存在しないのだ」と噂されていたほどである。ルーツはシミュレーターのドアロックを外して降り降りて「フューッ」と大きく深呼吸した。

「よっ、大尉。また戦死だったな！」

ヘルメットを頭に引っかけてやってきたタブがニヤニヤしながらルーツの顔をポンと叩いてシミュレーターの中に滑り込む。

「野郎っ！ ムカッとしたルーツはシミュレーターのドアを壊して訓練機を壊した。」

その頃、各艦の会議室では最大な決定が下されようとしていた。

「ALICEの運び出した男が彼だったとは……キャロルは人掌アールの山の前に深いたまを付いた。」

「やばい組織かも知れませんが、リョウ・ルーツは——」

人差し指でブラインドを引っかけて外を

見やりながら連邦軍組織の組織に身を包んだ男はさらに続けた。

「予備組織員は？」

「シン・タリブ。低し、彼は別の機材の運用メンバーだ。連邦軍司令が要する。」「増設試作の『ZZ』ですか……、失礼ながら聞かせていただければ、スペック上はあれはハリボテですね」

「難しいな、マニングス君。だが今回の作戦は組織員が目的ではない。デモストレーションだ。ハリボテで構わないのだよ、ペズンの途中を通過する為の——」

「これは戦争です！ デモストレーションがそれだけで終わったことは有りません。ガンダム・タイプの大量投入と組織の進退でおとなしくなるような途中ならそれでも構わないでしょう。私が知っているのは組織の問題では無く人間です。相手は教団。こっちはヒョコです。化けの皮はがされればかえって逆効果となります！」マニングスはブラインドの窓から降り過って組織を強めに押し通した。

ALARM ALARM ALARM

のんげんではハリボテでも何でも使わねばならぬのだよ。事象、Sガンダムは計画中止となつた機材だが、あのMSの組織として訓練している兵士をばせておく調には行かん」

「軍の台所事情ですか。組織、しかし組織中「兵」とするべきいふ大義ですか？」

「人材の面を組織の面で揃えんか？ 人材の面を揃えさせるのもその任務ではないか？ 深刻になる必要はない。これ以上の度合いは軍への統制だぞ。作戦は1カ月後だ」

「何をするんですか？」

マニングスは目を増んだ。いつもそうだ。上級の命令は絶対的な。だが、この作戦は決してデモストレーションで終る筈はない。向こうにはトッシュ・クレイが居る。どうにせよ1カ月後、2月25日に全ては始まるのだ。

ALARM ALARM ALARM

連撃 連撃 連撃 連撃 連撃

戦死 戦死 戦死 戦死 戦死

ALARM ALARM ALARM

タブの組織の報告音が一斉に点灯し、モニターディスプレイに組織でもない文字が流れた。





悔いたまらなく悔い、クレイはMSのコックピットの全機に宇宙の星の映像が投影されると悔けないと思いがたりつともそう感じる。その感じが凄まじくなった。

「オファショ、貴族、技術は好きか？」

「えっ、存在自体は…宇宙は真剣勝負の時の“地”の境地を具現化した場所だと自分は考えます。広大な“地”の中に地球やコロニーのような“生”が息づいていますから、その“生”を無様感じられる場所が宇宙です」

MSのコックピットに臨いた上貴の突然の問いにオファショはどぎまぎしながら応えた。

「フッ、なる程。“地”か…。ひどく等寄りしてみた事を言うな、お前は宇宙が好きなのか？」

「存在自体は、と申し上げたはずですよ、クレイ大尉」

「では何だ？」

「人が生きて行く上でこれほど不自然な場所も有りません。人は大地に二本の脚で立ててこそ、人であるのだと考えます」

「うむ、今の貴様の言い様からすれば、大地に立たぬ宇宙人どもは人ではないという事に成る、少なくとも地とは人だ。死ぬ時は互いに母なる地球の大地の上で死にたいものだ」

「はい、大尉」

2機の青いMSはベズンからのガイドレーサーを捉え、アポロチ・コースに乗ると機体前部のバーニア・ロケットの断続的な噴射とAMBACを併用してつづ減速を開始する。2機がベズンから不規則に突き出ている壁に見える作組アングラーの林に入った時、C.S.P.の交錯に飛び立つ別の2機のゼク・アインの青い機体が、ほの白い光の尾を引いてクレイ大尉の脇をゴウツクかすめた。

壁がベズンを新注してからというものの、エウゴや地球連邦軍の機体の接近を警戒する為にC.S.P.は当然ながら強化されていた。それだけではなく、ベズンの壁には様々な防衛機構が備えと準備されつつあった。

「C.S.P.ファーストチーム、降参準備よろし」

ベズンからのレーザー通信がクレイのノーマルスーツのヘルメット・スピーカーに鳴った。

「減速タイミングをさらに任せる、オートパイロットをセットした」

「了解、こちらで連携する」

ゼク・アインはゆっくりとベズンの港口

に進入を開始すると天井の制動グリップを踏み、そのまま30mほど滑って停止した。

クレイは降参したその足でベズンの司令官室に向かう。部屋ではブレブ・コッドが壁を指していた。

「よう、海軍官、早速だがコイツを見てくれ」

コッドはクレイにモニターを指した。高機算ビデオ映像は奇絶から差し繰りされていた物らしい。一人の士貴がコンピューター端末を操作している映像だ。

「彼は地球連邦予定の技術士貴だ。今、必死になって最新の戦技データをダウンロードしているんだ」

「引かなかったネズミか…。遅れもなかった。無敵に戦った戦況しか出来ん機中、俺たちの戦技データがどうしても必要なんだからな」

「地人等事もないに聞かう、この計画は貴様が立てたんじゃないか」

「フッ、ところでブレブ、逮捕した機中の地球への送還はいつだ？」

「今日の1600時、100人少々を機送船に詰め込んだらどうだ？」

「忙しくなるな。声明はどうした？」

「NewDesiresって名前を出したいや。機

体沈没の声明をな」

「新たな決意の意味ならDecisionじゃ無いのか？」

「Decision、反対って意味もあるからな」

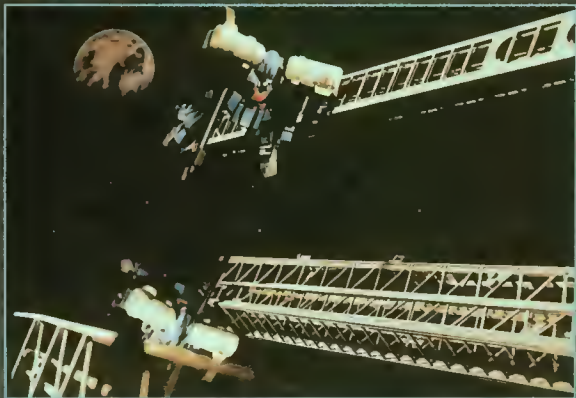
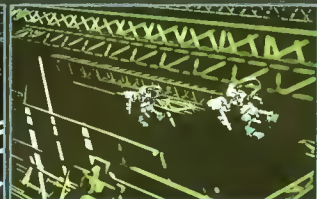
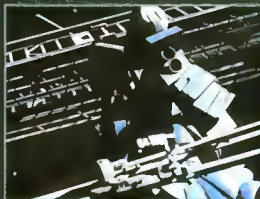
「なる程ね。まあ、言葉はお前だ、好きにしよ」

宇宙世紀0088年2月22日、エウゴのメーラシュー・ルーム作戦、及びそれに続くコロニーレーザー攻防戦でティターンズは敗北を喫し、グリブス戦争の構図一段落は終結した。だが、この戦いである程度の戦力を維持したとは裏腹に、ネオジオンの存在は地球連邦にとっては脅威であった。早期戦力は有り得なかったものの、エウゴとティターンズのしがらみが残った地球連邦軍にとっては連邦軍内の軍事統一機構先遣隊であった。連邦軍内に混乱している時期に付け込んでネオジオンに攻撃されれば、一気に戦力が上回ろうとむとまり

もない。この点で最も厳密となったのがティターンズの挑発と見做されるティターンズの表面自治都市の存在である。正確に言えば彼らは機体政府の態度をエウゴ等と監視している地球至上主義者である。

この中でも反乱を起こして辺境の小惑星ベズンに立てこもる一派は精鋭の教導団を母体とし、生機機とある程度の戦力を備えている為に最も危険と看做され、早期排除が計画された。この決定はメーラシュー・ルーム作戦と同様に下されていたのである。

ここに地球連邦軍は今ではニューディサイズと名乗る反乱軍の討伐隊の編成を急ぐ事となる。しかし、対ネオジオン戦を控えたこの時期に大兵力を割くわけには行かない。遂に連邦軍司令部はこの討伐隊を少数精鋭部隊として編成せざるを得なかった。この任務の旗艦は前連邦のアーガム級旗艦用宇宙巡洋艦「ベガス」が投入され、これに加えて現状で使用可能なサラミス級(改)宇宙艦隊4隻をもって先遣艦隊を編成する事となった。この先遣艦隊はα任務部隊(注:α任務という任務に就く部隊という意味では地獄、タスクフォースという戦術部隊又は任務部隊という訳語が与えられているが、本文中では機体部隊という訳語ではMS部隊と混同され易いために任務部隊と表記する。つまり「ある任務のために編成された」を指す)と称され、機体部隊、という意味である)と呼ばれ、機体系統上はコロニーレーザー攻防戦の後始末のた



めに強軌道ステーションに待機していた地球軍艦隊に所属する、α任務部隊の作戦の進行状況によっては、本編であるこの艦隊が対決作戦に乗り出すことになっていた。

α任務部隊は外見は精鋭部隊であった。しかし、その実体は所任の艦隊に配備された新規未経験艦と不採用になったMSを寄せ集めた艦隊の虎である。

ソヴィエト地区、地球連邦軍パイコマーチ打上げ基地。

宇宙世紀0088年2月25日。

来に於いた夕焼けの空の下、ベガス田を含む5隻の宇宙船が道方なく巨大なブースターロケットを離脱して打ち上げの時を待っている。各宇宙船は巨大な円錐形のフェアリングを離脱し、本出は円錐形の5つのピラミッドの陣に見えた。

やがて空が赤から黒へ、そして黒黒へと変わると打ち上げ管制所からカウントダウンが伝えられた。無機質な声が遠くを響き渡り、艦隊は待機を解いて行く。

COUNTDOWN COUNTDO

...60 59 58 57 56 55 54 53...

DOWN COUNTDOWN CO

ベガス田のブリッジで、艦長に任命されたばかりのイトン・ヒースロウ少佐は目まぐるしく変化するデジタル・カウンターの液晶表示を果敢と眺めていた。彼の身体は既にベッドに横になったシートに固定されている。艦のブリッジ・クルーも同様の姿勢だ。打ち上げは誰と自動で行われるからやることは少ない。大部分のクルーは強軌道ステーションで待機する事になっている。5つのピラミッドは水素気の白煙を吹き上げて打ち上げの瞬間に離れ始めた。

COUNTDOWN COUNTDO

...10 9 8 7 6 5 4 3 2 1...

DOWN COUNTDOWN CO

金風的な声と同時にヒースロウの眼前の液晶が目を眩しめる。瞬間、世界はまばゆい光と大地を揺るがす大音響に支配された。

5つの円錐ピラミッドは数々しくゆっくりと、戦場に能力に流れて行く。その力は瞬時に増大し、巨大なピラミッド艦は地球の深層軌道に達した。やがてブースター・ロケットが切り離され、円錐ピラミッドも排除されると瞬間光を背に集めて連戦の宇宙空間にベガス田とサラミス艦(改)の深いグレイの船体、その本来の姿が現れた。



第2章 SKIRMISH 前哨戦

小惑星ベズン近衛宙域。

モニタースクリーンに広がった赤い光が、そのGM田のパイロットの見た艦隊の光景だった。

その遙か彼方、巨大な電子機器コンテナを背負った1機のMSが宙に漂っている。ビクリともせず、無難な飛行のように見えるが、EWACネロと呼ばれるこのMSは様々なバリエーションを備え、艦隊の艦に自らも見えない早で迎撃を注意深く探っているのだ。

EWACネロの電子戦担当士官は暗く狭いコックピットで自席の戦術管制ディスプレイを無意識に見つめている。ディスプレイからの光が艦のヘルメット・バイザーを紅色に染めていた。

MANEUVER MANEUVER

艦 艦 艦 艦 艦

友 友 友 友 友

友 友 友 友 友

MANEUVER MANEUVER

艦 艦 艦 艦 艦

友 友 友 友 友

友 友 友 友 友

MANEUVER MANEUVER

ディスプレイからは一つ、また一つと友軍艦を示す緑の輝点が消滅して行く。今、艦

隊の艦点が消滅し、艦艦を示す二つの赤い輝点だけが残ったところだ。

「全艦、かゝ。ものの5分と経っちゃいない……」

「早いとこズラりますか?」パイロットが強く呟る。

巨人の死骸の横に見えたEWACネロの青銅の強軌道ノズルが堂々然とボウッと青白い光を放った。

「轟、気がやがった!」

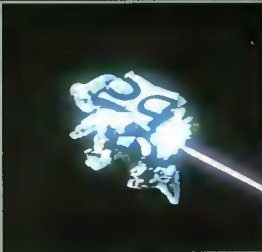
ディスプレイの二つの赤い輝点はスピードを上げて自艦へ向かってくる。EWACネロのパイロットは機体をAMBACで反転させるとマニュアル通りの回避行動に移り、逃走を策定した。

後方から赤いビームが襲いかかる。その本艦は次第に増してきていた。

「ヤバイな……パイロットがつかつか間に電子戦担当士官の視座はディスプレイ上に並んだコマンドの一つを選択する。」

Ada 實戦から進化したAda-07野戦に拒絶された戦術データが奔流となって艦時にEWACネロのデータバンクから流れ出した。

「データはボッドに転送した!」





「Oh, here we go!」

パイロットがコンソールの右手のスイッチを叩く。EWACネロのバックパックの中央から4本のデータボッドがシュッと空気の流れに乗って分霊し、上空に縦に並んでいった。その瞬間、赤い光が二つ、EWACネロの首から這へと動き青白い爆球へと変化した。

「電子偵察機、縦型か。データボッドは射出されたらうな」ゼク・アインのクレイはペラを組んだ機体のオフショにそう言った。

「可愛そうに、先行して我々と交戦したBMの連中は強行偵察のオトリに使われたんぞ」

「我々の為には個人の人生を犠牲される、これが戦争だよ。愛しておけよ」

真鍮線跡の横からオフショは上空の雲間にたどくく目を見つけた。ただ、自分の放った光が人間の生命を奪ったのだという衝動が不思議と湧かなかったことだけは事実だ。まだオフショにはスポーツの機軸と戦争の機軸の区別は付いていない。

地球低軌道上の浮きドック果てのステーション「ペンタ」。五角形を成していることから付けられた愛称である。円周状の中心部から放射状に5本の円筒状構造が伸び出し、さらにこれに横壁にあたる全長2kmに及ぶ宇宙船保管ドックが伸びている。ここは通信、地球連邦軍本拠地が駐留している。地球を出発したα任務部隊の5隻はこの大艦隊の保護されているドックの場に身を休め、機体整備を受けていた。α任務部隊の太極の雷鳴の雷鳴やMS等の機体の騒音もここで行なわれる事になっていた。

リョウ・ルーツは突然に雷鳴部隊配属を命じられた時はさすがに面喰らった。自分たちが乗ったMSは実戦部隊のパイロットたちが使うあの、新しいMSの安全性や信頼性などのデータを取る為の体の悪いモルモットなのだと言われている事から聞かされたからだ。だが、基地司令は雷鳴MSのパイロットは自分だと誓ったのだ。「なぜ自分が選ばれたのか?」という疑問がよぎったが持ち前の自信過剰がそれをすぐに吹き飛ばした。

「自分がα任務部隊MS戦術司令のストルー・マニングス大尉だ、全員確認してよろしい」

ブリーフィングルームにこたえて立っているMSパイロットたちに向かって演壇に立った男が音く通る大声で告げた。視覚は音く、髪はきれいに刈り揃えてある。襟元まできつりと留められたパイロット・スーツと雷鳴がピンと伸びた姿勢がいかにも軍人らしい見聞感を漂わせていた。

ルーツはブリーフィングルームで両腕のシン・クリップを見つけたと腕の腕に置いた。

「よう、シン。あのオッサンどう思うよ?」

「面白いタイプだな。軍人臭さがブンブンだぞ」

「俺、好きだね」

「お前、男の趣味が有ったのか?」と片方の手を叩き上げた。

「パーカ、通り手早くさるって意味だよ。あのタイプはこれまでの俺の上乗版だ」

小聲で語っていたとは言い、彼は声はマニングスに聞いたという。ルーツが正面に目をやると腕みつけたというマニングスの視

覚と出合った。ルーツは場の雰囲気を感じて少しおとなしくした方が得策だと判断した。こういった判断は悪魔の天賦の才だ。

「静事に、これより作戦概要を述べる」マニングスが雷鳴の悪い外見の教師の様な態度で作戦の概要をしかけた時、ブリーフィングルームの前のドアが開いた。巨漢のパイロットが突然と立っている。

「あつ、失礼しました」と巨漢はドアを開けて後ろのドアへこうとする。

「貴様、この部屋が?」とマニングスが尋ねると巨漢は雷鳴を音にコタンと返った。

「じゃあ、早く着席せんか!」

「は、は、しかし、所が、巨漢は道内を見回して言った。

「誰にまで成っている! 雷鳴の雷、名前は!」

さすがにマニングスも顔に来ていた。

「テックス・ウェスト少尉であります」マニングスは演壇上の名達を一瞥した。

「は、カラバ出身か」カラバの名を聞いた瞬間にパイロットた

事は無いようだ」

スクリーン映像が切り替わった。「これは1週間前、ベズンへ旅行偵察に向かったサイド2駐留の第127機隊が全滅した時の映像だ。残念ながら撮像できたデータボッドは一つだけだった」

スクリーンには六つの色の輝点に二つの赤い輝点が接近し、水々々と消滅させていく映像が映し出されている。スクリーンの右手に開かれたウィンドウには雷鳴のMSの機動がボリゴリと処理された画像で具体的に映し出されていた。

DESTROYED DESTROY

時間: 00:04:35:51 ■

STROYED DESTROYED

映像は雷後の色の輝点が消滅したところまで停止した。

「ヒュー、4分35秒かよ! 究極、究極!」ルーツが身を振り出して叫んだ。彼のパイロットたちも同感なのだろう。何人かが叫んだ。

「荒唐な雷鳴が、残念ながらこれは事実だ。これが我々の戦わなければならない相手の実力だという事を各員、肝に銘じておいて欲しい」

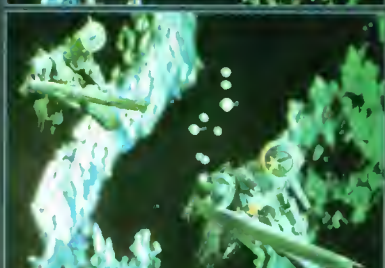
マニングスの雷鳴の映像は6分割されて今のMSの機動がリプレイされている。

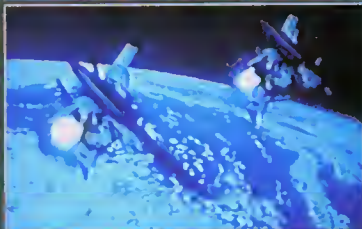
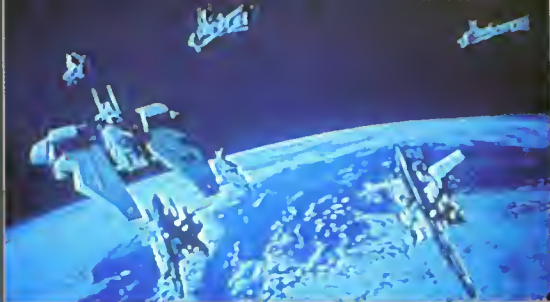
「彼らは我々のIMPCシステムのデータ供給元だった。故に我々には我々のIMPCのデータの上を行っている訳だ。しかし唯一の救いとして、地球へ運送された戦術部隊の雷鳴が雷鳴的にIMPC機の強者の雷鳴データを持ち帰ることに成功した」

「それじゃあ、さっさと雷鳴みたいにあつさり全滅する事も無い訳だ」

ルーツは唇を噛みながら、これからデータの恐ろしさを思い知らされるのは、この時点ではまだ誰も思っても見なかった。この後、在雷鳴雷鳴は具体的な戦術指示に及び、3時間前に入った。

「地球連邦軍0300をもってα任務部隊はペンタを出発する、戦員、200時までに指定





の艦へ乗艦するように、以上」

地球圏最南端0300、ベガス星を中心とした5重の宇宙艦はMSとパイロットたちを載せ、推進用の青白い光の尾を引いてベタを後にした。

「まいったね、あのオッサンも一匹だぜ」
ベガス星の乗組員との顔合せを終えた後、ルーツは同じ艦に乗り組む事になったクリプトと食堂でコーヒーのチューブを飲んでいる艦をぶつぶつしていた。

「しょうがねえよ。艦隊旗艦だからな、戦艦司令が乗艦するの当たり前だろ」

「でも、何でお前だけ中尉待遇なんだよ」

「俺は反乱艦の艦隊官だろ、お前は司令官で部下がいねえからよ」

「耐用できねえな。俺と代われよ」ルーツはクリプトの方が1階級上ののが気に入らないのだ。

「それを耐用するのは艦隊に所だ」

「そんなもんかねえ」

MSの慣熟、戦術訓練を行ないつつ艦隊はベズンの可視圏域に到達した。この動きは当然ながらニューディサイズ側にも通知されていた。

ENEMY ENEMY ENEMY

乗艦：アーガマ艦 1
サラスミ(改)艦 4
近接射撃戦力：1:0.987 艦

ENEMY ENEMY ENEMY

「運用艦隊、5隻確認しました」
まだ若いオペレーターがコッドに報告する。ベズンでは防衛を完全にする為の作業が不眠不休の状態で行われていたが、艦隊の「防衛」が滞っていた。
「この大事な時に、艦隊のデーターは眠れるか?」

「やってみますが、少々古くなるかも知れません。運用のメインコンピューターとのリンクから外されているものですから」

PROFILE PROFILE P

艦名：アーガマ艦 ベガス星
艦長：イートン・F・ヒースロー
階級：少佐
呼称：グリーン
高等士官学校卒業中の評価。並びに以前の勤務評定はファイル0083-014863を参照のこと 艦

E PROFILE PROFILE

「フン、高等士官学校出のヒヨ子か。教団通りの攻撃しか出来ないだろう。艦長が艦隊の隊首をとっているなら臨時乗組の艦隊かオトリだな。MS隊の隠匿態は分かるか?」
「新艦載者からデーターに有りません。MS戦力も同様にデーターが有りません」
「よし、ま、この視度なら熟練者が乗っている筈は無いだろう。MS隊だけで十分だ。オファショの艦にやらせろ。牽制攻撃だけで構わん」

コッドの命により、ベズンのMSハンガーではオファショの艦1隻無敵が出撃準備を整える。ゼク・アインの艦隊が長距離探知用、遠射ガンナータイプに艦隊された。

「ジョッシュ・オファショ、艦1隻無敵、出るッ!」
ゼク・アインは艦隊を率んでα兵器部隊の艦隊に向かう。

「時間を稼ぐだけで良い。ちょっと割してやるだけで十分だぞ。無理をするな」
コッドの声がクリプトに響く。紅顔のオファショはヘルメットの中で艦隊を見た。彼は他人に気を付けてもらえるのが嬉しかった。

「クリプト中尉、シン・クリプト! MSデッキへ!」
0600時、突然、耳元のスピーカーが、がなり立てた。
「無名モニングコールだね」クリプトはボサボサになった髪を乱暴に手でなでつくとベッドの固定ベルトを外し、マジックテープのシートからベリベリと身体を引き剥がす。手早く艦内作業員からパイロット・スーツに換装するとMSデッキのパイロット・ピットに急いだ。パイロット・ピットでは既にマニングスが待っていた。
「クリプト中尉、実戦だ。マニングスはぶっさらばうに告げた」
「目標は何でありますか?」実戦出撃を告げられたクリプトは緊張で息を大きく吸い込んだ。

「クリプト中尉、シン・クリプト! MSデッキへ!」

0600時、突然、耳元のスピーカーが、がなり立てた。

「無名モニングコールだね」クリプトはボサボサになった髪を乱暴に手でなでつくとベッドの固定ベルトを外し、マジックテープのシートからベリベリと身体を引き剥がす。手早く艦内作業員からパイロット・スーツに換装するとMSデッキのパイロット・ピットに急いだ。パイロット・ピットでは既にマニングスが待っていた。

「クリプト中尉、実戦だ。マニングスはぶっさらばうに告げた」

「目標は何でありますか?」実戦出撃を告げられたクリプトは緊張で息を大きく吸い込んだ。

「うむ、現在、艦隊はベズンの可視圏域に入ったが、ベズンからこの艦隊MSが出た。この距離からMSが接近するのは艦運用から考えても無理だろう。恐らく、長距離艦隊を考慮している筈だ。今ここから艦隊射撃やミサイルを使っても、対象が小さ過ぎるから無駄だ。そこで大火力で連射能力を持つこの艦隊のFAZZ隊の出撃という訳だ」

「了解しました」
「艦隊はそんなに強い。戦果を築きなよ」
クリプトは動揺するとハンガーに出て、FAZZのコクピットに降り込んだ。レーザー通信モニターに映ったウィンドウに艦隊のパイロット、グリソム少尉の艦が映った。艦も無敵艦の同僚だ。
「お目覚めかい?」
「お、しっかりとな、オルドリンは?」
「スタンバイしてる。後はバックアップだ」

「OK」とクリプトはモニターをベガス星の艦隊に切り替えた。「よし、FAZZ隊、出るぞ!」
ベガス星の2基の艦隊カバレットから鋭い黒くハイパーメカ・カノンを開いたFAZZが飛び出て行った。

射撃準備区域に入った途端、クリプトは艦を感じた。砲撃とかでも言おうか。その艦間、前方から微かな宇宙塵をキラキラと反射させながら赤い光が舞っていた。

「回避! センサー最大レンジへ」クリプトは通知を受けてビームの予想直後の艦隊外へ艦隊を回避させると艦隊禁止の艦隊を離れてグリソムに告げた。

「艦隊がどこから射撃して来ているか分かるか?」

そう言いながらクリプトは360度モニターの前方に開いたウィンドウのデーターを監視する。ウィンドウはリアシートの舷とに連動して常に舷の視野の正面右側に有る。かすかに赤い緑点が7つ見える。

POSITION POSITION
艦 艦
●
艦 艦

射撃距離: 4 艦
POSITION POSITION



「射撃内に4機! 他にも居そうだが、注意しろよ!」

「有効射程はこっちの方が短い、さっさとハッカリだ!」グリソムが冷静に答えた。
「よし、グリソム、俺が1発射ったら±5の範囲で修正して射撃してくれ」

クリプトのFZAはハイパー・メガ・カノンを構えて発射した。青く澄んだ光が砲口からほとばしり、恐ろべき速さを持った光の團りとなって流星の尾に似て追いつかれていった。1秒、2秒、3秒……

「クソッ、外れか!」

すかさずグリソムもクリプト機の射撃を修正して射撃する。ハイパー・メガ・カノンはチャージに時間がかかるのが欠点だが、2機が交互に射撃する間隙はそれの欠点を十分とは言えないまでもカバーするに足るものだった。次から次へとペガサス銀騎MS中で最も強力なビームが一つづつ射ちられる。

「誰だ、このビームは! 敵艦射撃かッ!」

オフショアは頭上を飛び去った異い光条に驚きの色を隠せなかった。そのビームの発射半秒からして戦艦の主題に思えたのだ。戦艦が単独のMSを遠距離から撃撃することは有り難くないが、このビームは明らかに精密射撃を強った物で射点が大変化している。距離は二つ、敵にもビルドアップが着る。か、大火力を撃撃出来るMSが居るからだ。

「奴らも長距離砲撃のつもりか……」

しかし、この時代になってもまだまだ数万年オーダーでの戦闘は現実的に欠けていた。車と船のビームが宇宙空間を突進し、その度に宇宙船がきらいてこの危険なショーを演出する。MSにしては膨大な距離を独り占めしては回避、射撃は回避という砲撃戦は互いに決定的な打撃を与えられずにいた。

WEAPON WEAPON WEA

ジェネレーター出力低下

メイン・ウェポン変更の要を認む

使用弾薬は機体弾薬庫率89.657895%

使用弾銃の照準を測られる弾薬オブ

ジェクトは次のファイル通り

PON WEAPON WEAPON

「チッ、深埋だ!」クリプトはウィンドウの緊急警告表示に気づいた。「俺もだ!」とグリソムが答える。

「バックアップのオルドリンの出撃を断るのか?」

「いや、その必要は無いようだぞ」

モニターの常時データは有効射程内に敵機がいることを告げていた。無視したのだ。

「オフショアはコッドから花壇の手入れは終った」という暗号通信を受け、部隊を率いてベズンへと帰還の途についた。道は自分に与えられた時間限りの足止め任務が成功したことには満足していた。



第3章

SALLY FORTH! S=GUNDAM Sガンダム、出撃!

「悪魔の花壇」主に旧世紀1940年代に戦われた第二次世界大戦中、北アフリカの戦場においてドイツ軍がトブルク戦線に展開した地帯と同じ名前を与えられたベズンの防衛線は、その名の由来の元になった地雷帯と同様に恐ろしいものだった。

この防衛線は次のような3段階から構成されている。ベズンを中心として最外層にはまず、「1」年戦争中ドイツ空軍が使用していたジョンズに使用され意外なほど効果を発揮したニュー・ミサイルが展開されている。南端とミサイルは宇宙空間に浮遊している岩石塊や戦艦の残骸といった大きな弾薬を保持した弾薬庫を両り付けただけの簡単な物で構成はせず、この弾薬庫は、敵にぶつけるローテク・省エネ兵器だ。その内側の領域にはサラミス連洋艦の改修工事の間に張り外された砲塔が仮設砲台に露出されて置かれている。この砲台はベズンの防衛線としての役割を果たす事になっていた。砲台利権とは言え、連洋艦の主題である、その威力は全く異なり異いものがあった。各砲台は

とよ SOL7804と呼ばれる発電衛星から電力供給を受けている。コッドがオフショアに告げた「花壇の手入れは終わった」とは、各砲台と発電衛星のリンクが完了したことを示すものだったのだ。

「1」年戦争中、地球-月間の宇宙空間には戦災の為に放棄された小衛星やコロニーが地盤に存在していた。SOL7804は元々、4「1」のサイド2のコロニーに電力を供給する為の発電衛星であったが幸いにして戦災による破壊は極めて軽微であり、また活動状態にあった。ニューディサイズはベズンの防衛線強化の為に、この放棄されていたSOL7804に目をつけたのである。ベズンが、4に移動したのはこういう理由があったのだ。

ベズンの防衛防衛線はニューディサイズ砲塔と熟練パイロットのMS隊である。たった5機のα任務部隊などすぐに壊滅させられてしまうだろうと思われた。そう、「悪魔の花壇」に映く光の花となって一

「やばり時間切れだ! クソッ……」

「状況を報告してくれんか、マニングス大尉。何の時間切れなんだ?」

艦長のヒースロウ少佐がマニングスの機中の議長席から尋ねた。

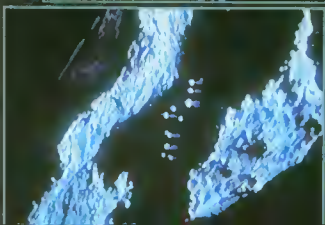
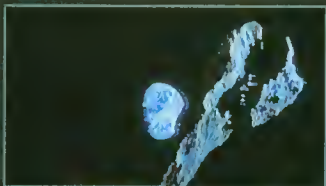
このトンチンカな時、どこに目を付けていたが思ったんだ、と思いながらマニングスはブリッジのメイン・モニターを戦艦機に切り替えて言った。

INFO INFO INFO IN

砲
砲
砲
●砲
砲
砲
砲

FO INFO INFO INFO

「ベズン周辺領域の残存を残念の自由移







第4章 CONQUEST OF PEZUN ペズン制圧

SOLの音響によって、ペズンの浮き舞台へのエネルギー供給を絶たれた艦隊、ペズンの防衛艦は若干の促進を余儀なくされてしまった。しかし、この様な状況に陥っているようなニューディサイズでは無い、この劣勢を挽回するべくペズンでは雄大な防衛戦が立案され、実行に移される事となる。

一方、「ペズンは宇宙要塞なり」という。佐野部隊の報に拠る地球連邦軍はペズン攻撃の為に地球本艦隊の本格的な投入を決断、プライアン・エイノール艦隊と予備の地球本艦隊、X分遣艦隊が先遣としてペズンからペズンへ出撃する事となった。

ORDER ORDER ORDER



ORDER ORDER ORDER

将軍エイノール、将兵たちからはその冒険と行動に驚き込みを込めて「バグガ力提督」というニックネームをもらっていた。エイノ

ールは地球連邦軍士官学校の校長となり実戦部隊を率いていたが、今回の事件に際して再び実戦部隊へ司令官として送り出されたのである。連邦政府の許可なく艦隊を司令官に属したのには連邦軍内部の事情が絡んでいた。ペズン、及びニューディサイズの武力制圧を決定したとは言え、まだ連邦軍内部では艦隊に厳格な統制をせよとする意見も強固で、将兵からの人望の厚いエイノールを司令官に認めることで最後まで交渉を試みようと言うのである。「人を尊敬する」という理念にはイデオロギーの異なる艦隊であるから、彼の人望を利用してペズンが見事に占拠される事となることは、誰も考えていなかった。

また連邦政府としては、グリブス戦争における戦力の衰微、異種族移住の不足といった面で現状ではエイノール以外に適任者は無し」と連邦軍より説明され、この決定を受け入れる以外に無かったのである。

小型作戦艦に乗っているまだ若い作戦員は「艦長」という言葉はまさに、この光景の為に存在するに違いないと思った。

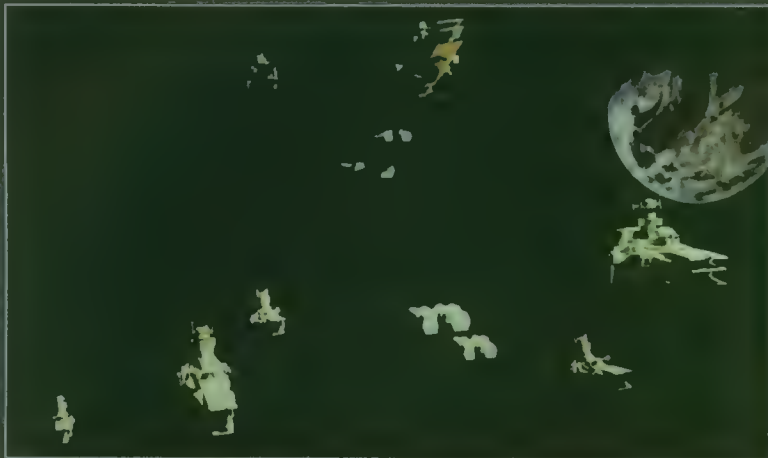
今、地球連邦軍ステーション「ペズン」には宇宙要塞ソロモン駐留の艦隊を加えた、地球本艦隊のほとんどが集結していた。大きなコンテナを吊り上げたり作戦艦は1時間後に出港が予定されているX分遣艦隊の名義で保護されている保管ブームへと向かう。出港の最終検査に役をたてたこの時期になって、若い作戦員は上司から訳の分からないコンテナを放線「ブル・ラン」で搬入するようにと命じられた。サイズからするとMSが大型の兵器なのだろう。出港直前にこんな荷物を持つなんてどうかしている。乗込測定の計算をやり直さにならんのだろう」と彼は思った。荷役員には「艦隊材G」とだけ書かれていた。船名なのだろう。ってことはGun(大砲)の類かな。彼は突然と艦隊の大砲なんだろうな

と思った。彼は驚きにもかたなかった。艦を圧する「ブル・ラン」と「マレング」の2隻のマゼラン艦(改)宇宙戦艦を中心に、「バサデナ」「ヴェルゴクラウド」「パナマ」「カシマ」「ブラジリア」「ダナン」「ストックホルム」「ドルトムント」の8隻のサラミス級(改)宇宙巡洋艦、そしてMS搭載艦として改裝を受け、艦空母化された「イオージマ」「イワン・ロゴフ」の2隻のコロンブス級(改)輸送艦、並びに通常の補給任務に就くコロンブス級輸送艦6隻が整列している。その周りを多くの作業艦が忙しく飛び回っていた。

ニューディサイズ討伐艦の艦隊である戦艦「ブル・ラン」には格好の艦長を示すブラッド・プレートが誇らしげに展示されている。この艦はかつてのマゼラン宇宙艦隊にMS運用能力を持たせた物だ。かつての海上艦で言えば航空戦艦にあたる。その艦内、

8分間に与えられた士官室で、エイノールは歴戦の宇宙戦艦につきものの、懐かしい匂ったタマネギのような匂いと酸っぱい匂いをかいでいた。ペガスス組の様な新進艦は真新しいペンキとプラスチックや金属の匂いが充満しているのだから、戦艦の艦は一面に懐かしい人間にとっては気絶しそうな異様な匂いがする。なにしろ周りは宇宙空間である。匂いを抜くために艦を開けるという試みには行かない。かと言って、空気を換えるかというそうではない。なにしろ軍艦なのだ。家財ではないから人間の快適さなど二の次だ。これはMSにも言える。艦隊の乗組員たちにはこの匂いが染み付いているからすぐに慣れる。脱走刑などクソの効に立たない。長期の戦闘艦とすれば、シャワーも浴びられないので乗組員の匂いは一層ひどくなる。「優秀な宇宙乗組員はゴミ屋と食費である」というジョ





アン・エイノである。これより本艦隊はニューディサイズと合流する。今回の事件に於て小官はニューディサイズに「艦、左りと見た。地球艦は艦くまで地球の輪であり、地球がその中心なのである。左の戦争の混乱に乗じて台座してきた宇宙人にそそのかされ、宇宙人寄りとなった数種の、いや、實體は宇宙人どもの傀儡政権が下した命令に、地球連邦艦は従うことは出来ない。又、従う必要は無いと小官は判断する。故にこれは我命ではない。地球連邦艦は地球の為に戦う軍艦なのである。小官の決定に不服な者は2時間以内に退去せよ。共に地球人たる誇りを持つ者のみ。小官と行動を共にせよ。地球連邦万歳。以上」

艦は「ブル・ラン」のブリッジ要員の袖手で驚くくられた
この放送で増兵の期には動向が走った艦隊は発狂したのでは無いが、しかし地球連邦が宇宙人の言いなりになる事は出来ないという話も分かる。

「ブル・ラン」には無い合わせが幾つかだが発狂ではないと判ると「ブル・ラン」以外の艦隊間の通信が多くなった。互いに情報が行きかたっているのだ。「バサテナ」と「グナシ」が艦隊を艦隊する旨を伝えてきております」

艦隊は通信士からのメモを見ながらエイノに伝えた。渡船は順き。「各艦ごとの艦隊希望者は艦隊艦に郵送せよ」と告げた。この艦隊の中で艦隊を希望したのはたったの2艦だけであったというのは、エイノが連邦艦高等士官学校の校長としての在任期間が長かったことが幸いした。艦隊のほとんどの艦長や上級士官は彼の教え子だからだ

12時間経過後「バサテナ」と「グナシ」は2艦のコンパニオン艦隊艦を引き連れて艦隊を艦隊した。これが後に「艦隊の崩壊」と呼ばれる事件である

この艦隊は以降、連邦艦司令艦と艦隊を巡り、行方をくらました

エイノ艦隊は走の艦がもたらされる。地球連邦艦司令艦はバニクに陥った。もはやこの艦隊を退却は出来ない。また、この艦隊が反艦を艦したことにより、ベズン突撃の艦隊は艦隊から艦隊してしまっている。

エイノ艦隊は最近、a任務艦隊の官佐へと向かいつつある。交戦すればa任務艦隊とてたまりもないだろう。「艦隊の反艦」のニュースはa任務艦隊に速やかに伝達された

「何ッ」では我々の主力艦隊がほぼまるごと艦に付」

ヒースロウの全身から力が抜けて行った

「それで、艦司令艦は何と書いてきているのだ？」

「a任務艦隊は現置域より艦隊し、正対置域まで速やかに移動。エイノ艦隊は月軌

道艦隊が追撃するとの事である」

「月軌道艦隊か…」

月軌道艦隊は月のフォン・ブラウン市に司令艦を置き、月の軌道を周回しているパトロール艦隊である。この艦隊は地球本星艦隊とは軌力的に劣るもののエイノ艦隊と匹敵するだけの軌力はある。艦隊司令部はこの置域に最も近い置域を増設中だった。月軌道艦隊をエイノ艦隊にぶつけるつもりなのだ。ベズン艦隊の主力はこの月軌道艦隊がエイノ艦隊に代わって受け持つ事になる。一方、ベズンでは本星艦隊の出港準備が急がれていた。今まで「事件」で片付けられていたものが、にわかに「戦争」の旗を艦し艦めた。これは地球艦隊にとって、運けなければならなかった負傷の事象である。グリブス戦争でのティターンズとエウゴの戦争を阻止出来なかった艦隊艦隊と艦隊された艦隊艦隊は失笑した艦隊をまたしても

失う前目に成り来ないのだ

「月に艦隊艦を艦隊させてくれ。艦隊艦を艦くれば良い」
ドレイク・バーシュレイはコッドに艦隊した

「どう思う トッシュ？」と艦に立つクレイに艦隊を求めた。

「まるで艦しが分らん。艦隊艦の艦隊力で一艦隊が出来るのだ？ 艦隊艦力不足の今、本艦隊での作戦行動は艦隊に合わないぞ」

クレイは冷やかな視線をバーシュレイに投げた。ドレイク・バーシュレイはニューディサイズ艦隊の元となった反乱の中心メンバーの一人である。

「艦したのでは無いだろうな？」

コッドの問いにバーシュレイはハッとなった。通信艦隊を艦えられ、レーザー通信を





「うるせえっ! 敵が居るんだっ!」

「目標はベズンの制圧じゃないか」

赤いビームはますます、その本面を増してきた。ボンッとビームが右側の宙域を通過していたアロの1機に命中し、機体が炸裂する。

「味方が殺られてんじゃねえっ! 俺は行くぞ!」Sガンダムはゴウッと加速するとビームの飛来する宙域へ向かった

「どこへ行く、ルーツ、ベズンだぞ、貴族の目標は!」ベガス田のブリッジで作戦ミスターのルーツ機の座席が揺るが反れるのを見たマニングスはとっさにマイクに怒鳴った。

「敵のビームだ、そのままにしてたら彼等が増える! 断絶、俺に当たるなよ!」

「敵を考えるのは貴族の仕事じゃ無い!」

ルーツはマニングスの喝声を無視して機体を進めた。前方にベズンの爆発光と黒煙のビームの狭い道を受けて見え隠れする青いMSがあった。それが教導団—ニューディサイザの有用機である事はルーツにも分かった。

「手前エッ!」Sガンダムの両肩のビームカノンがうなる。

「ガンダムタイプ、か!」

その青いゼク・アインのパイロット、ジョッシュ・オファショは空を這ってきたMSを見て、敵の声を上げていた。SOLへの攻撃の時には余りにもかけ離れたイメージだった為に、ガンダム・タイプMSだとは思わなかったのだ。オファショはその間にも攻撃を予期して機体を素早く上昇させる。ビュウッと光炎が二本、空を切った。

「俺の方が上なんだよ!」ルーツにそんな台詞を吐かせたのは椅子の—オファショ—の性質が自分よりも明かに上だと直感的に知しである。Sガンダムはゼク・アインの前に出ようとした、何事も断絶的なのだ。

「何いっ? ガンダムのパイロット、素人だとも言うのか?」その機動を見てオファショは喝采した。敵が見てきたMSパイロットたちは動きが全く違う。

「フンッ、ガンダムに…」目の前に出たSガンダムにオファショはすらすら照準する、至近距離だ。

「乗っていられ…」ゼクの射撃管制装置へ信号がすさまじい早さで流れる。

「強いと言うものではない!」一秒もないうちにマシンガンから弾丸が吐き出された。弾丸はSガンダムの胸を打ち、明るい青や黄色の塗料の皮層とガンダリウム合金のクズを散らした。

「無でエッ…」コクピットに画面が変る。もちろん、ルーツ本人が痛みを感じた訳ではないが、本能的な屈辱だった

ALARM ALARM ALARM

胸部受弾: 損傷50%

コンディション: レッド

戦闘継続の要を伝える

ALARM ALARM ALARM

「ビービー、ガーガーとうるせえぞ!」ヘルメットに鳴り響く騒音に向かってルーツは怒鳴った

ALICE ALICE ALICE

イタイ!…いいたい…痛い…不快…

ALICE ALICE ALICE

ウルサイ!…うるさい…不快…

ALICE ALICE ALICE

不意に騒音が鳴りやんだ。ルーツはちょっと氣にかけたが同僚の不満を置いただけでSガンダムを機動し続ける。もう目の前のゼクしか見えていなかった。Sガンダムが射撃位置に置くとすると、ゼクはまじい機動で回避を繰り返してしう。

「何者なんだ、本当のバカか?」オファショは諦めずに追いつてくるSガンダムに焦りを感じていた。彼の部屋と第二突撃隊はベズンにニューディサイザが未だに立てこもっているように見える為に、両MSの2〜3機に敵軍をよそに離脱して、ベズンを脱出する機動と合流する手筈になっていたのである。しかし、もう一つ、クレイから命じられた超切り手の速さという重要な任務があった。打ち合せの時間に遅れてはならない。

「この辺で片付けないと面倒だな…」オファショが再び射撃しようとした時、二機のビームが至近距離に突く。三角形の機体が2機、ダグンと迫ってくる

「Z、量産機!」SOL攻撃の直にクレイから聞かされた新鋭機だ。

「大丈夫かい、リョウ!」

ウェストは自分も命令違反になるのを覚悟で戦線を大きく後退したルーツを通過させたのだ。

「いらねえお前、脱ぎやかってよ!」手前エの心配でもしてろよ!」ルーツが黒煙をつく前に、高機動形態に変化したZプラスは脇を過ぎた。Zプラスの機體に氣を取られている間に、ゼクは最大加速で窮敵を開き、宇宙の間に姿を消してしまっていた。

「あッ…」

加速による慣性でSガンダムに先行してしまつたウェストは目の前の光景に声を上げた。黒煙の攻撃方向の真下に向けて、ベズンからニューディサイザの機體が最大機速で突進して行くのが見えた。これは出展ではない。配出だ、と氣が付いた

「敵が逃げて…」ウェストはレーザー通信の発信方向をベガス田に調べる。そここの光景の事をすみやかに報告した。「攻撃機の下だ、分かった」連絡を受け



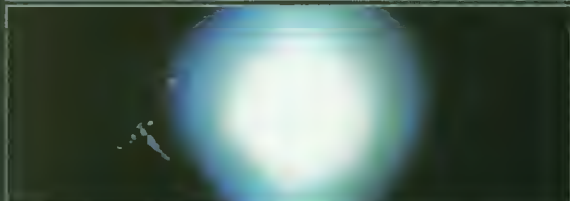
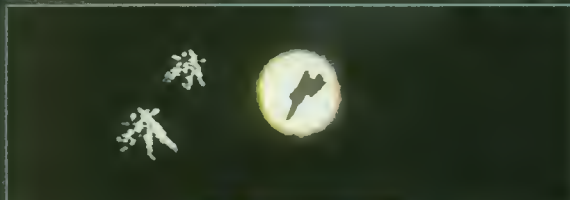
たマニングスはヒースロウにそれを伝達する、無事だった。艦隊とMSを引き上げるからには何か強がある。あの男一トッシュ・クレイが敵に居るのだ。

「意だな、すぐに作戦中止を指令しよう」
 どうりで彼らの艦隊の姿が見えないはずだ。ヒースロウは決断し、作戦中止の命令が緊急放送と全方向レーザー通信で全艦隊に伝達された。

「何い？ 無ってこいだって？ 意だと？ んなバカな！」

激発的なビーム兵器の振動を堪えながら、あともう少しでベズンの外側に回り付くという所で、クリプトのFAZZ艦は帰還を命じられた。「俺はまだ一戦も戦ってねえってのに！」

戦果の無い悲しさがこみあげてきた。ヒースロウは通信士に命じて、事象承認にも改めて事情説明報告を行なわせた。月軌道艦隊からは1隻のニューディサイズ巡洋艦が停航信号を発しながら艦隊に接近してきたが、随伴していた2機のMSが艦隊に攻撃を加えてきた為、この巡洋艦に攻撃を加えて撃破したという報告があった。もちろん、この巡洋艦に乗り込んでいたのがパーシェレイ以下のニューディサイズ巡洋艦であり、「随伴していた」というMSが艦隊を攻撃するために向かったオプショとクレイのゼクであったとは、誰にも知るよしもなかった。



「何ッ、気が付かれたか？」

コッドは艦隊旗艦の「ネリマンジャロ」のブリッジで、連判軍艦隊とMS部隊の動きを監視していた。MS部隊はベズンより距離近し、帰還の方向へ向かっている。

「仕方がないな、ブレイブ、気が付かれた以上、ベズンを意圖しても大した効果は無いだろう。まだ、我々の艦隊は連判の安全圏に到達していない。帰還を早めれば我々も責つく」クレイは失望を顔の色で表現しているコッドの肩に手を置いてそう言った。

「ベズン帰還は無駄に終る、かー」

「いや、無駄じゃない。我々の意志を示す打ち上げ花火だよ。この意図は察してやれば良い」

ニューディサイズの艦隊は「約束の地」へ向けて航行していた。それはあたかもモーゼに率いられたユダヤの民の如く、重く、しかし確信に満ちた軌道であった。

「これよりベズンを帰還する。地球を宇宙人から我々の手に取り戻す戦いの決意として！」

艦隊が安全圏に到達すると、コッドは放送で全艦隊にそう宣言し、帰還のリモート・スイッチを入れた。もう帰る場所はないのだ。彼らには新天地への前線しか残されていない。各艦に分乗した艦隊たちは自分たちの「我が家」の帰郷を一目見ようと、外の景色が少しでも見える場所やモニターに注目した。

ベズンに仕掛けられた帰還弾が少しのタイムラグの後に帰還信号を受信して一斉に発射し、この小惑星を宇宙の塵に還元してしまった。その光は夕暮れを思えつつあった地球からも肉目で見られる程のものであった。

この光がニューディサイズの意志であった。そして同時に、やがて月面都市をも巻き込む事になる悲劇の鋭い足音でもあった。

第2部 月面攻防 編

第5章

DREAM ON THE MOON

月面の夢

月面自治都市「エアーズ」の最前線に初めて設けられた離陸基地から発進したという特殊な性格を持ったこの都市は、かつての経済圏を離れ、二度と地球を見る事の出来ない雪下の理想都市から生まれた地球至上主義に変えられた。月面都市群の中でも特に珍しい超保守的都市である。

コロニーレーサーの攻防戦の際、都市の防壁の為に予備役兵で組織された離陸軍であるエアーズ市の市民軍は、ティターンズ側の東方兵力としてコロニーレーサーの襲撃に当たっていたが、地球に忍び付く軍が市民の勇みであると感じてきた彼らが、地球至上主義を名目に掲げたティターンズに組み込まれたのは当然の事と見え、この攻防戦は周知の如くエーゴの争動に終り、戦兵となつたエアーズ市民隊は傷ついた兵士と共に去っていった。しかし、この戦線には行く当てのなくなつてしまつたティターンズ将兵も数集してはいた。

エアーズ市長、カイザー・バイナルドはこれらの特務兵たちをエアーズ市に受け入れ、再度に其の地球連邦政府からの襲撃の引き渡し要求を自治都市への内政干渉として拒否し拒断してきた。今やエアーズ市はティターンズの侵襲に比べて、一層の脅威となつた。この動きの陰に、一人の人物が暗躍していた。その男の名をマイタ・サトメと號う。しかし、彼の本名は全く違つていた。

サトメはベズンの反乱の際、クレバによって地球連邦軍の不満分子・エイノ一機曹の様な現地に地球連邦軍に不買を抱く者に対する防壁と月面自治都市への防壁工作を命じられ、地球と月を飛び回っていたのである。彼は MS バイロットではなく数箇所の機體特

校でみた。戦場面に配属になる前は、連邦軍情報部に勤務していたので、その経歴をタレに聞かれた。今、彼はエアーズ市の周望エリアのベンチに腰掛けていた。

プレキシグラスのドームには物々しげな風景だけが見える。サトメの視線の先には彼の生まれ故郷が小さく光の点としてあった。サイド3。月の最前線のラグランジェポイント(12)に浮かぶ宇宙基地である。かつてジョン公園を名乗り、地球連邦政府に独立戦争を仕掛けたこのコロニーも今ではジョン共和国に名称を改め、地球連邦軍の強力な監視下に置かれていた。

「いつの日か、ボツリと彼はつぶやいた。いつの日か、月面に栄光を飾り度す。その日を夢見て1年戦争。の後、誰かがサトメ連邦軍の軍務を命じていたのである。今の名前は「1年戦争」で、全滅した連邦軍部隊に所属していた重洋系兵士のものだった。ジョンの機体設計を名とした部隊に近い所にジョンの機体が生息とは如何な様である。

戦後8年、アクシズの脅威によりネオ・ジオンは最近、次々と各コロニーに制圧部隊を送り込みつつあった。後見人のハマーン・カーンが実質的に指導していたとは見えなげに、ジョンは「1年戦争」を無くし、ジョンには変わりない彼の理想に再び栄光が照らす日は近い。その為、この軍務を担かせるのは連邦の戦力に照る上上で有効だった。

サトメは立ち上がり地下の居住区へ下りるエレベーターに向かって歩いていた。

ベズンの破壊にもしも巻き込まれることは避けられたものか、その帰途の結末で生じた破壊によって、佐藤部隊と月面連邦軍の

両方の機體は破壊を遂げていた。月面連邦軍はサイド2へ寄港し、現在、応急修理を行なっている。さらにバトロール就中にも急遽、時刻に参加することになったこの部隊の機體は損傷を蒙り、その機體もなければならなかったのである。だが、佐藤部隊にはその余裕さえ与えられなかった。すぐにニュータイプ機體の追撃が命じられたのである。だが、艦隊の離脱を測し、ニュータイプ機體とは半日から一日の遅れを取ってしまっている。ベントから出港が予定されていた佐藤部隊はニュータイプの行方不明のままで出港が見送られていた。

時に宇宙世紀0088。3月10日。
「王の入城か……」

ベガス島の最前線のモニターに映し出された白と茶のチェス盤。ヒースロウは自分の白い駒で作られた陣地の隙にある王駒の近く、にチェス・ゲーム用ソフトウェアの「サーゴング」が指す正しい歩が置かれると、キーを叩いて、この一着右側におた置かれた駒を入れ替えた。この、王駒と敵駒の特殊な入れ換えルールを「王の入城」と言う。

この戦線、ヒースロウの王駒は機體特仕と位置を離れ替へ、一瞬のうちに陣地の駒で作られた固い壁の中を安全地帯へと逃れる軍になった。

「ベズンを捨てて逃げたか……問題はどのマス目に逃げたかだ。」

ヒースロウはニュータイプ機體の戦術を考へ推測した。ベズンに機體特仕に、ニュータイプを王駒にまで入れたのだ。「エイノ一機體は、さしずめ騎士駒というところか。必然として行方の確かなエイノ一機體を機動力のある駒に例えてみた。そこへエアーズのブザーが鳴った。「敵軍、マニングス大尉であります。入ってもよろしいでしょうか」インターホンから聞こえる低い声が聞こえてきた。ヒースロウは艦隊のドアロックを離れてやる。「少しお話ししたいことがあります。」

「うむ、聞いてあげ、地球を出てから色々忙しい。そろそろ意図とゆくり話しをしないと。勝てない所だよ。」

ヒースロウが椅子を動かすとマニングスは志定を告げようように椅子に座った。「ところで話とは。」

「実に人間的な問題です。これが今後の戦術

にすぐに結び付くというものではありませんが、彼々の駒についている。ある男の軍です。」

「ほう、興味深い。全体戦術に結び付かなくても、敵のクセを知っておくのは重要だからな。貴付けは誰ですか？ 12年戦争の奥深くヤツだ。佐藤部隊かららって来たんだ。艦長の使召さん。」

ヒースロウは部長のキャビネットに背を向けた。マニングスが見ると「ネイビー・ラム」の青い服が着た。軍艦内では無道であるのは旧世紀の頃も今も変わりはない。しかし、海軍艦に在籍時の味と貴付け軍と称して既婚者の艦がつかないキャビネットに湯が備えられている。この艦は通常、艦長が管理する。宇宙時代の現在でも、宇宙艦はこの伝統を踏襲していた。

「いい、艦長、自分は欲はしませんので、マニングスの答にヒースロウは少し誤りしような顔をした。

「それでは聞こうか、その艦の艦とやらを。」今度は紅茶のチューブを開き出す。チューブを受け取るとマニングスは話し始めた。「前の電報のでも、その男は艦に部隊に属してはいません。どうも彼は戦死です。それで、MS バイロットなら甘んじているのか？ 昔から不可能ならいてはほとどの切れる男でした。自分の独立国を建てようとするのが彼の口癖でしてね。」

「独立国……？ 仲々、大膽な話だ。コロニーでも聞かすというのか？」

「いえ、何でも聞かす時代には三流政治雑誌に発表した論文が元になっているとか聞かす。まあコロニーと聞かすというタイトルの書です。艦によれば人間は土の上で暮らし、地球以外の天体でしか有り難いと聞かす。ですから、コロニーは人口の生活圏である以上、経済的にも政治的にも地球への支配を要する。それが出来たというのです。なぜなら人工都市国家であるスペースコロニーは独立国家として地球と対等に交渉できる様な経済基盤が無いからですよ。」

「それは正しい。確かに現状では、一部のコロニーで自給の大規模農業を便して地球への電力供給や移送した小規模な耕作機が買

「そいつが軍艦なんだ / 軍艦は艦載だ。貴艦が侵入した以上、貴様も艦載の査察の一つなんだよッ」

「じゃあ、勝手に死にゃええだ？」
 やり取りを見ていたマニングスは、このままだではルーツは同じ艦に所属するMS部隊員だけでなく、他の指揮官たちとも同僚を起こし撃たないという危機感を抱いた。この大事な時に不協和音が聞こえるのは大変にまずい。「私は艦載者を殺しません。安心しろ」と一喝した。

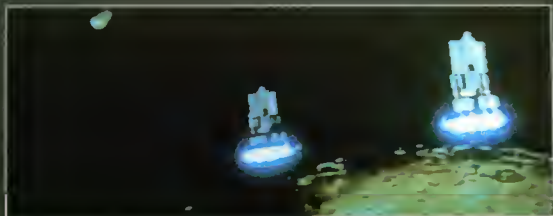
「主役、艦載隊はスベリアル、プラス、FAZZの各ガンダムを導いて行く。各 MS 中隊は艦載艦に艦載した数 MS に通常のフォーメーションであった。作戦開始は地球艦隊第13日、1000時、離着艦の音を打てるノ」

ORDER ORDER ORDER

α 艦隊司令部
MS 艦隊司令部
第110MS 戦隊 ベガスⅡ
α ガンダム×1
β ガンダム×2
FAZZ 1 個中隊
α 第1 個中隊
第12MS 戦隊 (レパルス)
α 第3 個中隊
第14MS 戦隊 ステイタスシステム
α 第3 個中隊
第20MS 戦隊 ユリシール
α 第3 個中隊
第27MS 戦隊 カンバーランド
α 第3 個中隊

ORDER ORDER ORDER

全 MS 部隊から浮き上がったしまたルーツ



たちの問題を抱えつつ、作戦は決行の時を迎える……。

明けて13日、悪戦では見舞である、まさしく α 任務部隊にとつてこの日は見舞となろうとした。

この日、地球艦隊第1400、ニューディサイズとの連絡を取り、11の艦隊領域を出発したエイノ艦隊が球面形を組み、広く長い推進剤の光の尾を引いて月軌道に到着した。これは艦隊の戦術ミスである。α 任務部隊の軌道到着前に二つの艦隊が合流してしまったのだ。

エイノ艦隊に所属する2隻の遠征機動艦はエアーズ市の宇宙港へ向けて巨大な質量ノズルを地表側に向け、電磁的な炎の風を吹き出しつつ大きな角度をとって減速しながらゆっくりと降下を開始した。その際の中からは GM 宙を治めとする MS が消滅されている。

「発光信号ですノ」とブリッジの艦載者が「キリマンジャロ」に接近してくる小さな光を見てコッドに伝えた。

「エイノ一降下かノ」

点滅する小さな光はブリッジの意外に広がる宇宙空間で次第に数個のシルエットとなり、エイノの最乗する「ブルーラン」が現れた。「ブルーラン」はキリマンジャロの左舷側に並ぶ。果敢をたはる左舷側にワックと駆け寄った。

「コッド大尉、前の戦争以来かな」

レーザー通信の音声で「キリマンジャロ」のブリッジに艦と同時に、エイノは敬礼を送った。コッドはかつて「1号戦争」の際、エイノから艦載、艦隊感を受け取ったのを感じ出した。

「エアーズ市民軍と艦載者に手土産を少々、持参した。それからもちろん、例の兵隊もな」

この瞬間、α 任務部隊の能力だけでは戦局は打撃出来無くなってしまったのである。

地球艦隊第13日、0100時。

「ベガスⅡ」のブリッジから見ると、宇宙に浮出の雲が曇っているかのようだ。S ガンダムを始め、艦隊所属の全 MS が出撃したのだ。そのほとんどはネロである。全戦力中1/3、15機を艦隊の直前に残し、他の MS はニューディサイズ艦隊の艦隊に属している宙域に向かう。艦隊艦を撃退し、エイノ艦隊の到着前にエアーズ市を制圧する。この目的のためにさらに半数の15機の MS が月面降下機を急襲していた。もちろん艦からはその前に待ち受けている軍艦を知らなかった。

最初の9機が降りかかったのは攻撃隊の第112戦隊の9機のネロだ。先行していた1機のネロが突如として艦に駆け上がり、艦見した「何だッ」

青白いビームがネロ艦を包むように飛び交い、死のシャワーが轟を響ける。

「待ち伏せかッ」

「3個中隊はいんぞッ」

「どこから射てきやがるんだノ」

ネロ艦はたちまち連発の弾に叩き込まれた。部隊間信号に番号が飛び交う。シッポ「何か」が通り過ぎた艦隊、2隻のネロが続ぎまに艦見した。パイロットたちは自分ごと、何者にもやられたのか分からぬまま無敵艦の艦載に落ちて行った。

生命の光が消える真に放つ、一瞬の瞬きの花があたりで咲く。第112MS 戦隊はもののけで消滅してしまっ。この光景を遠くから見れば、光の花が咲く前に、断絶的に様々な方向から降り注ぐ光のシャワーが見えに違い無い。

かつて第112MS 戦隊だった艦隊の中にゴッつと艦を覆われて、身体に白いイレズミを施した怪しい MS の機体が姿を現した。その姿は鬼神の機であったが、まさしく「ガンダム」であった。その「ガンダム」の両腕にヒュンと小さな円盤が二つ張って、円盤がガチャと収納されると「ガンダム」の両腕が僅しげな光をたえた。

艦載名刺、新素材「ビ」通称「V」と呼ばれるこの MS はガンダム MkⅡ と貴た。

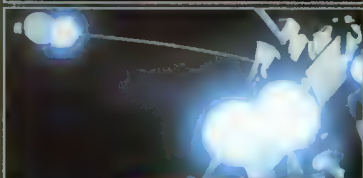
「インコムシステムか、上々だッ」
 パイロットのコッドはそう言うと思わず



りした。
「第12戦線、演進中!」
「何だと?」
「ベガスサウス」のブリッジのモニターからその部隊のIFF（敵味方識別番号）が突然消えた。
「待ち伏せされたと言うのか? 道中はもう一面を控えているとでも…? まさか…」

報告を聞いたヒースロウの脳裏に最悪のケースが浮かんだ。待ち伏せを掛けられるのなら、それ相応の数のMSが遊撃軍として存在している筈だ。エアーズ市民軍のMS戦力など数えるに足らない。湧き出された解案はただ一つ、エイノー艦隊だ。
「いかん / 全機に侵襲ルートの変更を指示するんだっ!」ヒースロウは立ち上がりさま

に叫んだ。その拾子に砲撃隊が逃げ、街に落ちる。
「駄目です、奇襲効果のために通信禁止を徹底させています!」
通信士官の返答に、一瞬の顔が見る間に意どめて行った。



第6章 LOGISTIC BOMB 論理爆弾

リアシート前面の全周モニターの一部が切り取られるように正方形のウィンドウが開き、ズームアップされた推進方向の光景が映し出された瞬間、攻撃部隊前面のゼロのパイロットはハッとし息を呑んだ。
ニューデイズサイズのカラーとも言うべき深い青色のMSが無数に宇宙空間に浮かび、その後方には戦艦と巡洋艦が全砲門をこちらに向けているのだ。
「ハメられたかっ!」
パイロットは非常用を示す赤い色で塗られたスイッチをボタンと入れた。機体の腹から赤光弾が発射される。弾頭はビュルビュルと上昇して爆発し、淡い紫の光を発し続けた。
「正面に赤光弾 / 無制限解除、奇襲失敗だっ!」

後援部隊の二機目中央に位置したクルーザーモードのSガンダムのコクピットの中で、ルーツは全てを悟った。しかし、瞬時に返った。当然、この光を見ていたのはルーツたちだけではなかったのだ。
「砲撃距離 / 500 / 各個砲撃、撃て!」
ニューデイズ軍に身を投じたエイノー提督の度々する「ブル・ラン」から砲撃開始の指示が飛んだ。指揮下の艦艇がら一斉に光の軍が発射された。その巨大なビームと砲撃弾ミサイルの弾道射撃は完全な黒い黒煙の平の様に前面のMS部隊を包み込み、周囲の壁方へと連れ去っていった。

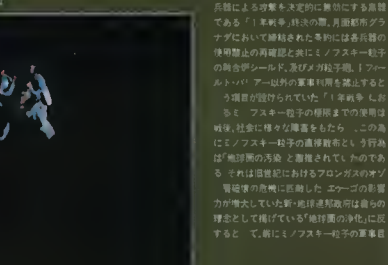
攻撃してきているのは、後援部隊か。それ、あのビュルビュルの少尉が本場に上陸士官の類なのかどうか。ハグタカが確かめてやろうしかな。エイノーは連隊軍軍事官学校開設以来の秀才と賞われた男の顔を思い浮かべた。あの男に怪す証を手厚。たのは自分だ。この戦いで命令を倒す事が出来れば本場の一人前だ。前は社会に出たての意気を持っていた父親のような感情を抱いていた。だが道義も、もちろん。息子に食ける気など毛頭無かった。息子の欠点は良く知っている。優等生は規則に従った行動しか取れないものなのだ。

「前部MS部隊、減速」という通信士官の報告に、艦長艦から身を乗り出すように前方の宇宙空間を監視していたヒースロウは一瞬、顔をしかめると敢然としてボタンとシートに手を下ろした。

M部隊だ。M部隊の発射を全機に要請しよう。攻撃隊MS全機の出撃も急げ!」
MS部隊の放たれるためにブリッジに集めていたマニングスはヒースロウの捨てばちとも思える命令を聞いて唖了。

「M部隊、ミノフスキー粒子兵器の使用は禁止されているはずだ。使用には総司令部の許可が必要じゃないのか?」

M部隊…かつて「1年戦争」時代に使用されたビーム砲撃兵器の効果と高速度ミノフスキー粒子の特性によって、遠距離のビーム兵器による攻撃を定期的に行うに有利な兵器である。「1年戦争」終結の際、月面都市グラナダにおいて締結された条約には各兵器の使用禁止の再確認と共にミノフスキー粒子の含有率、アー以外の軍事利用を禁止するという項目が盛り込まれていた。「1年戦争」におけるミノフスキー粒子の爆発までの使用は戦後、社会に様々な障害をもたらした。この為にはミノフスキー粒子の爆発数値ともう行動は「地球環境の汚染」と指摘されていくのである。それは旧世紀におけるフロンタスのオゾン層破壊の危機に匹敵した。エネルギーの影響力が増大していった地球連邦政府は自らの理念として掲げている「地球環境の浄化」に反すると、断りにミノフスキー粒子の軍事利用



的での両脚使用を戒めてきたのだ。や、その
カセをヒースロウが外そうとしている。マニ
ングスがカーパスになたのも無理からの事
である。

「それに、今更 M 海頭を使ったところで通すぞ
らっ!」と彼は通信士官の前のコンソールを
奪ってガンと叫んだ。自分の「読み」の甘さで又
しても多くの人命を助らしてやった。勝る
はずのない艦隊が待ち受けて、その戦艦と高
速機の一斉射撃で3機のMSが一瞬のうちに
吹き飛ばされた。「1年戦争」の海戦がこみ上
げてきた。攻撃隊30機のうち残るは12機。彼
らが先にエアーズに変入するのに期待する
しかない。

「艦長、S ガンダムから入電ッ!」「陸 MS に動
きは認められず。ダメーと思われろ。」通信士
官はルーツからの電文字音に彩られた通
信と上品に断絶して告げた。

「何ッ? フォンセン?」すると MS の本陣は
急にエアーズ……
受け替えるように最悪の事態が誰りかか
つてきた。

ルーツの乗る S ガンダムは特殊なゴム。ビ
ーム系の素材で作られたゼクスのダメーを
ビームカノンの低出力機材で集めていた。
「なにやてんのよ?」

「位置から接近してきた FAZZ 隊のクリブ
が声を上げた。

「見ろ! かんたろ!」他の MS 隊はどうし
たんだ?」

「艦隊攻撃チームは専攻状態、あとの連中は
月面降下チームだよ」

「なる事だ! 決められた!」じゃあ俺たち機
隊攻撃の方はどうするんだよ!」いくらガン
ダムでも機組と艦隊を連携しねえ、ここに
お前の MS は居ねえんだぜ、やるなら今しか
ない!

その時、ネロから通信が入った。
「主力さんよ、あんたたちだけで戦争するん
だっ!」

モニターの画面に線を描きと空中を地表
星に向けて降下シーケンズに移りつつある
ネロ隊が居た。

「ケッ!」と吐き捨てるとルーツは S ガンダムを
反転させる。「後立たずめ!」

艦隊攻撃のネロ隊は既に居なかった。こん
な状況では好むと好まざるに拘わらず月
面降下チームのネロ隊の機理に固らなければ
ならない。

チュンユンはネロの IMPC のモードをセッ
トし、月面降下シーケンズへ移った。



IMPC IMPC IMPC IMPC

モード : 4 階降下入
設定 : 地味量下
機体 : 月面 通常環境
補助装置 : 直機
オートモード始動
時間 : 1200 歳

IMPC IMPC IMPC IMPC

次にチュンユンは降下座標を指示した。直
線にシステムは作動している。しかし、人間
を降下させるという不安な出来事はちよとした
思ふぞけをしようにしていたのだ。降下時間
設定の数値がカウントダウンして行く。そ
の座標が666になった瞬間……

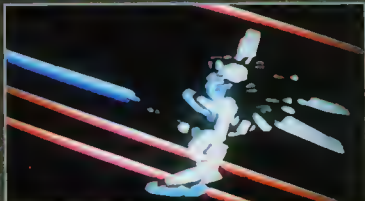
IMPC IMPC IMPC IMPC

S H A M E
O N
Y O U !

IMPC IMPC IMPC IMPC

「何んだっ!」
モニターが不可解な文字で埋め尽くされ、
その中央に「ごめんなさ!」という文字が様々
な色で点滅した。ネロの IMPC は破壊された、
たちまち崩壊を失う、戦艦デューパーに墜んでい
た誤ったプログラムがたちまちのうちにネロ
のデューパーバンクを食いつくし、崩壊する機
体の箱に突入していったのだ。

連邦軍が決して月面に降下出来たという理由。
それがこの機理で壊れた。教導団は元々全



部隊の MS に戦艦デューパーを供給する部隊
だ。ニューディサイズはそれを利用したのであ
る。あらかじめ月面を利用することを想定して
いた彼らは、MS が IMPC を使って降下シー
ケンズに仕込んだ時にそれを破壊するプログラ
ムを仕込んでいたのだ。そうとは知らず、地
球に運送された元教導団のアナリストは最新
戦艦デューパーを持ち帰ったのである。連邦
軍はこのデューパーを疑うことを知らなかつ
た。教導団の反乱は計画的な物とは思ってい
なかったからである。だからこそ連邦軍はこ
の時代では原始的とも見えるワナにかかた
のだ。時代ニューディサイズに敵軍が有ったの
は、この機理で壊れた連邦軍の戦艦の機に活
動を始めて大きな混乱を生じさせる筈だっ
た。a 任務部隊の機材作戦で始動してしま
った。もうこの手は通用しなくなってしまう
と言うことだ。

「マニュアルだ!」マニュアル機材でやるん
だ!」降下角を上昇角に修正すればまた何と
なる高度だ!」だが、先行した2機のネロは
ひっくり倒された機体の箱に手足をものがせて
全機体の機に一層星に落ちて行く。パイロッ

トの悲鳴が聞こえた。チュンユンはつとめて
それを監視しようとしたが駄目だった。うか
うかしていると自分も危ない。来たヤツの
負けだ。

「死んでた。ま、る、か!」

自動機線系をカットし。自分の機体と敵機
だけで機体を操る。複雑したモニターには正
面だけの視野の。コンピュータで補正され
ていない生の映像が映し出されている。正確
しの星空がググーッと傾いて視野の右側に月
の地平線が小さくなって行く。それでネロの
降下姿勢が変えて行くのが分かる。

ルーツはその混乱を果敢として見ていた。

「何が、起こったんだ!」

軌道の前方から迷走しているネロ隊に向
かってその上から高速で接近してくる彼が
有る。それはすぐに隊の MS と知れた。

「ヤベッ!」このまじまじで中がめになっ
まう! 助けなけりや!」

ALICE ALICE ALICE AL

……ヤベッ……ヤベッ……やばい……危機……
……連中……仲間……?……ヒトの集団……
……安全な選択……助ける……救済……?
……仲間……生命を尊重させる戦意……
……自分が高みを目指さないの?……
……ヒトの高み……分らない……
……それが……ヒト……?……

ALICE ALICE ALICE AL

ルーツは接近してくる MS 陣にビーム・カ
ノンの敵軍を定めた。

「卑怯なんだよ!」

ネロのコックピットでは最接近の警報が派手
にがり立てていた。「クッ、何も出来ず!」
チュンユンは彼方から接近してくる MS 群を
見た。陣線に全精神を注がなければならない





い海に、まだまだ戦艦など出来る余裕はない。これまでに……と直めかけたとき、爆近してくる艦 MS 群に光が弾けた。

「誰だ？」

チュンンは見た。ガンダムが、S ガンダムが自分たちを保護している。そのパイロットはバカでわがままな小娘の態だ。自分たちはあいつをのけるにしたいのに、なぜ……

S ガンダムの射撃にエラスと FAZZ 隊も加わった。強力な火力が艦の MS 群に集中され、その存在を停止させ消滅させた。

「あいつら……」

危険を度したネロ艦は軌道に離れ、月の距離となった。

「艦隊を止め、主力さんよ！」

「へ、手前へ“笑”だぞ！」

艦隊の言葉を聞いたルーツたちも軌道に乗り、エスコートする。

「艦長、押下チームは失敗、アポートして月の周囲軌道に参っています。推進剤が足りないようです。艦隊部隊の MS 群に回収させますか？」

押下チームからの報告を受けた通信士官がヒースロウに尋ねた。

「うむ」と答えた艦の奥にある考えが浮かんだ。「いや、待て。そうか、分かったぞ。」

その手には艦から、艦父……艦父、と艦直直に……

「何様、MS 群を回収しないのですか、私の部下に月の距離まで来て、なぶり殺しにされると言うのですか？」マニングスは彼に叫びかかると、

「残念だがそうだ。ここで艦隊部隊を艦から外してしまつたらもっとひどいことになるぞ。これから来るのはバグタカだからな。その声に艦隊と自衛が込められているのにマニングスは気が付いた。」

一方、ニューデイズの首領、プレイバ・コッドは自らの艦を M.V. の性能に満足しつつ、艦艦“キリマンジャロ”に離脱していた。

「おう、これは素晴らしい。3 艦まとめて仕留めてやった。他の艦中の配達は？」

コッドはヘルメットを脱ぎながら MS ハンガリーのエアロックの外で待っていたクレイに尋ねた。

「うむ、良くもあり艦もくる。ほとんどの連中はゼクで月面に降下させた。これの艦隊はオフショアにやらせている。艦隊の方は物質補給まで、エアーズ市の上空防衛を進行中だ。エイノール閣下の方は艦中の奇襲攻撃を準備したさうだ。だが、悪いニュースもある」

「何だ？」

「我々を攻撃した道中は本星艦隊の本拠じゃないな。その指揮官が全艦のアホウかどうか自衛が有るのかは知らないが、MS を月に降下させようとした。第三次降下予定の連中をすぐに派遣したが、バケモノ MS にやられたようだ」

「では艦隊部隊……バレルだ」

「あゝ、たふんな。しかしまあ良いではないか。月面に降下した我々を駆逐しようとするれば、もはや劇はエアーズ市もろとも吹き飛ばすしかない。そんな事をすれば、いかな太事を掲げようとも市民を巻き添えにした事実は拭いぬれんし、月面都市群から総反発を喰うことは必死だ。そうならば我々の“月面都市部会”構想の実現は容易だ」

そこまで話した時、艦内に付いたましい警報が鳴り渡った。

「コッド司令、直ちにブリッジへ……」

血相を覚えて若手の副官がエアロックへ駆け込んだ。

「うろたえるな、何事だ？」と彼はその副官を責めた。

「だ、大、大艦隊が……本星艦隊です……」

コッドはクレイと互いに顔を見合わせると

固き合い、艦内リフトグリップを握りしめにしてブリッジへと急いだ。

「何で艦隊に突っ込んだら？」

S ガンダムは外側に出現を向けた円陣を組んで月の周囲軌道を回すネロの 4 艦を守っている。円陣の中央で長距離用機関とも書える 3 機の FAZZ が周囲を警戒し、2 機の Z プラスは軌道の前方を警戒していた。

FORMATION FORMATI



FORMATION FORMATI

「30 機の攻撃艦 MS が、もうたまたま 10 機だ。今頃は艦隊も全滅したかも知れん。お前たちはまだ艦隊は残っているんだろ？」

チュンンがルーツに言った。

「艦隊が全滅しちまったら、残る所が潰れちゃうねえか。だからここに居た方がまだ良いぜ」

「室なヤツだ」

「そう思ってるのはお互い悪い」

ALICE ALICE ALICE AL

……室なヤツ……貴族者……お互い悪い……

……全員が艦隊……全員が軍人……

……艦人は貴族……戦争は貴族……

……皆んな狂っているの…… 狂……

ALICE ALICE ALICE AL

その時、忘れられた MS 艦隊は多数の小さな光が宇宙空間の彼方から迫ってくるのを見た。

「衆やがた……、なにより船に……、艦隊は決行に行こうぜ！」

「ちょっと待て……」

チュンンは規則的に点滅する白い光を見つめた。

もはやこのままだと艦隊を見るのは火を見るよりも明らかだ。ヒースロウは煙をくくっていた。たまたま 5 隻の……任務部隊に何が出来よう、所を研ぎ直したバグタカが……いかり、……任務部隊をズバズバに引き裂くのを見ることになるだろう。だが、おとなしく引き抜かれるだけでは済まず、一度ならず二度までもドン直に落ちた……“保身生”は始めて聞き取る事を、そして自分の意志で物考える事を学んでいた。

そこへモニターの端と艦隊番号を認めていた直衛士が舌を噛みそうな勢いでヒースロウに報告した。

「か、艦長……艦隊です。大艦隊が……」

艦に集ったか、バグタカめ。

「“ナグト”、“エクゼター”、“シャトルホルスト”……、本星艦隊です……」

「何……、聞か……、のか……？」ヒースロウはしばしば息を吐き、艦隊、つまり居たブリッジが状況を理解した艦長たちの歓声に答えた。月からの艦隊の様子の中に艦隊をたまたま艦隊が姿を現している。それは間違いなく、



ペンタから推進剤の消費を監視して最大軌道で駆けつけた。地球陸軍軍本艦艦艇である。

ここに至り、艦艇の戦力バランスは再び逆転した。長い長い3日が終わろうとしている……

地球艦連時、3月14日0800、本艦艦艇艦艇「ナグト」にてヒースロウは「イーグル・フォール」と名付けられた。エアーズ市に対する一次降下作戦の説明を受けた。この際、ヒースロウが宣言した通り、全MSのMPCデーターが変更される事になった。しかし、新データーのデバッグは重要な事ではなく至極の余裕もなかった。そこでそれ以前の旧バージョンのデーターを再び使用することになったのである。これなら新データーの改定よりも速く作業が完了するが、戦闘データーも古くなる為、MSの単体の戦闘力が低下するのは否めない。

α任務部隊は艦艇 MS 艦艇を再編成し、この戦いに臨む事になる。MSの補給は受けられてもパイロットの補給はなかった。そこで新たに本艦艦艇から分遣された4艦がα任務部隊を援護する事になった。

作戦決行は3日後、3月17日と定められた。



第7章 EAGLE FALL イーグル・フォール

宇宙世紀0085、3月17日。

非常急の黄色に染められた「ベガス団」のブリッジには緊張感が漂っていた。全ての乗組員がノーマル・スーツを着用し、来るべき艦艇に臨んでいる。

α任務部隊の艦艇は急襲のβ任務部隊と共にニューデイズ艦艇が守るエアーズ市への降下軌道突入点へ艦艇してこれを艦艇する事になった。本艦である本艦艦艇はエイノー艦艇の艦艇に当たる。これは更に、降下軌道突入点のニューデイズ艦艇をエイノー艦艇の増援として引きずり出し、降下軌道突入点の防衛を少しでも手薄にするという目的もあった。

「……3……1……」作戦開始時刻までのカウントダウンを続ける航空士の声だけが響く。事故している全艦艇のブリッジで同様の事が行なわれている筈だ。「……作戦開始……」

艦艇の主旨が出力を上げ、各艦艇はあらかじめ設定されていた準艦艇撃撃域へと進出する。測距システムが捉えた艦艇までの距離や環境条件のデーターが恐るべき勢いで武器管制システムに流れ込む。3パルスのビーム撃撃が行なわれた後、最大軌道で次の艦艇撃撃へ参加するという行為が繰り返される。エアーズ市制圧作戦、作戦名「イーグル・フォール」はこうして幕を捲いた。

戦場には爆発の色が光が飛び交い、大小のミサイルが爆発した。そこで光の泡が生まれ、その泡の中に包まれた者の悲鳴や怒号、戦場、愛する人々の名、人生そのものを飲み込んで虚無へと帰って行った。その戦場の宙域を、高い降下位置を貫いたネロやノーベル GM III (宇宙艦艇専用改修型 GM III) といった MS が月面を目指して駆け抜けて行く。

α及びβ任務部隊は各々艦艇を取りつつ、ニューデイズ艦艇へと艦艇を開始した。MSは全て降下作戦に投下してしまつた為、砲撃方ともに艦艇は砲撃のみで決着を付けざるを得なかった。

「艦艇艦艇見！ 艦艇1、進洋艦5ノ」

艦艇手がヒースロウに叫んだ。

「主力艦、艦艇に火力集中ノ 進洋艦は放っておけノ」

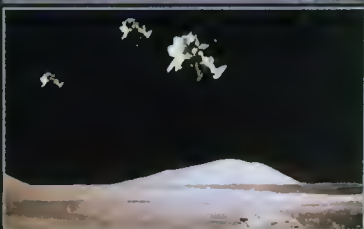
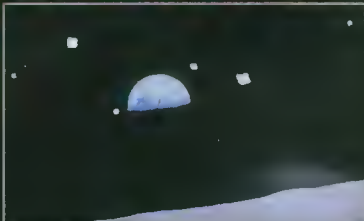
「ベガス団」以下、9個の進洋艦は主砲の有効射程に入る一瞬に空へ躍出し、全ての砲門を右舷側に向ける。主砲が次々に発射され、その光線はニューデイズ艦艇の艦艇「キリマンジャロ」へと深溝状に広がりにながら伸びて行った。こうやって目標を包み込むように砲撃を行うのが定石であった。

「1年戦争」の頃に比べれば砲撃艦艇は後方に向上したとは言い、この時代、遠距離での砲撃の艦艇は肉眼目視、レーザー索敵、熱源探知といった方法に頼らざるを得ないのと同時に、宇宙戦艦は3次元の戦いであるために艦艇に低いものであった。それ故に数個の艦艇で一つの目標に対して、僅かずつ砲撃艦艇を順次にずらして砲撃するのである。

ズンと鈍い音と共に艦艇「キリマンジャロ」の巨体が揺れ、その宙域でゴッドの身体はブリッジの虚空に投げ出された。

「ブレイブ！ 艦艇の脱出が妨げられたぞ」

震う身体をブリッジのコソソールに預めつつ支えながらクレイが言った。「そのようだな。エイノー艦艇を撃退してからごっかだと思っていたが、二正面作戦とはな」ゴッドは航空士の方へと流れて、言った。「艦艇



「たのだ。それは予想外の事故だ。たちまちの内に目の前のモニターに動力系の危険表示が現れた。」

「ウムウッ……」となりながら、すかさず機動力系へ切り替える。

「速くしか無いか……」

既にエイノール機は安全圏に離脱したようだ。コドはそうつぶやくと Mk.V を月へと向けた。

ALERT ALERT ALERT

損傷 損傷 損傷 損傷 損傷

機体危険度：75%

離脱の要を認める ■

ALERT ALERT ALERT

このまま進まなければ機体が爆発する可能性が有る。クリプトはコクピット・カプセルの脇の紅白の縦横棒に塗られた緊急脱出ハンドルをグイと引いた。ゴッパと音を立てて球形のコクピット・カプセルが FAZZ の腹から吐き出される。故の目の無いものが出ていた。それは全ての物事への、何も出来なかったという無念の涙だった。

「なんでなんだよ……」

急降下を免れつつコクピット・カプセルは再び降空を切り戻した宇宙空間に漂っている。既に遠くになった彼の FAZZ の気体が爆発した衝撃波を感じながらその中でクリプトは静かに目を閉じた。

一方、ガラ変となった降下軌道突入点に待機していた第一次降下隊の MS、42機は降下位置からの逆弾射の炎を吹き出しつつ、ゆっくりと月面に向かって降下して行った。降下は順調だ。それを確認していたルーツたちに Mk.V の迎撃命令が下された。

「な、何っ!? FAZZ が全滅した? いや、冗談だろう? シンは、他の連中は無事なのかよ!?」
リョウはマニングスの知らせに尻が耳を疑った。

「クリプトだけは無事だが、残念ながらグリソムとオルドリンは戦死した。彼はガンダム

だ。FAZZ との交戦である程度の損害は与えた機体だが、FAZZ 機が全滅した上に機体の MS 能力が低下した。従ってあれを止められるのはお前たちしか居ない。あの青いガンダムを月面に降下させるな。それがお前たちの任務だ」

マニングスのまるで FAZZ 機が全滅したのが悪いとでも言わんばかりの口調にルーツは怒った。

「いつも、いつも、俺そうにしやがってよ / グリソムとオルドリンが死んだんだぜ / 少しは悲しむよ / あんたは感情って物が無いのかよ /」

「感情は MS パイロットになってから捨てた。ルーツ。前の戦争ではもっと多くの人間が死んだのだ。戦争ではいちいち悲しんでいる暇は無い。貴様の怒りは誰の化物 MS にぶつけてこい。お前にはやるしか無いんだ」

ルーツは怒鳴りつけたい衝動を抑えた。マニングスが言うのはもっともだ。今は戦争なのだ。戦うか殺られるか……。ルーツは S ガンダムの両翼のサブ・システムを排除すると機体を MS、人型モードに変換した。

Ex-S ガンダム、S ガンダムの最強形態である。

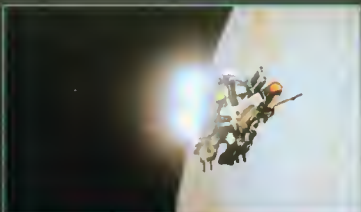
今、Ex-S ガンダムはルーツの怒りを乗せて、月面に降下せんとする Mk.V の迎撃に向かった。

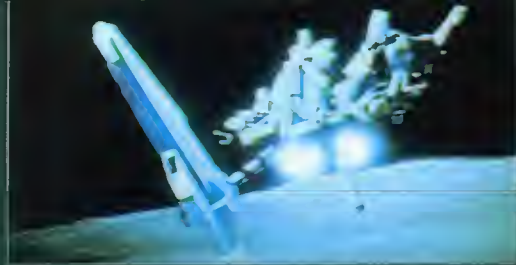
ALICE ALICE ALICE AL

……感情、理解不能……

ALICE ALICE ALICE AL

ルーツは S ガンダムにもう一つの意思が存在していることをまだ知らない。





と離れたエアーズ市の宇宙港に、1機のMSが降下して来た。

「船の降下部隊か？」

警備に出ている防衛隊のGM 団のライフルの銃口が一斉に降下兵に向けていた。やがて人型を急ぎ始めたMSは明らかにGM系とは異なったシルエットを見せた。

「重つな、味方だ！ ニュータイプサイズのトロンククレイであるっ！」

それはゼク・ツヴァイであった。警備部隊の銃口が下げられたツヴァイはゴウゴウと足元から炎を吹きだし、巨体に変化を遂げずワリと潰れた。

「バインフィールド市長はどこかい？」

警備の冷却作業を断るのもどかしくクレイは警備部隊に尋ねる。

「ハ、市長は政府ドームであります。地下の軌道を使っていただければMSごとドームに入れます」

クレイは冷却を終えたツヴァイの機体を地下軌道へと送る。リニアモーターのコンテナ式台車に機体を乗せると台車は重くなく軽いトンネルを駆走し始めた。僅か20秒程で台車はエアーズ市の中央政府ドームのステーションに到着した。かつてマス・ドライバーの射出物庫場所であった地下広間は、長い間、中央政府の重要物資庫として使用されていたが現在では急速の防衛用MSハンガーに改造されている。クレイは警備員の一人を捕まえると、堂々ツヴァイを掛け、職員の手で市軍庫へと急いだ。

市軍庫のドアは年代物の本物のマホガニーで作られている。クレイは地球を離れた。彼を案内してきた年輩した職員がドアをノックすると中から少ししめの声で返事が響く。部屋の入口の正面に、月面の景観が映し出された大きなモニターを背にして、中身は本物のオークで作られた機械が有り、軍装一式を包んだ文明女が座っていた。市軍のカイザー・バインフィールド。

「市長閣下。ニュータイプサイズのトロンククレイであります。お目にかけたく存じます」

バインフィールドは立ち上がりクレイを見送った。

「よく来てくれた。君が例の連合の……国に依頼はされた状況がどうなっているのか、早速見てもらおうか」

クレイは市長の軍庫に決意を隠した。それは「1年戦争」時代の連邦軍の特許正法であるが、階級も勲章も何も付けられていな



第8章

BATTLE OF AIRES エアーズの攻防

ループは月に向かって降下していくMS.Vの青い機体を視察した。「よくもダチを二人も連れてくれたな。礼はさせてもらうぜ！」

ALICE ALICE ALICE AL

……市軍は大事にするもの……近衛……

……身近な友達……私の中の人間……

……誰は守らなければならない……

……誰を傷つけてはいけない……

それでは他の人間を傷つけても良いの？

ALICE ALICE ALICE AL

Es-3ガンダムから機庫に隠れつけた必死のビーグが青白い面となってMと、Vへと伸びて行く。これだけ明確にビーグが監視できるのは、先の戦争で生じたチリで宇宙が汚染されているせいだ。と360モニター映し出された光景を見て驚いた。Es-3ガンダムの黒漆レタリックに塗られた青いMSは一瞬では機庫内を駆け抜ける。そのイメージがループの脳裏に浮かんだ。

軍的となったMS.VのコックピットではFAZZ隊との戦況の狂乱状態から覚めたコッドが黙々と地下の島のルーチンワークをこなしていた。

「メイン・バックブースター作動、シールド・ブースター解除、チェック・リストを復唱しながらコッドはシート脇のボタンをカチリと押した。激戦の戦況時には黙として使うシールド。MS.Vのそれには補助ブースターロケット

が内蔵されている。背中にマウントされたシールドは推進剤を使い果たし、地下の第二階層ではデッド・ウェイトになる為、コッドのボタン操作で火薬爆発によって強制解除された。360モニターの右側の視野をなめて、シールドはクルクルと回転をなめて上へと動き出て行く。それはループが射撃したのと同時だった。

ボウウウ

コッドの眼前を飛び去るシールドが青い光に包まれて消失した。「何ッ！」と息を呑んだ。回転したシールドの抜け残った破片がMS.Vの装甲に当たって、乾いた音をコックピットに伝えてくる。

息を呑んだのはループも同じだった。小爆発の中から青いMSがまるで何事もなかったように姿を現し、降下を始めている。「遅い、遅い」と何が起きたのか記憶できないループは思った事をそのまま口にした。

ALICE ALICE ALICE AL

……復讐相手の責……道義不問……

……分らない事が多すぎる……

……戦争……被害者……倫理の否定……

……私も被害者にならなければならない……

ALICE ALICE ALICE AL

「ループだ。迎撃をし、じっと待ち。おいついたら、死神が味方してるぞ！ 地下予想地点

を教えてくれ。絶対にアレスを壊さしやがッ！」
「地下予想地点は月面セクター、11-A、2-5-5-5だ。このままだと我が方の第一波MS地下部隊の急進暴走ラインの壁を壊す事になる。味方に近いから誤は使えん。発射機も有るしな」マニングスの声が響いた。
「善哉、軍が降りやあ良いだろうッ！」

Es-3ガンダムは機体を断して、月面へと激突した。

エアーズ市の大部分は地下に建設されている。しかし、一部の公共エリアは月面上へ露を出していた。そのドーム状構造物のうち、市の中央に一大大きくそびえているのがこの中央政府ドームである。エアーズ市はこの中央政府ドームを中心として半径30kmほどの面積が有る。そのドームから北へ2kmほど



い、「市長は一兵士として戦う覚悟なのか……」
バインフィールドの先導でクレイは臨時の
防衛作戦司令官となっている行軍車へ向かっ
た。行政部のモニターには市の全境が映し出
され、様々な色の線が明滅している。市境
は緑色の照明を投じた。

「子供や老人まで動員しなければならぬと
は残念だな」クレイが言ったのは決して皮
肉では無かった。市境は眼を見つめて置
った。

「エアーズ市長の言葉なのだよ。この戦いは
我々、エアーズ市民は地球の為に尽くすこと
を父祖の代から誓え込まれてきた。もし、こ
こで我々が負ければ、地球は地球人の物では
無くなってしまふ。それを全量が知悉するの
だ。それに、残念ながら職業軍人だけの戦争
は旧暦17世紀に於いてしまつたのだ。この兵力
でどこまで持ちこたえられるかは分からん。
しかし、我々がここで倒れても月の衛星都市
群がその赤を握りてくれる筈だ。その為の増
石となる覚悟は老若男女を問わず全量が持
っている。それがエアーズの戦なのだ。我々が
倒れる前に他の都市からも援軍が来る可能性
もあるよな……」

「もし、その意思通りに行かねば、我々もお供
しましょう。もとより知らずその覚悟とお
見受け致しました」とバインフィールドに向
かって微笑んだ。

「気持ちには値しいが、そうは行かんよ。この戦
いはエアーズ市民の総力だ。先のコロニー
レーザー攻撃の時と違い、市民たちをここ
まで巻き込んでしまったのは私の責任だから
ね。確かに、滅びるのはエアーズ市の宿命な
のかも知れん。宇宙に絶妙な地球の傾斜が有
るような物だからね。宇宙人と地球人の差別
は決定的な物だ。我々にとっては地球そのも
のが罪なのだ。我々はこの土地を、地球の
支配を握る者は出来ないのだ。宇宙人の言
い方に言えば、エアーズ市は旧世代の地球
連邦政府が行った宇宙政策の犠牲だ。その
最中が私でなければならぬのだ。しかし戦争
は戦う。戦争は今の連邦政府の態度への疑問
符なのだ。ここで、泣いてはいかん。戦後ま
で無に等しい罪をさせてやるのだ。我々がな
げ滅びたのかを我々に伝えるのは戦争の仕
事なのだ。ここで我々と共に月の土に還る者
は許さぬ。戦争が倒れるときは地球の上でな
ければならぬのだ」

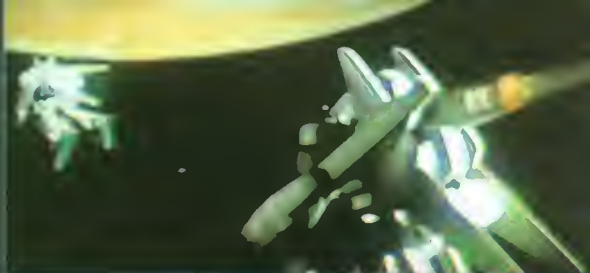
「余がしました。しかし、我々はこちらで必ず大
勝を責め進して見えます。市境、月面都市連
合は絶対に成立します」

「そう有りたものだな。もしもここが滅びた
場合だが……」市境はモニターに映し出され
た市境面の意外に厚く伸びた長大な1本の
線をなぞった。クレイはその瞬間に再度に振り
、心配を口にした。

「老朽化の方は大丈夫でしょうか？危険過ぎ
るような気がします……」

市境はそれに無言を持って首を前に振る。
互いの命がけの出来と、二人は具体的な防衛
作戦の検討と修正に入った。

討伐部隊のMS隊の直下は直一線こそ、直
様な地形を受けたものの、第二波の降下直下
によって戦場に機動性を面をつつあった。直下
合戦で50機近いMSがエアーズ市の市境から
隊前にかけて機動で展開、エアーズ市の包囲
作戦に入る。さらに2機のZプラスの援軍を
受けて、第三波のMS隊が次々と直下に移って
いた。



「オプショール少尉！ 直下を包囲しようと
しています、攻撃させて下さい！」

オプショールの率いるホワイト・フォース
は直下の防衛線と協力して、直下部隊の第一波
にはそれなりの被害を与えたものの次から
次へと降下するMSの直下に、直下部隊に
被害を被るに及んで、オプショールは直下に
降下を命じたのであった。しかし、少年兵たち
はそれを不満に思っているようだ。

オプショールたちが有効な防衛線を求めてジ
ャーと前進している間に、討伐部隊の直下
は直下で進んで行かぬ。やがてホワイト
・フォースが直下の直下のクレーターに直
下し、数兵隊を引く頃にはエアーズ市の西と
北に直下した討伐隊は直下を降下して前進
を開始した。

「余も、メイン・カメラをやらせてもうら
えるなよ。コクピットはカルデラの下だ。直下
をやらせても直下はしない！オプショールが指
示する間にも、討伐隊MSは小ジャンプを繰り返
しつつホワイト・フォースが待機している
クレーターへ接近して来る。ピンピンと飛び
蹴るような振動が直下を直下した直下のMSが
ウキウキしているようだ。

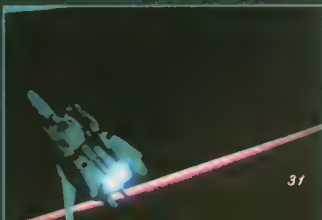
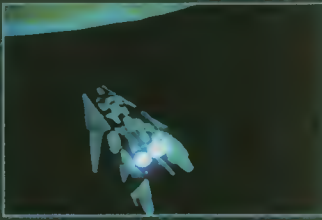
「射撃直下！」
MSは直下直下直下の直下になる。

「直下！」
ホワイト・フォースの全MSが直下直下、一
斉に直下を直下した。小ジャンプ中の直下の直下
かが直下に直下してあつたりと直下され、
これに直下した直下はバラバラに直下に直下
させる。

「クソクソ、クレーターに直下部隊が直下が
るぞ！」
討伐隊、マペールは直下のパイロットが叫
ぶ。

「直下直下直下直下！ ああクソ・ガンダム
を呼べ！」

直下が直下直下、直下の直下の直下が直下
した。直下しているMSが直下を直下した直下



所、光景に倒し置かれ、カルデラから轟き
出たホワイトフォースのMSが上空を吹
き飛ばされて空をのけぞり倒れる。クレー
ターは戦場の混乱に包まれた。

一方、コッドの Mk.V は最後の降下シーク
ェンスに就いていた。月面上のクレーターを這
るビームの光がチラチラするのがソッパリと
見えた。

「タンク 敵の侵襲がこれほど早かったとはな」
とコッドは驚嘆した。敵下には何も出来な
いからだ。他の兵器からの出撃はすでに止ま
っている。

Mk.V の降下はエアーズ市の中央政庁ド
ームでも観えられていた。

「友軍の識別信号を発している MS! 敵が降下
してきます。降下予想地点は現在、ホワイト
フォースが交戦中の鉱山ラインの奥深くでッ!」
オペレーターがクレイに言った。

「恐らくブレイブの Mk.V だろう。敵の侵襲が
予想外に早かったから、まだ友軍の制圧地域
だと思っているかも知れん。その MS の降下後
置を派手にやらせろ!」クレイの命令は瞬ち
にオフショへ伝えられた。

「何、コッド大尉が! 分かった!」画は命令を
受けてホワイトフォースの全員に命じた。
「敵の要所に餌のガンダムが降りる。パイ
ロットは私の敵長だ。きつて敵を監視してく
れろッ! 降下直後に全力を尽くせ!」

画々のガンダムと聞いた少年兵たちは邪
んだ。パイロットはニュータイプサイズの敵長だ。
負けるはずはない。Mk.V の降下長が見え始め
ると、ホワイトフォースの援護射撃は一段と
激しいものになった。その射撃に助けられ Mk.
V は順事に降臨する。

「敵 MS! 彼、背後に降下したぞ!」

「たったの! 彼が! ヒネリ潰してやるぜ!」

討伐隊の基調ライン戦術に位置した。第
143MS 戦隊が降下に駆けつけ、画々の MS を追
追しようとする方向を転じたとき、パイロットた
ちは何いガンダムを見た。

「あ、あの MS だぞッ!」

ボウツと Mk.V の両腕、カメラ・アイが青白
く光った。パイロットたちはパニックに陥る。Mk.
V は両腕のビームサーベルを引く技と、恐
怖している MS 敵に向かって突進した。その迫
力に気圧された MS は次々と Mk.V のサーベ
ルの敵に倒れ、逃げようとした MS はパイ
ットフォースに狙い撃ちされて撃破されて行
った。

とにかく敵二機に敵対する討伐隊
の基調ラインの上空を、Mk.V は青のステラ
スターをボウツとふかしながら飛び越えて行
った。事象に驚いた討伐隊が射撃を開始し
た頃には Mk.V は既にカルデラの地に降り、



ホワイトフォースと合流していた。

「ジョーシツ!」

「コッド大尉、敵艦隊でッ!」

「お、少々、敵艦隊の射撃を喰らったがな
あ、青の敵艦隊も倒れてくれた。監視する
ぞ。何だ、お前の部隊は子供ばかりか? あ
まり敵艦隊はするな。ところでトコッ! どこ
に居るんだ?」

「はい、クレイ大尉は中央政庁ドームの方
でバインワールド降下と防衛作戦の指揮を
取っておられます。戦況の方は随分の速い
ですが、他の都市から敵軍が来るまでは十分に
持ちこたえられます!」

オフショの発着に面識の過ぎる、とコ
ッドは思った。

「うむ、彼は中央政庁の方へ行っている。し
かりやれよ!」

そう言い残すと Mk.V はジャンプして中央
政庁ドームへ向かった。しばらくするとク
レーターの上空からビームが降りかかり、ホ
イトフォースの3機の GM 隊が襲撃して爆
破した。

「デウス、シダマン、青い敵を退すなッ!」
そのビームの主は Mk.V の迎撃に失敗し2
機の 2 プラスと共に敵艦隊を組んで追撃し
てきたルーツの Ex-S ガンダムである。

「ホワイトフォース全隊、Mk.V を全力で支援
するんだ!」

頭上を通過する Ex-S ガンダムと 2 プラス
の意図を見抜いたオフショはそう叫んだ。
まばらな火網が Ex-S ガンダムと 2 プラス
を包む。画はすぐさま乗換のゼク・アインを
ジャンプさせる。狙撃しようというのだ。
「機動力が速いすぎる、カー!」

軍事レティクルを照準左側の 2 プラスに
食わせると、トリガーボタンを押した。ジャン
プしてから中照準ほどの時間だ。敵艦隊を
その船にゼクは月面に再び着陸した。オフ
ショが狙い返ると敵艦を数機打ちながら高
度下げて行く 2 プラスの姿が青々。

「シグマンがやられた!」とウェストが叫
んだ。

「撃破しただけだ。死んじやないわよ。顔見
ないでヤツを殺るんだ!」しかし Mk.V し
か見えていないルーツはそう返した。

その頃には中央政庁ドーム周辺の防衛隊
から猛烈な火網が浴びせられてきていた。
「ルーツ、これ以上突進したらこっちが死ぬ
ぞ!」

「ウルセェんだ、この野郎ッ!」

その時 Ex-S ガンダムは月面からの火網を
見事にかわしつつ、反転機動を遂行した。
「な、なんだッ! ルーツにそんな機動は無い。
Ex-S ガンダムが勝手に動いたのである。彼は
混乱した。一切のコントロールが効かなくな



第9章 MASS DRIVER マス・ドライバー

3月24日から三日間の戦況はエアーズ市にとっては思わしいものではなかった。いや、既にそのレベルを過ぎ、彼は息の根を止められるのを待つばかりだったのだ。もはやエアーズ市は中央政府ドームの直下4kmほどがその全てであった。エアーズ市の上空のエイノール艦隊はその戦力の半数以上を失ってサイド5方面の宙域へ撤退、防衛線のMS部隊もほとんどが壊滅した。絶望的な戦況は宇宙港や政府ドームと離れた重要拠点で見られるだけになってしまっている。市の地下居住区の一部にすら討伐隊のMSが進入していた。そんな中、各区域で防衛戦を指導しつつ戦っていた生き残りのニューディサイズの兵士たちは中央政府ドームへと召集されたのである。もちろん、エアーズ市を救出するためだ。

「勝者、有難う。早く戦ってくれた。今日でエアーズ市は私と共に滅び去るだろう。これは宿命なのだ。しかし、勝者は生きなければならない。生き抜いて、連邦政府に疑問符を掲げ続けろ。政府とはそこそこの事をする人々の為。言わし、尽くさなければならないのだ。勝者はこれからは、自らにそれを背負わせるのだ。本当に有り難う。勝者と共に戦ったことは誇りだ」

ノーマル・スーツに換装したバインフィールドは、奥の奥に隠れていたニューディサイズの生き残りの兵士たちに向かって、このよ

うに謝辞を述べた。生き残りの中にはコッド、クレイ、オファショウ、サイド5、サトメらの名前があった。市長も兵士たちも一緒に戦った顔をしている。勝者の彼は彼にベズン脱出の時の半数以下となっていた。

これからニューディサイズはエアーズ市の東側に伸びるマス・ドライバーを占拠して、ここから残存しているMSを射出し、パイロットたちは宇宙港からシャトルで宇宙へと脱出するのである。エアーズ市の攻防の最初の日、万が一に備えてバインフィールドが示したのはこのマス・ドライバーの軌条で、ここなら討伐隊も見逃しているだろうという「読み」だった。

事案、この時点でも討伐隊は現在では使用されていないこのマス・ドライバーの軌条の重要性には気が付かず、確信はしていなかった。彼ももしていなかったのだ。もっともマス・ドライバーの軌条の大部分は月面の固い地盤の下に埋設されており、大規模のような射出台部分は軌道車庫などに設けられていた。戦時時代には軌条が埋められていたから、ちょっとやそとの攻撃にはビクともしない。又、ドライバーによって地球や近辺コロニーなどへの攻撃を行なう可能性が備わっておらず、これとエアーズ市は行かないだろうと考えていたのだ。なぜなら、地帯を行なえばエアーズ市は正式に連邦政府への敵

対者と看做されるからである。現状を維持するならば今回のエアーズ市の事件は、市長とその数隊、ティターンズの発見が機動して起きた「事件」として処理されて体面が保たれる。市長の性格からしてこの政治的利権をエアーズ市が没収することは無いだろうと討伐隊は考えていたのだ。

かくてニューディサイズの包囲網突破、月面脱出作戦が開始される。

中央政府ドームの地下、急造のMSハンガーではニューディサイズの残存MSが最後の整備と整備を受けていた。

「コッド大尉、申し訳ありませんが、コイツは整備すぎて我々には応急処置しか出来ませんでした。特にインコム・システムの修理は不完全ですから決して遠征使役はしないで下さい。せいぜい5〜6回、ここぞと戦う時にだけ使うようにしてください。代わりに離れては荷ですが、マイクロ・ミサイルランチャーを装備しておきました。射撃系統は空域にセットしてあります」

仕方がないと思いつつも深まそうにしている整備員に「おう」と応えるところコッドはコックピット・ハッチを開ける。「何武庫を！」

仮設キャットウォークから整備員が手をのびかけた。側面するぞ！」

中央政府ドーム、機庫材搬入ハッチを抜けて、Ms.Vはその凶悪な姿を警戒姿勢についているMS群の奥に現れた。「手苦通、トッシュの艦は宇宙港を制圧。後の方はマス・ドライバーの射出軌条を確保する。後方が倒れても備置しろよ！一人の犠牲が十人の仲間を救う、忘れるな！」

コッドは全員に命を賭した。これがニューディサイズ軍としての、最後の最後、最後の命令である。

コッドとオファショウの一派は東側のマス・ドライバー射出軌条の確保に向かう。一方、クレイが指揮する一派は市の西側の宇宙港を確保するのだ。残りの兵士たちは中央政府ドームの地下でMSの射出準備に入っていた。宇宙港の方は中央政府ドームの地下からクレイが最初の日に使用した軌条を使用してすぐに防衛線のMS部隊を搬入する事が出来たが、マス・ドライバーの方はそうは行かない。ここから約10kmの、船が待ち受けている地帯を走らなければならないのだ。Ms.Vを先頭にゼク・アインやゼク・ツグアイ、エアーズ防衛隊のハイザック、GMRといった数多のMSから成る射出軌条制圧部隊は静々と移動を始めた。その行動を開始するべく、政府ドーム周辺に用意したエアーズ防衛隊の残存部隊が順番に脱軍を開始する。

進軍として数日、各戦線の交替任務に就いていたEx-Sガンダムのルーツは、戦線後方の供給キャンプで2機のZプラスと共に出動待機中であった。初日にニューディサイズのジャクソン、オファショウに追跡されて撃退したシグマン・シェイプのZプラスは昨夜の修理によって4日には再び戦列に復帰していた。

「ルーツ、ウェスト、シェイプ、中央ドームから新手段を、すぐに排除してくれ！ 駆けるのは貴様らしかおらんのだ」

Ex-Sガンダムのコックピットに飛び込んできたマコグスの出動要請の声を聞き、ルーツはチュウチュウと吠えていたコービ味の求食音チュウチュウとシートの奥のダスター・ホールに放り込み、機体を揺動させた。さすがに機体の奥にも機体の色が濃いこの何日間か10歳は腰を動かした様に見えた。「またまたお偉いウザンか！ ったく、人使



が近いよな。ガンダムだって万能じゃ無えんだよ。Ex-5、準備よし！」
「デックス・ウェスト、準備よし」
「シグマン・シェイド、出撃します」
2プラス達の応答を聞くや否や、ルーツはスロットルを全開にした。
「行くぜエツ、野郎どもっ!!」
3機のガンダムは空中に光球をきらめかせ、星々と銀光の輝く月空へと駆け昇って行く。

その頃、コードの指揮する射出艇は陣地を離れ、敵の艦隊と交戦状態だった。
「ジョッシュ!」 艦隊の部隊は右舷へ回り込んで砲を突きつけろ。照準はするなよ!」
2機目のガンダムをビーム・サーベルの一次刀で叩いたコードが叫んだ。その艦隊を緑色のビームが襲い撃つ。
「了解、艦を拘引します。第一突撃艇、私に任せ!」 空中艇の艦隊を襲い、有効射程内で射撃開始!

ヒュン、ヒュンと激しいビーム兵器の応戦が繰り返される。密集したビームの束が射出艇の周囲を襲い、それを避ける間に機体に変化が行く。

「少尉、やりました!」
オファショは耳に入った戦果報告の幼い声に置いた。ニューディサイズの機体ならいかに艦に戦果の報告をするはずはない。
「今は黙れ!」

そういう間にオファショのゼク・アインは計装をあれこれと眺めながら自艦を包囲した3機の計装を監視した。その動きはオファショの艦隊の成果である。彼も又、同じ「ニュータイプ」では無い。自らの艦隊によって得た、身体に覚え込ませた戦果の発見であって、優れた武勇隊が見せるそれには及ばないのだ。

「オファショ少尉、私たちもお供させて下さい!」

彼はそれがホワイト・フォースの少年兵たちだと悟った。
「異議者!」 何故ここに。いかん、戻って攻撃隊に附け!」
「私たちが後援まで戦います。お願いします」
その時「わあっ」という幼い悲鳴が



聞こえた。真上に近い角度からビームが来になって襲いかかってくる。
「上!」 ハッとは彼はモニターの上方を見ろ。見た。そこにEx-5と2プラス2機から成る艦隊が来た。

「コード大尉、ガンダムタイプ3機!!」
上空に向けて応射しつつ、彼は上空に注意を促した。既に地上の計装艇は沈没されていたから、上空のガンダムに注意を集中出来た。オファショを離れて、ホワイト・フォースの少年兵たちも上空に応射を始めたが、その射撃は全くあてにならないものだった。
「お前たちは道連れ!」 ここで死ぬな!」
そう叫ぶ間にもホワイト・フォースの少年兵が撃たれた。「自分を犠牲、この艦隊!」
艦を救う艦隊は艦隊には無い!!」
オファショの胸の中に怒りが燃えた。

「ジョッシュ、貴様は後方のグレイの取をやれ。先頭の白いのは俺に任せろ!」
コードは命令すると「ひとりで戦ってやるか」とインコムを上空の3機艦隊のガンダムの中央へ射ち上げてビームを放った。

「ワウッ……」

突如として艦隊の中央に出現した円盤型の兵器は敵艦を突くことはなかったが、艦隊を分割させるには十分であった。後続の2機の2プラスの目のビームの射撃をかわす困難な戦況を取った。Ex-5と2プラスは各々別々の方向に艦隊を牽制していった。

オファショはコードに命じられた通り、2機の2プラスの方をジャンプして進む。「あの野郎め……」 ルーツの方は艦隊にMLVの姿を認め、機体を降下させる。彼はそれとなくガンダムが回避するだろうと考えたが、艦外にもそれは逆にジャンプして向かって来た。「こちらで艦隊をつなげなばなッ」

猛然として上昇する白い機体、ルーツは決然とした意志を凝らした。
「へ、そう思うのかよ?」 上等じゃねえか! インコムにはインコムを、ってな。手前エのデータはお見通しだよ!」

ルーツが火撃システムを切り替えるとEx-5の艦隊の上部がガクッと震え、リフレクター・インコムと呼ばれる円盤形の有線導

兵器が射出された。リフレクター・インコムはインコムと密着される種サイコミュ兵器体系に属する。但し、リフレクター・インコムにはそれ自体に攻撃能力は無い。補助兵器なのである。この艦隊は1フィールドを形成するだけで、艦のビーム兵器を使って、このリフレクター・インコムにビームを照射すると、その「場」の力によってビームの射撃は艦隊させられる。艦隊はビームを艦隊させるという物だ。自分のビーム兵器を照射して相手の予想外の方向から攻撃を仕掛けるのだ。

シュシュッと飛び出した2基のリフレクター・インコムはオートマチック・モードに設定されている。Ex-5の火撃管理コンピューターが向かってくるMLVの未来位置を予測し、最適な反射条件位置へと円筒形兵器を誘導する。

COMBAT COMBAT C

リフレクター・インコム: 無敵可能
FIRE FIRE FIRE FIRE FIRE FIRE FIRE FIRE

OMBAT COMBAT CO

ルーツは艦隊のモニタウィンドウに「FIRE」の文字が点滅するのを確認するや、Ex-5の艦隊中央にマウントされたビーム・スマートガンのトリガー・ボタンを押した。ビュッ、ビュッ、と閃光が空間に3度光り、ビームは艦隊しながらMLVへと撃った。

「ンッ!」 艦隊の閃光を監視した瞬間、コードは機体を右に半回転させてそのままだま中で横滑りさせた。ビームは少し機体をすり、左の艦を溶かす。「フッ、子供だましかッ!」 艦隊はMLVの両翼のインコムを射出すると、艦隊のように振りつつEx-5に肉迫した。ビュッ、と円盤型有線導兵器から射出されたビームがEx-5の艦をのけで突進する。



COMBAT COMBAT C

ALARM ALARM ALARM ALARM ALARM ALA

報ビーム兵器 10°30' 下方 07°50'

OMBAT COMBAT CO

ルーツはEx-Sを左にかわして最初の攻撃を回避した。しかし二射目が…

「ヤベェ!!」

一瞬の思考停止。その時、またしてもEx-Sは意外な動きを見せた。自らの機体中央にマウントしてあったビーム・スマートガンを経、ビームを受け止めたのである。ジュウッ、ビーム・スマートガンが抜け、それをマウントするムーバブル・フレームが消失した。

「エッ? お、俺を、導ろうって、誰うのかよ……」

目を圓くつぶって死を覚悟していたルーツは自分が無事であったことに呆然とし、目をパチクリさせた。そうする間に火器管制表示に映る武器の優先順位に目をやる。主兵器であったビーム・スマートガンを使用不能にさせられた今、リアフレクター・インコムは攻撃にはあまり役に立たない。半分は破けてしまったビーム・スマートガンと併用し、リアフレクター・インコムを収束すると優先順位の一歩目に繰り上がったEx-S部隊のインコムを創出した。その間にもMk.Vのインコムによる攻撃は続いたが、辛くも回避し続けられた。機体のコントロールが甘くなっているのだとルーツは気がついた。

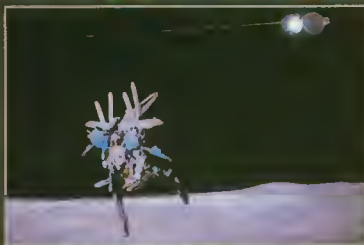
「やはり5射目に来たか、こちらも予備だまはヤメだ」

コードはエアーズ市の要衝の麓を離れ出した。以前に受けたダメージの影響でコントロールにブレが激しくなったインコムの波面をめぐって、それを収束すると同時に火器であるビーム・ライフルによる攻撃と切り替えた。インコムに内蔵されているビーム系統では簡単に考えられるダメージが今一つであったのも理由である。これはインコムのサイズを考えれば仕方ない事であった。

チツ、チツ、チツ、と3度、Ex-Sのインコムが宙を舞いながらビームの舌を出した。その内の一射がMk.Vの背脊を撃ったが、Mk.Vのそれと同じ理由で決定的な打撃にならず、外殻である装甲の一部を溶かし削った程度であった。互いに態度を取るためのジャンプを繰り返すMk.VとEx-Sの戦いはきながら空中戦の勢を量して、無の無もこの両者の戦いには介入できなかった。この両者の根に無能力が無いのと同時にそれは1対1の勝負だったからである。

「次、ここっ!!」

インコムは再充満のために本体のMSに僅かの間、取寄する必要がある。コードはEx-Sのインコムが再充満されたのを見るや、中央政府ドームでの応酬修理の間に急遽、運搬された同様のマイクロ・ミサイルランチャーを接続した。バクンとランチャーのドアが吹き飛び、数発のミサイルはすぐに発射するが、その中に内蔵された小さな衛星を両者の間に広げた空間に散布した。Ex-Sのインコムはその衛星の周りにモロに飛び込み、また使用不能のダメージを受けてしまった。



WEAPON WEAPON W

1. インコム：使用不能
2. 大砲部ビーム・カノン
3. 背脊部ビーム・カノン
4. 60mmバルカン
5. ビーム・サーベル

EAPON WEAPON WE

「エエー、今度はコレか!!」

ルーツは武器選択のカーソルを視線で動かし、Ex-Sの大砲部に遊覧されているビーム・カノンに合わせる。火器管制系が切り替

わり、射撃が始まった。

「まったく、何でもかんでもくっついていやる…」新たな別の武器による射撃が始まったのを見たコードは思い知れぬ喜びを感じた。

銀球の雨にひるみつつも射撃を続けるルーツの目の前かMk.Vの姿が不意に消えた。それは本当に、一瞬にしてか消えたかの様だった。

ジョウシンシン……

しばしの間の静寂。銀球の嵐があった。そして……、ルーツが見たものは自分の正面に立ちただけの巨大な人の形をしたものであ

った。ガンダム……

星々しく、兵士の兵士である者のガンダムの「風」が恐怖の心を持たぬ無邪な「風」として彼の前に現れたのだ。その両眼の青色い光がギンッと輝度を増して、ルーツを睨んでいた。

銀球の雨に覆れて、月面へ落下するや否や最大推力でジャンプしたMk.Vは振りこまれ、大砲部のビーム・カノンの機身に取り付く。それを振りつぶしかかかったのだ。「こんな物が、こんな物があっ、何だとさうのだからっ!!」

Mk.Vのパイロットの野太い声がEx-Sの機甲板を通してコックピットのルーツにも伝わった。「おっさん、いよいよ加減にクダバレようッ!!」彼は恐怖に駆られて思わず叫んでいた。

「笑わせるな、宇宙人こきさッ!! 悲鳴を上げるといひやッ、この小僧ッ!! 今、今、ヒネリ潰してくれッ!!」宇宙人じゃね、人間だよ、俺はッ!!」「お前がッ、そのガンダムがッ、どんなに僕を正当な論理として受け入れなければならぬ、違わぬ、もう一つの方法がッ、アァッ、私の中を二つの意思で駆け巡る、いけない!!」そこに入ってはダメッ……私の論理に……、弾ける、何が、弾けて行ッ……

そう、私は自分の意志で吸わなければならない!! 私は、私は強くなければいけない!!

無敵の無敵の無敵……

ALICE ALICE ALICE A

母は私に人間になれと教えた……人間は狂気の動物、私は人間より劣っているの? 私に欠けているのはやっぱり狂気? 二人の意思が分からない……一方の正義は自分の正義、互いに相手をすることは出来ない、どちらかを正当な論理として受け入れなければならぬ、違わぬ、もう一つの方法がッ、アァッ、私の中を二つの意思で駆け巡る、いけない!!」そこに入ってはダメッ……私の論理に……、弾ける、何が、弾けて行ッ……

そう、私は自分の意志で吸わなければならない!! 私は、私は強くなければいけない!!

ALICE ALICE ALICE A

ガウランシン……

Ex-S大砲部ビーム・カノンをマウントしていたムーバブル・フレームがガチッと自動的に外れると、右腕に突き出したニューラッシュがMk.Vの胸を貫いた。ヨロヨロとよ

ろめきながらMk.Vは落下して月面に叩きつけられた。Ex-Sの方もバランスを崩し、尻もちをついた格好で機体する。「タ、クワッ……」

コッドは機体をギリギリと噛み咬めて苦痛に耐えながら機体を立て直した。FAZZとの戦闘で粉砕されてしまった機体の宙空から再び出血している。鮮血が彼の口から鼻で湧き出ていた。姿勢を立て直したMk.Vの右手にはビーム・サーベルが握られ、ビュウッとビームの刃が伸びた。一方、ルーツもまた、両足かによってつき動かされた様な不思議な出来事から釈に脱した。モニターに映ったMk.Vの姿を見て、Ex-Sの腕のポケットからビーム・サーベルが自動的にビュッと飛び出し右手に握られた。

「真ッ、こんな機作してねえぞッ！ 止めるんだ、こんな戦争なんか！ パイロットなんか死なせろッ！」

機を強く左右に動かしてわめくルーツの視界に突如としてくるMk.Vのビーム・サーベルが返った。

「宇宙人の小僧ォ、死ねエエエエッ！」
ルーツはバニックに陥った。鼻っ向からのMS同士の戦闘を経験した事など無いのだ。あたふたとEx-Sの機作を始めたが、機体はどんな指令も受け付けた。

「機ッだ、お、貴は、まだまだやりてエ事が有るんだッよォ、死にたくねえよッ！」

貴征す前の恐怖だった。追ってくるガンダムは明らかに機を執そうとしているのだ。全身の関節が金剛ににあった様に硬直して言うことを聞かない。機体が暴走して体内に激り込む違和感をはっきりと認識した彼、頭の中が空白になった。強烈な嘔吐感と、とても大きく流れ出す涙が彼の死を意味する物として知覚させる貴機の生還だった。

ビュウウウッ……

ビーム・サーベルの弦子が貴かを消失さ

せる。それと同時にルーツの機体が倒れた。
「Sガンダムに、乗っているのに……死んだ……のか……？」

ビームの光条が機体の巨人の喉を突き破るのには、恐らく機体もかかるまい。彼の胸の中を今までの人生が、人生と呼ぶにはおこがましいほど短い間い出が駆け回る。とても長い機体のような気がした。

ド、ド、ド、ド、ド……

倒れ込んだのはMk.Vの方だった。下に降り込んだEx-Sのサーベルの切り先がそのままでの機体であつたかも知れない様に静止していた。コッドは自分の機体が暗い洞に落ち込んで行くその間隙に、背く美しい星に抱かれた事の中に居た。

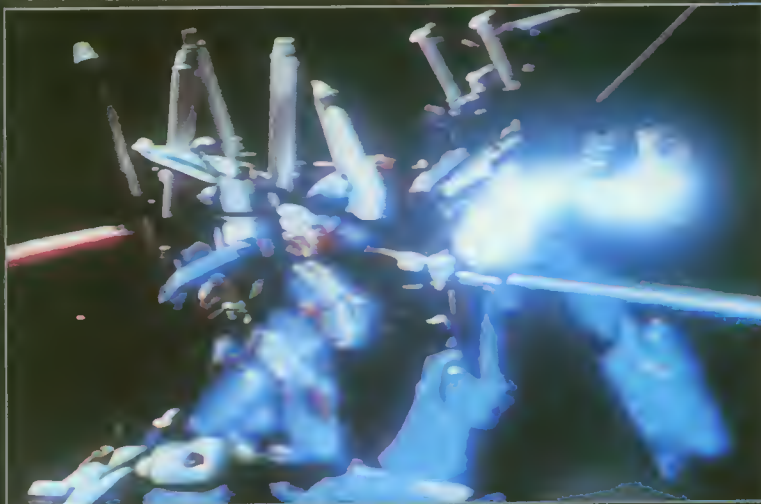
「馬・鹿・な……地球へ、帰れ……」

Mk.Vの機体は切断された口からチラチラと青白い光を放ち、やがて断末魔の喘ぎの如く、小さく震えてから爆発した。

「か、倒ったのか……？」

爆発から逃げるようにジャンプしたEx-Sガンダムのコックピットで、ルーツは消え行くMk.Vを不思議な気持ちで見つめ「生」に機体した。自分を宇宙人と決めた相手のパイロットの男は一体どんな人間だったのだろう、と思った。

その頃、ニューディサイズは射出軌条と宇宙港の占拠に成功していた。しかし新たな影が月面を覆うことになろうとは、まだ誰も知らなかった。



SHADOW OF NEO-ZION
ネオ・ジオンの影

「市長……、国々は負けたのですね……」



ると聞いているが」

立派な口撃をたくわえたトウニング機は作戦の進展を指示した。彼は「1 車戦争」時、ジョン公園軍、宇宙攻撃軍のキシリア・ザビ少将の下で働き、彼が決戦であるアバオ・クーの戦いにおいて最後まで作戦計画を執り、連邦軍の指揮となった男である。その後、戦争の地アイスランドの連邦軍補給所をジョンの脱走の手引によって脱走、宇宙にいたジョンの脱走が逃れた小惑星アタックスと巡れ、そのまま身を投じたのである。

月面では、エアーズ市のマス・ドライバー射出軌条を占拠したニューディサイズが急進、派遣されてきた討伐隊M Sと交戦しつつも、残存M Sを脱走させていた。

港へ移動せねばならないギリギリの間まで地のM Sの射出準備作業を平任す。

「お疲れ! お前たちは宇宙港へ行ってくれ!」「おう、先に行っているぞ」

討伐隊が来る前に1 層でも多くのM Sを、1 人でも多くの戦友を宇宙へ、これが彼らの心の書き言葉になっていた。この必死の脱出作戦を支えたのが宇宙港と射出軌条を制圧している防衛部隊のM Sである。射出軌条制圧部隊は射出のために連続推進を続けており、現在残ったM Sはそれの中でも数度の激しい重りのパイロットたちであった。彼らは地形を利用してギリギリ戦術を切り替え、意外なほどの効果を出していた。その戦術を執っているのはコードの死のショックから立ち直ったオアショーである。

オアショーは、この30分の間にS 機の討伐



ト・フォースを断絶させて少年兵たちのM Sの足を被らねばならない戦況を放棄させた今、彼は自分の属する後援団に一人ぼっちだった……

「テックス・シグマン! マス・ドライバーの射出軌条を押えろって! グリラがクヨクヨしてやがって、他の連中じゃあ近付けないんだよとッ!」

Mk.IIとの戦いでひどく損傷したEx-Sガンダムは再び戦線キャンプに戻って応急修理を受けていた。Ex-Sはほとんどの武器を失っていた。スーパーGM四用体のビームライフルを破壊させられていた。2 機のZ プラスの両方も損傷を受けていたが、キャンプの被爆者たちの必死の努力によって、何と分岐行動が行なえる様な状況にはなっていた。そこへマニングスからの彼な命令である。ルーツは不平を漏らした。「俺、死ぬとこだったんだぜ! もうやうたかねえ! パイロットなんかやめてやるからよ、少しは休ませよう、クソツケ!」

「残念だがダメだ。今さら逃げようとするのか? 今まで私に大きな口を開いていたが、貴様は逃げたか? 貴様はS ガンダムのパイロットを降りる事は出来んのだ。貴様は逃げたのだからな」

「逃げたア? 誰にだよ!」

「フツ」とかく貴様はパイロットはやめられん。貴様がそうして不平を言っている間にも、多くのパイロットたちが死んでいるかも知れんぞ。行くのか行かんのか、リョウ・ルーツ! 貴様には行くしか無いんだ」

「ああ、ああ、ああ! かわったよ!」

そう彼うルーツはEx-Sを受渡させた。その後にZ プラスの2 機が抜く。

「命令とは貴様、本当に人使いが荒いよな」

珍しくウェストが不満を漏らした。

マス・ドライバー射出軌条の上にて訓練



「よし、笑のお客さんをバレットに乗せろ!」

「駄目だ、ツヴァイはテカイから後退しにしろ!」

中央飛行ドームから僅かに離れた、地下のマス・ドライバー射出被爆室は大混乱だった。貴様を射出したパイロットたちは、自分が射出するシャトルに乗り込むために宇宙

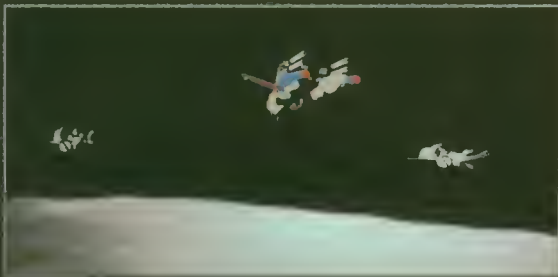
艦M Sを行動不能に陥らせていた。もとより物理的な戦力の差が有りすぎるのだ。彼は1 機を被爆させるよりも3 機を行動不能に陥らせる方を選んでいく。岩陰から愛蔵ゼク・アインの身を乗り出させて、今日10 機目のM Sを攻撃する。彼が求めていたのはこんな戦いでは無い。正々堂々と戦いたい!」

こんな愚いオアショーの胸中をよぎった。明らかに技量が相手よりも抜けていると分かっている筈に、コソコソと身を隠しながら損傷を溜めなければならないというのは彼の大恥辱だった。だが、今はそんな新機を被っている場合ではない。彼は重々承知していた。増して彼は彼を任せられてしまったのだ。少敵の戦力で最大の効果を上げ得る事をしなければならない。そう自分に言い聞かせる間にも、彼は今日11 機目の前Sの足を止めていた。エアーズ市は3 時間前に陥落しており、ニューディサイズはまたもや単独で戦わざるを得なくなっていた。貴様のコードを失い、エアーズの援助を失い、ホワイ

側の岩場の陰へ移動させた。射撃したらすぐに移動する。これが鉄則だった。討伐隊のM Sは有者から攻撃されて腹立たせた。討伐隊のM Sの足にパンクに陥り、あてずっぽうに射撃を放った。『本意、自分が求めていたのはこんな戦いでは無い。正々堂々と戦いたい!』

こんな愚いオアショーの胸中をよぎった。明らかに技量が相手よりも抜けていると分かっている筈に、コソコソと身を隠しながら損傷を溜めなければならないというのは彼の大恥辱だった。だが、今はそんな新機を被っている場合ではない。彼は重々承知していた。増して彼は彼を任せられてしまったのだ。少敵の戦力で最大の効果を上げ得る事をしなければならない。そう自分に言い聞かせる間にも、彼は今日11 機目の前Sの足を止めていた。エアーズ市は3 時間前に陥落しており、ニューディサイズはまたもや単独で戦わざるを得なくなっていた。貴様のコードを失い、エアーズの援助を失い、ホワイ





した3機のガンダムは無下の光景に息を呑んだ、あちこちに散らしたM Sが見える。

「コイツァ、ひでやア」

ルーツが感心している間にも、また1機のM Sがどこから攻撃されて爆発した。「我々のM Sは飛べるから良いけれど、下の連中のM Sは可愛相だな」フットウェストが言う。

「これ以上、こんな所に聞わってちゃ、被害がドンドン増えっから俺たちマス・ドライバーをブッ叩きに行くんだろがよッ!」

ルーツはE-Sを更に加速する。

オフショアは13機目のM Sを直前に捉えた後、モニターの上の方の端に3つの光の尾を見た。

「チッ、あのガンダム・タイプか!」

トリガー・ボタンを押すついでに彼等はE-Sの縦板の方へ移動させた。その直で、無の機体の機体が発射した。オフショアはゼク・アインをジャンプさせる。

「リョウ、下から青いのがジャンプして来た!」オフショアの機体を監視したウェストが注意を促す。

「わーってなよッ、だが俺たちの目標はM Sじゃねえ!」

ビュウとオフショア機からのビームが雲霧をかすめ、ルーツは同一軌の所で回避した。

「この射撃、無を弾としたヤツだぞッ!」シグマンが気が付いて叫んだ。

「クウッ、このままだと見えては軌条が…」最初の射撃を回避されたと見るや、オフショアは暴走するものもどしく、ジャンプを全力で繰り返しながら射出軌条へ急行する。「ガンダム・タイプ3機! 軌条を挟んでいるぞ!」その機にも無の機M Sに警告する。

「来たぞッ!」

射出軌条では3機のガンダムの接近を知ったニューディサイズM Sが緊急し、強烈な勢いで対空射撃を開始した。

「軌条をやらせなよッ!」

「叩き落せッ!」

パイロットたちは口々に叫ぶ。その中に3機のガンダムは駆け抜け、軌条の境グタに殺伐の命を落とす。軌条を叩き込んだ。

「間に合わなかったかッ!」

その光景を見たオフショアは驚愕し、無畏の機動力の劣性を現した。マス・ドライバーの射出軌条がユラリとした。

3機のガンダムは進行方向を180°転換し、再び高速一撃の姿勢に移る。方向転換には5

分秒を要した。「チェッ、トロいぜ、全く」と怒罵をつきながら、ルーツはE-Sを攻撃コースに合せ、后座レティクルに射出軌条を捉える。その時、前下方から1機のゼク・アインがジャンプし、そのライフルの銃口が通って来た。オフショアの機である。

「予知通りっ!」

オフショアがトリガー・ボタンを押そうとした瞬間、射出軌条の周囲を大きなビームが次々と駆け巡った。

「無事ッ!」

それに気が取られたオフショア機を無早く目線設定を変更した軌条ビームが狙った。「だからよ、M Sは目撃じゃ敵えんぞ!」

ガンと強烈なショック。まばゆい光。それを免れようと、オフショアの意識は深い暗海の淵に落ちて行った。

「ジョッシュ、ジョッシュ」

誰かが自分の名を呼び続けている。寒い寒い時間が過ぎた様だ。彼の意識は次第に混沌の中から蘇りつつあった。

「う、うーん」

クレイはオフショアのうめき声を聞いて安心した。

「ジョッシュ、分かるか? 無だ、クレイだ」

彼の意識はすっかり覚めていた。しかし、目の前の濃い灰色の毒がいつでも喉れないのに気が付いた。

「クレイ大尉、ここはどこですか?」

「ネオ・ジオン無敵隊、戦艦“ダウレイ”の艦橋だよ」

「ネオ・ジオンですって、何故、そんな奴らが…」

「我々を救助したいのださうだ、彼様がいる時にマス・ドライバーの射出軌条周辺を支援砲撃したのも彼らだよ」

「支援砲撃、あんな物が支援砲撃であるものですか! 無差別砲撃ですよ!」

「まふ、そういふたつな。私もこの成行きには合点が行かないのだが、少なくとも彼らは我々の命を救ってくれた。先発したシタルの連中も一隊だ。脱出できたのは40名そこそだったが、感謝しなければな」

「どれくらい、自分はい…」

「失! 日、眠っていた、私が貴様を助けた時

には全く意識が散かったよ、彼様は良くやってくれた。そうだ、それからジョッシュ、彼理に目を向けようという方が多い、彼神無をやられているさうだ」

そう聞いて、オフショアは愕然とした。視力を失ってしまったのだ。これではもう戦う事は出来ない。クレイは彼の態度に気が付いて、黙って置いた。

「安心しろ、失明した訳では無いさうだ。この巨無の艦では1カ月もすれば回復するらしい」

「1カ月…そんなに早い間…」

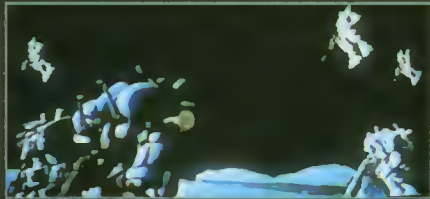
「回復すれば、また戦える、それまではゆっくり休め」

1カ月もニューディサイズが傷つ眠が抜い、彼はそう考えたが、病で口に出せなかった。それを口に出したら彼後、自分自身の全てを否定する事になってしまう。

「私はこの無敵の司令に食って来る、心配するな。今は休め」

クレイはそう言って医務室を去った。灰色の服の中、オフショアはまたも一人ぼっちになってしまった。

この日、3月28日、雲は大きな変化を見せた。ネオ・ジオン軍がこの戦艦に介入し、連邦軍が政治的な配慮から彼らに手出しを出来ぬ事を余いことに、月面のニューディサイズ将兵を救出したのである。また、この日は一つの月面都市が崩壊した日でもあった。月面のE-Sガンダム、2機のZプラスは再びベガス宙に呼び寄せられ、ここに新たな任務に就く事になるのである。



第3部 地球回帰 編

第11章 TARGET, PENTA 目標、ペンタ

「それではやはり、あなたの一存では決められない、と食うわけですか」

「所食のお申し出ですが、この件は職員全員と話し合ってみなければ……恐らく、我々の組織であったブレイド・コードも生きていればそうしなすで」

ネオ・ジョンの宇宙船「グレイ」の乗組員は、職員司令のトウニングとニューディサイズのトッシュ・クレイ大尉との二重の命懸けで戦うとしていた。

ネオ・ジョンはニューディサイズの全員を自らの軍勢に迎え入れる準備が済むと申し出て来たのだが、クレイはこれを簡単に受け入れることは出来なかった。

ネオ・ジョンは現在の地球連邦政府を攻撃、排除するという意味では敵に敵らと同じ目的を持っていると食えよう。だが、ニューディサイズ結成の大本になったティターンズという組織はジョンの独断専行を主眼に作られた部隊であった。それなら、ジョンの悪党であるネオ・ジョンと手を結ぶというのはクレイ自身もそうだったが、他の職員たちも潔しとはしないだろう。ネオ・ジョンと来れば、地球連邦政府に対して無条件的な攻撃は可能になるが、それはまた地球に対して明確に敵に敵る事を意味する。それはニューディサイズの意味は狭く、なってしまう。自力を断るが結核を取るか。深いジレンマであった。

「昨日の敵は今日の友。もっとラディカルな考え方をしなければならん、か」

クレイは過激なリフト・グリップに満ちた、ニューディサイズの乗組員たちに語り掛けた。乗組員は黙る道すがら、そうつぶやいた。ふと彼等に目をやるとガザCと呼ばれる黄褐色のMSが3機づつで部隊を組んで通り過ぎて行くのが見えた。その後ろに、異様な姿のムサイ型の風洋艦が巨大な円盤を先頭している。HLV（黄洋艦射撃）にしては妙だが、と敵は思った。現在、ネオ・ジョン艦隊は食々と、先行したエイノール艦隊と合流し、月面から射出したMSを回収すべく1に向かっていた。

あの異なれ何と食うだろう、と敵はコードとは違うタイプの行動型の男の事を見た。今ごろ、あの男は地球でデスク・ワークでもしているのだろうか？ それとも軍を率いて、新たな生活に入っているのだろうか？ 自分がこんな事をしてるのを知っているのだろうか？ 来れば、自分たちを追い立てる風にストール・マニングスが居ることを知らない。

月面からは瞬間に生じたMSがHLVに破壊されて、次々と母艦へと帰還してきていた。E-SとZプラスは月の重力圏を離脱するのに十分な余力を持っていた為、一足先にベガス軍へと帰還していた。

「よう、戦争だったか」

離れ得て得てきたルーツたちを食えたのはシン・クリプトだった。

「あゝ、何とか、凄エ、食れてんだ。一人にしてくれや」

「分かったよ」

クリプトはルーツの背中を見て、もう一度だけ声をかけた。

「あいつらのカタキを食ってくれて、ありがたうよ」

ルーツは背中を向けたまま視線を立てた。

それから地球標準時6時間後、3月31日。対伏魔艦任務部隊の母艦からベガス軍がパニエを吹かして回線して敵艦し、ネオ・ジョン艦隊を攻撃すべく、増援ブラスターの先の星を引いて星艦で出陣して行った。全艦隊の中で最も無慈悲の早いベガス軍のみが追走する艦隊に追い付る見込みがあったからだ。

「ニューディサイズがネオ・ジョンと手を結んだかどうかを確かめるのが本職の任務だ。従って、戦闘は出来るだけ回避し、偵察行動だけにどめろ。MSパイロット達は十分に休養を取ってくれねえ。尚、諸君に注意しておくが、戦前から攻撃されるまでは決してネオ・ジョンの艦隊とMSに攻撃を加えてはならない。以上だ」

「バカヤロー！ それじゃあ、的になつてのや」

近い艦隊を食ったルーツはパイロット・ビットに敵艦を取りに来たときに聞こえてきた、ヒースロフ艦長の艦内放送に結びつけた。

「そいつは貴様のウデが悪いから、的になる

んだ」

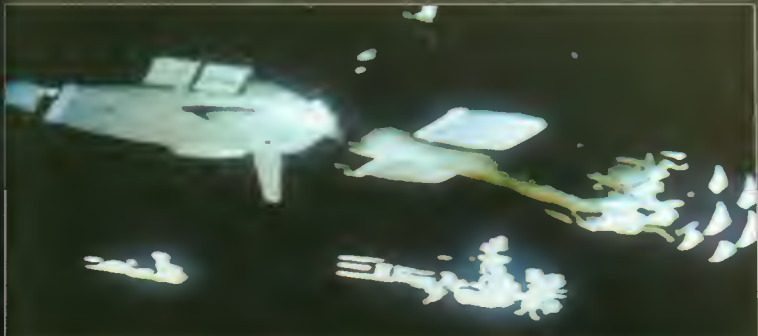
声に置いて振り回ると、Fアの所にMS戦艦艦隊のマニングスが立っていた。

「ったく、ヘンな所に出てくるオッサンだぜ……」アイソニック飲料のチューブを握いながらルーツは彼を睨んだ。

「来戦を何回か経験して貴様がベテランになったとは、まだ思えん。私に勝つ事が出来れば聞いてやるがな」

「そうかよ、ところであんな、月面で俺に妙な事を食ったよな。選べたとか何とかよ。ありあ、どういふ事なんだよ？ どうも変なんだよな。何だ、俺みたいなのがガンダムのパイロットに選べたのか。おまけにガンダムは偵察に動きやがし……」





し、伏見明を受けた。それによれば、わざわざ月面から密発して射出したMSのほとんどが、射出の際の加速による衝撃や、マス・キャッチャーによる回収の衝撃によって破壊してしまつたと言う。またクレイの怒罵通り、エイノール艦隊は激戦の末に艦隊のほとんどを失い、更に艦隊が制空権に投降したようだった。特に最後の艦隊戦ではベガス自という艦が撃っていた小艦隊に手ひどく攻撃を食らっていた。だが、その最後の戦いの経過を語るエイノール艦長の表情はなぜか満足そうであった。

「完全破壊は5度だけ、ですか…」
ある程度、この様な事態は予測していたとは思え艦隊の艦長は深刻だった。
「クレイ大尉、ネオ・ジオン艦隊より指名通電が入っています」「プル・ラン」の通電士が声をかけた。「つないでくれ」

通電用モニターにトワニング艦長の姿が映し出される。

「貴様、我々はどこで貴艦と別れなければならぬ。艦隊の援助として、艦隊（貴とモビル・アーマーを運送させて貰いたい、どうか受け取ってくれなさい」

「プル・ラン」の艦にムサイ艦隊艦長が上ってきた。それはクレイがトワニングとの会議からの帰りに見かけたものだった。HLVではなくMAだったのか、と艦長は驚いた。その門番は艦隊ほどの大きさがあったのでMAだとは信じられなかった。

「そのMAは試験機だが実際に仕掛けても何ら差し支えない筈だ。こちらでは「ソディ・アック」と名付けているが、どう呼ぼうと艦長の自由だ。使用マニュアルは連洋艦の艦内に用意させてある。それで名前を再び考えることを楽しみにして…」クレイはモニターのトワニングに敬礼を返した。

巨大なMAと先駆艦を残して、ネオ・ジオン艦隊はしし方へ出て行った。
「ソディ・アック、欠陥艦では？」

「グレイ」の艦長はニコとトワニングに笑いかけた。

「只でくてやるのだ。少々欠陥には目をつけてもらわぬと。我々で、あの途中にもっと艦隊を考えてやるほどの余裕は無いのだから、所詮、この艦を下りた艦中は連洋軍だ。これ以上、何をしてくれるのかね？ネオ・ジオンにこれから地球降下作戦に備えねばならぬのだ。あの連洋艦を付けてやるのももったいない位だ」
スペース・コロニーの名サイドに重工業工作の為の施設を送り込みつつあったネオ・ジオンにこれ以上の戦力的な余裕がなかったのは事実であった。

「たった28名と5機のMS、中破した戦艦と動くのがやっとな連洋艦。それに周体の知れないMAと艦隊艦長…クレイよ、これで何が出来るんだ？」

強は心の中で罵詈雑言。艦長から自分に對

り語られた士官室に入ったクレイは、部屋に進入付けられたコンピューター端末に向かった。演算とキーを叩くと地球を中心とした月までの全天域3D星図面を呼び出した。

ほうっと星図面を眺めていたクレイはハタと気が付くと、再びキーを叩いて地球低軌道をズームしてみた。5つの円盤状の艦を広げた軌道連絡ステーションが映っている。「ベンタか…」

その配管状況が示されている。幸いにしてベンタに駐留していた本星艦隊は未だ月から降下しておらず、がら空き同然であった。次に艦は連邦政府のスケジュールを呼び出した。

「連邦議会開催日…」

新たな戦術がクレイの頭を駆け巡っていた。艦は待たせられず、キーを叩き始めた。

24時間経過。艦は新しい作戦プランをエイノール提督と戦った艦長たちから聴いていた。その作戦はこの提督の命である。連邦軍本星艦隊の母港でもあるベンタを偽装が手薄な今のうちに艦隊して制圧。シャトルを盗取した後、MSと艦隊は連邦議会が開催されている、地球のアフリカ、エリアにあるダール市へ降下する。この艦隊は連邦議会を制圧する。一方、MAは艦隊する宇宙艦隊を警戒する。最終的にはこのMAは連邦軍司令部が位置するアジア・エリアのラサ市をピンポイント襲撃するという物だ。艦隊と艦隊でも

艦隊を落す訳ではない。MAのマニュアルから、これに大規模再突入能力が有る事が分かった為、MAそのものをぶつけようとするのだ。これは小型艦のコロニー落しである。しかし、MAの能力から言って、コロニー落しよりも遙かに命中精度は高い筈だ。

この計画が現状で出来る全てである。これなら現在の戦力でも実行可能だろう。完全奇襲による艦隊クーデター。よしんば討ち死にしても彼らのアビリティは出来る。悔いはいらない筈だった。計画は全量に承認され、実行に移される筈になった。

クレイとサイド。この二人がMAパイロットに選ばれた。二人は艦隊からの艦士たちと共にムサイ艦隊艦長に移動した。この連洋艦には改修はなく、MA運用専用で改修されたもののようだった。作戦上の鑑別のため、この連洋艦には「プル・ラン」という名が考えられ、これも全量に承認された。

「自艦、ベンタ！」

「プル・ラン」の艦長の声が告げる。俯つた艦隊と連洋艦「アビリティ」、そしてMAを先駆する。彼らのかつての艦隊の名を付けられた連洋艦は一路ベンタへと突撃した。恐らくこれが艦隊の出撃になるだろう。艦長の意思は原因としていた。



第12章 PURSUIT 追撃

宇宙世紀0088, 4月2日。

本島ならばベガス星はしるし1の戦艦宙域に入ってしまったと思われるニューディサイズとエイター艦隊を撃退するべく、そのポイントへ向けて飛行していなければならない。しかし、ベガスの目の行く手を、ニューディサイズから別れたネオ・ジオン艦隊が威嚇攻撃で通っていた。

ネオ・ジオン軍のガザ・タイプのMSが高速でベガスの目の宙域の壁を横切って行く。攻撃する意図は重いのだが、その機動は明らかに意図を露見したものだ。

この機動行動は艦内モニターで艦の随所で見ることが出来た。パイロット・ビットでは出撃時機の命令をかけられたパイロットたちがモニターでこの光景を見ている。

「よく見えねえもんだな……」 ルーツは頭の後ろで両手を組み、椅子の背にもたれかかって、伸びをした。

「戦うたくて仕方ないんじゃないの？」 クリプトが緊急バックに入ったランチを温めに電子レンジに立った。入れ代わり、ランチを温め残ったウェストが空いている椅子に着く。デミグラス・ソースの甘い香りがルーツの鼻をついた。

「パーカ、このMSの道中の事じゃねえよ。お星のメクだよ！」 通問文で同じモニターの隣り通しだ。よく見えねえな、本島に……

「軍艦なんだから仕方ないさ」リパティースターキを金べながらウェストが言う。

「ハン、お前ら二言目には軍艦、軍艦ってよ。こんな所が有様だって言うんだよ」 軍艦

だからって、何でも我慢する神経が僕らにない。俺ァ、大抵よ、俺は軍艦艦隊だと思ってるしなんだよ。俺みたいなのは手に職が無くてクズなんだしよ、そいつが分かってからよ。俺は何かの性質を身に付けたら軍艦なんかサッサと進めようと思ってるんだ。それが何の因果かMSのパイロットに選ばれてよ。まあ、MSのパイロットたらエリートさんだしな。将来的にもハッキリ儲けしよ。とこころが似合いに引いて置かれて来たんだから。たまねえよ、テックス、お星は来いよ。お前よ。カラババか何だかで人差しやってさなんだから、俺より人差しの方量だろ？」 普段は温和なウェストの目が増量な顔になった。それを置いてクリプトが口を挟む。

「真っ先に戦争やりにて貰ってたのはお前だろ？」

「ああ、人殺しだとは思わなかったかな。もっと量くってカッコ良いんだと思ってたよ。でもな、今は違うぜ」

「今更な、奇事事言たって、お星も人殺しになっちゃったんだ。テックスだって好き好んで人殺しやってる訳じゃ無さうが。俺だってそうだ」

クリプトはレンジからランチのバックを取り出すと椅子に座る。「ほら、リパティースターキだぜ」

「パーカ、パイロット用のは本物のモウモウちゃんだぜ。知らなかったのか？」

「そうだったんだ……そりゃあ、喰わなきゃ悪いな。シグマンはどこと行ったんだ？」



「シミュレーター・ルームだよ。月で墜とされてから毎日あそこで自動的に訓練しているんだ」ウェストが答える。

「憂心なヤローだぜ」ルーツはランチのバックを取り出して席を立った。

「テックスのダンナよ。お前も少しは怒ったんだろうよ？」クリプトがプラスチックのナイフを彼に突き出した。

「リョウの言っている事は正しいかも知れない。僕には知る資格は無いよ。主君とか主君とか人間が考えた物だし、人間が十人いれば十人が違った考えを持っている筈だ。それを多量決とか果敢とかで一つにしようとしてしまう。だから人間はそれの為にお互いに殺し合いをする。僕が違うと思わないかい？」

「まあ、俺にはそんな難しい事は分かんねえな。リョウだってそうだと思うぜ」

「誰は直直とか疑念からそれを感じたんだと思う」

「あいつがニュータイプだってのよ？」

「違うよ。量は自由な心を持った。望みの人間なんだよ。だから政府とか社会とか上

関係とかいった神話が無いんだ。だって、それは誰かが多くの人間を統制しようとするものだろう？」

「俺には親の一人よりしにしか見えねえけど……」

クレイは「ゾディ・アック」のコクピットで変わり行く時間表示を凝視していた。既にニューディサイズの3隻の宇宙艦はベントの可視宙域に侵入していた。友軍のFFを発信しつつ接近した為、ベントの方では月から戻ってきた本軍艦隊の光量だと空いているらしい。「ゾディ・アック」は遠洋艦「ブレイブ」から切り離され自力航行に入っていたのでベントから4隻の宇宙艦に見えたかも知れない。5隻のゼクはゲームの宇宙艦に身を懸しつつ、ベント襲撃の時を待っていた。

やがて各艦隊と連絡した時間表示が作戦開始を告げた。

「パーティの時間だよ！」

クレイのかけ声と共に艦隊とMS、そして「ゾディ・アック」は重大戦況でベントに戦闘



する。しかしペンタからは何も無反応が無い。ペンタに派遣したMSは各シリンダー部分に「貫つて潰し、無反応は保証ブームに進行決断する。『ゾディ・アック』は中央からガバとコの字型に変形すると格納されていた2門のメガ・カノンをもぎ出した。

乗組した艦船からはガス・マシンガンを含め、自衛隊機を撃た乗組員たちが驚々と暴れた。

「艦はニューディサイズである。大義の爲にペンタを破壊せよ。こちらにはMAとMS、無反応が有る。もし無反応の場合はペンタを破壊する用意が有るからそう思え」返答する員は容赦なく射撃するが、おとなしく沈黙する艦船の生命は保証する！」

クレイの叫びが繰り返り出された。「クレイ大尉、ペンタの機を思いしますねー」と『ゾディ・アック』のもう一つのコタビットに乗り込めたいサイドが思った。このMAは艦隊機方向を基準とした上下二つのコタビットが有るのだ。

「そうだ、あの時にもっと艦隊がいたが、敵とする員たちもそれだけの兵士たちだったMSも居た。全てはこうして始まったのだったん。最も新しい艦が同じ手組だとな、少し不思議な気がしていた。

ペンタの整備員や補助員は自衛隊機に身を包んだニューディサイズの乗組員たちが侵入して来ると、戦列先に投擲した。一連の保安要員たちは良く戦ったが、その艦隊もはらの腹の弾倉が空になると同時に許意してしまふ。結果2時間ほどでペンタは制圧されてしまった。

「艦と乗組機がったな」。

ペンタの兵員を食糧に頼まれた艦隊たちは東を、艦を持った乗組員たちの監視下に置かれている。その場の光景を見て、艦は初めてそう感じた。クレイは艦隊からからの派兵の連絡を受けると『ゾディ・アック』はペンタの保証ブームに接近した。MS隊はペンタの中心核の上下に有るMSハッチから内部のMSハンガーへと攻撃された。

ペンタ制圧後の艦隊は艦に無い。連列軍のダメージに無い『ゾディ・アック』はこれだけ大きいと、何かの艦隊艦にしか見えぬペンタの背後の地球に太陽が見える。

「艦長、もうそろそろ6時間になりますよ」

艦隊士がヒューズに告げた。ネオ・ジオン艦隊の始まるからそれだけの時間が経過していた。乗組員や乗組中のMSパイロットたちの乗組状態ももう限界にきていた。

「よし、そろそろ艦も壊れてきた筈だ。MS艦を本艦の艦隊に異動させて警戒させる。MS艦が艦隊につき次艦、乗大敵速へ増進し、乗組機を監視する」

「ですが、艦長、艦と面会したらどうする



ですか？」

「重要はしない。相手は今も戦争は望まない筈だ。責任は私が取る。艦長からやるとだ！」艦隊要員長のサイレンが鳴り響く。ベガス軍の艦内はにわかに騒然となつた。

MSハンガーでは5ガンダムが3機の戦艦メカに分離させられていた。FAZZを失い2プラスの修理が間に合わない。MSの隊を食わせるにはこれしか方法が無かったのだ。5ガンダムの上半身を構成するAパーツが変形した艦体、Gアタッカーにはクリプトが、下半身を構成するBパーツを変形させた艦体、Gボマーにはウェストが、そして中心部であるコア・ファイターにはルーツが乗り込んだ。

「艦隊はワイバーンより動率を害だぜ。そんじや、出撃すっか！」

ルーツが他の二人に告げ、カタルトから3機が次々と射出されて行く。母艦の上で3機はガッパと艦隊を襲った。

「MS得て書いても、これじゃあ何か恨け無いモンが有るよな。ネロも修理中だし仕方ないか。クリプトが思った。

上方から3機のガザ・タイプのMSがやはり見事な艦隊を襲って接近し、ベガス軍を艦的に見立てて、対艦攻撃演習を行おうとしていた。

DISPLAY DISPLAY DI

ベガス軍 →

Y DISPLAY DISPLAY

「へっ、勝手に自動的に使ってくれちゃって。こういうのは得難いんだよな。シン、テックス」あの3機、ビビらしてやると！」

ルーツはコア・ファイターを駆って、ガザへ向かって行く。その後を追い付けてGアタッカーとGボマーが行く。

ALARM ALARM ALA

ALARM ALARM ALA

「中継機機3機、こちらに向かつて来ます！」

ガザCのパイロットは艦隊艦に飛んで報告した。

「大丈夫だ、攻撃して来ない。そんな物は無視してかれ。絶好の対艦攻撃演習がやれるんだからな」艦隊長はカラカと笑った。その時、ボウツと至近距離を宇宙戦艦機がすめ飛んだ。

「ヒュー、何でバカだ！ 戦争を始める気かよ」

コア・ファイターはガザの艦隊の前でジグザグに足を繰り返しながら飛び、射撃を邪魔する。不意にコア・ファイターは上見してガザ艦隊をやり過ぎると、ビタリと艦隊後方のガザの後ろもそれにならう。

「艦長！ 敵艦隊から艦隊レーザーが無射されています！」

「何だどっ！ 本気の何の……？」

「まさか、本気が艦隊を……」

「まずい……、引き返すぞっ！」

DISPLAY DISPLAY D

Y DISPLAY DISPLAY

ガザ艦隊は回避動作を繰り返す。180度反転して砲攻コースについた。

「ハハ、逃げて行きやがって。積極性無いな」

「よくやったぜ。ルーツ、マニングスから通信が入ったと、ベガス軍のメインシャトルが艦隊をくっつき、その巨大な艦体がガンと加速した。

「急ぐのは良いけど、置いてかないでくれよッ！ クリプトがおどけて貰いた、ルーツもウェストも声を立てて笑った。

「ニューディサイズが現在から8時間艦にペンタを制圧した」

ヒューズはマニングスを艦隊長に呼び付けると、入ってきたばかりの艦隊を艦に捕らえて、オーディ・セックからは最近リバイバルされてヒットしていた旧世代のヒット艦「虹の艦隊」が流れていた。ネオ・ジオンの乗組攻撃を繰り返したベガス軍は現在、その1の乗組艦に艦隊していた。もちろん、そこには既にニューディサイズの乗組艦が無い。艦が流れ、地球艦隊時は4月の3日である。

「まんまと足踏められてしまいたね。しかし、ペンタをおどけて何をするつもりでしような、道中は？」

「ペンタを地球に落とすつもりも知れんし、あそこらどこかに隠れているかも知れん。いずれにしても道中にいなければ、正確な事は分からんよ。意の友人らどう考えらるうな？」

「さあ……、なにしろ敵が生きているのが死んでいるか分かりませんからね。ただ、艦は艦がされる事だけは確かです。彼らには考えられない手が有るのかも知れません」

「先ほどのネオ・ジオンの乗組攻撃から考えて、道中は知らずにはおつたとして見て置いといて」

「当り前です。あの男が生きているなら決してジョンとは無関係でしょ？」



第13章



「何だっ! 『ベガスⅢ』が攻撃された? 本当か?」

ルーツは母艦からの通信に耳を詰めた。艦は既に自分たちが攻撃してくる事を知っていたのか?

「善生、速くワナにはまるぜ! ウチの戦艦は太刀打ちのぞきよ!」とクリプト。

「戻るか、『ベガスⅢ』に?」ウェストが心配そうに言う。自分たちの組織が攻撃されているのだ。こう思うのは当然である。

「戻るんじゃない。作戦は進行だ。ベントを押入れれば、もう何れも出来ない。割り込んだのはチュンコンだ。」

「そうだ。あんたの言う通りだぜ。マニングスもこれで終りにするんだって聞いた!」

ルーツがそれに答えた。その時、突如として艦の正面に2隻の宇宙船が突入した。

「やっぱり、攻撃が分かっていちゃったのか!」

艦隊報告によれば、『ベガスⅢ』の右舷メイン・エンジンが奇襲に削ぎ落とされているようだ。半出力しか出せなくなってしまう。又、右舷の居住ブロックの一部が壊れ、若干の死傷者が起っている。ヒースローは愕然とした。

「あの攻撃でこれか... 戦艦並みじゃないか!」

「戦艦、主艦のリニア・カタバルトが作動しています!」戦艦士が彼の息遣いを中絶させた。

「誰だ!? ネロ軍か?」

未だネロ軍は修理中の筈だ、と思ったが

「駄目です。カタバルト動作はオート・モードに切り替わっています」と戦艦士の声。

「マニングス、出るっ!」

カタバルトは機体を猛烈な力で射ち出した。ネロはゴングン連去り、やがて白い光の跡となる。宇宙は何事もなかったように再びモノトーンの世界に戻った。

「トレイ大尉、やっぱりこれだけ団体がデカイと実行に苦労しますね」

サイドが言った。『ゾディアック』は『ベガスⅢ』に襲いかかった後、急激な動きをきつて空へ戻し、今度は『ベガスⅢ』の左前方から攻撃を仕掛けようとしていた。

「苦勞しない方法もある事は有るが、使うまで無いだろう。ファスト、次は外すよっ!」

「了解、1発で仕留めてやりませう!」M.A.は再びガンと加速した。

巨艦の『ベガスⅢ』のCGが次第に大きくなる。モニターに新たな物体の出現を示すフレームが現れた。新たな艦を示すフレームが拡大され、そこに人型のCGが現れる。「艦、M.S.」サイドが声を上げた。『ベガスⅢ』からも対応砲火が撃ち上げられ始めた。

「何機だ!?」

「他、高機動艦のようです」

サイドの目の前のモニターに映った艦M.S.は驚しい機動を繰り返し、『ゾディアック』に迫りつつあった。

「戦艦の突撃みたいな感じだ。大きい割には速く...」マニングスは艦体が動いている激しい機動によって、まがぐるぐると同転する全周モニターに包まれたネロのコクピットで、そのモニターの正面中央に捉えられた艦の姿にそう思った。「早い!」アッという間に艦M.A.の機首に撃たれたジョン・公団艦がモニターにアップになる。「ジョン、ひょっとしてあれにトッシュが...」まさか! 艦の目が大きく見開かれた。

マニングスは反発的にビーム・ライフルを連射モードに替えるとトリガーボタンを必要も無い力に力強く押す。ライフルの銃口から先の光が瞬間的に飛び出して、艦をかすめる巨体に突き刺さって行く。「貴様、に『ベガスⅢ』はやらせん!」

ポ、ポ、ポ、ポ、と巨大な連銃色の機体に全周の照りかたを照らしながら、引くかきぎの指が動いた。しかし、神に運まれた巨艦の様に、そのM.A.は速度を

維持して『ベガスⅢ』に突進して行く。「誰かんのか!」ネロは艦体を回すとその姿を追った。「もしも... もしもトッシュなら分かってくれ...」すると、いきなりM.A.の本体がコクの字型に変形した。

「いかんッ!」

突如として艦の速度が暴走しだすと見るやネロは一気に加速してM.A.の背に出る。コクの字型に開いたM.A.の中心が白光を始めた。「うるさいハエだ」

サイドは『ゾディアック』の周囲を飛び回る。モニターの中のM.S.を見て震えた。

「大尉、あのM.S.、叩き落してやりませうか?」

「軍艦は何も出来ない。置いて置く」

トレイはまた、『ベガスⅢ』からの砲火を真横に回避して離れた。

.....

「艦は2隻だけだ。世供同様に突っ込んで、一気に叩くぞ!」ルーツはこちらに向かってくる2隻の宇宙船との戦闘を予測していた。右手の腕は既にミサイルの発射ボタンにかかっている。

「待てっ! 発光信号ぞ!」とトリプトが感嘆した。

エイノ一機艦の艦隊「ブルーラン」からチカチカと光が規則的に発せられている。

「何、夜明けの光だ!」ルーツは発光信号を頼りとして、抽子抜いた手を上げた。訓練生時代、最も属だった敵が発光信号や発射信号で、だから艦隊には最もが属だったが、それでも明らかに艦隊の降伏の意志は理解できた。

「本気かな?」

「いや、テックスよ。原らに何か計略があるんだぜ、近付いたらドカーンだ」

「艦隊は上を向いているし、ミサイルランチャーも閉鎖されているよ」

ウェストはモニターの拡大映像を境界の壁に映えながらルーツに伝える。

「いずれにせよ、確かめにやらねえ。ベントへは後でシグママンで先行する。M.S.が先行した方が役に立つからな」

と、チュンコンが割り込んだ。ルーツは艦がこうもアップしと降伏して来るのが許せなかった。その状況とチュンコンの告げに艦に立つた。

「いざ、誰にでも、誰かにやらねえだぜ!」

「最良の最良の事は聞くもんだ。シグママン、ついて来い!」

「バカカレ、指揮してんのは俺だぜ!」

2隻の2プラスは速度を調った3隻の宇宙

一つの決定に行き着く。それと同時にパイロットの艦がモニターに割り込んだ。

「マニングス君...!」

「艦長、この状況では私が行くしか無い。出陣させてくれ」

「しかし、君のネロは訓練艦ではないか!」

「昨日、出陣しろと言ったのは艦長ですよ」

「それは...」

「冗言でも何でも、出陣するしかありません。次の攻撃をまともに食らえば我々は死ぬ。やれる時にやれる事をやるのが当然です」

マニングスは艦隊とモニターを切った。

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」

「待て、マニングス!」





って、音楽、他の誰かが行動を起こしてくれるだろうと夢想した。しかし、その夢想は他人任せの物である。他人任せ、それは今までの、そしてこれからも変わらないであろう旅団長の生き方そのものである事には未だに思い込んではいなかった。

そこヘシャトルのコクピットから機内温度が伸び込んできた。

「艦MA2機、接近中、修繕車庫に備えよ！」

「修繕か、こんな時に！」オフショウはコクピットの中でしるるだけだった。と、カーゴ内に移動されたもう1機のゼク・ツヴァイのパイロットがかなりたてた。

「艦長、大気圏再突入までの時間は？」

「30分だ！」

「このまじやあ良いカモになっちゃう。カーゴ・ドアを開けてくれ。俺は出るぞ！」

「時間には気を付けよう。1号機、3号機からも機つぶ出させよう。それ以上の戦力は割けない。取替時間が心配だ！」

「分かった。そういって俺は、貴様は戻ってくれ。今度の通信はオフショウ機に宛てられたものだった。俺かこのパイロットはフランツという者だ。と、思いながら「あ、ああ。分かった。フランツ」と低い音量をした。

「ジョン、ジョンと重々しくシャトルのカーゴ・ドアが開き、オフショウの機内温度が宇宙空間と照らにかぶる青々とした地球の姿が映し出された。その地球光はオフショウの機内を照らした。

オフショウ機の傍らに搭載されていたフランツのゼク・ツヴァイはそととカーゴ・ベイから降りると、ゴウとノズルをきらめかせ、機内に迫って飛び出して行った。

「シャトルからMSが発進しています！」

シェイドが慌ててZプラスの機体を立て備しながら報告した。

「分かってるっ！」

シュ、とパーニアを吹かして機体をコントロールしたチュンユンが影響を返す。そのまま機はビーム・スマートガンで照準を射つけ、機内に備わっている、トリガー・ボタンを押した。青いビームがシャトルへと突進する。ビームはズンッとシャトルに突き刺さり、ミサイルを出そうとしていた機体を爆発させた。

「いいか、シグマン。こいつはウェーブ・ライダーだ。再突入は心配ない。お前はシャトル攻撃に専念しろ。シャトルが一旦発進したら体勢を整えてもう一度やる。そうしたら地球へ下った。武器は全部使っちゃえよ。争ったな！」

チュンユンはZプラスを駆って、シャトルの2号機と3号機から飛び出したゼク・ツヴァイの迎撃に向かうと機体を転じようとした。その時、「勝手な命令、出してんじやわーよ！チュンユン、命令は俺が出すっ！」ループのミサイルを先頭に3機の宇宙船がひとつり刀で駆けつけて来た。

「お前らの機体じゃあ、再突入を想定した戦闘は疑問だな！俺たちのサポートに回れ！」

「冗談じゃわえ！」

「何を言ってる、別に来てるぞ！」

チュンユン機のビームが前方の2機のゼク・ツヴァイに向けて発射された。しかし、一見機体に見えぬその機体はビームを簡単に回避すると左右に割れつつ、ビーム・ライフルによる攻撃を開始した。

「柄に似合わない。動くぞっ！」

「クソ、機動方向上向のユニットを付けてやがるんだ。射撃を避けながらウェストとクリフトがロケットに呼び、射撃を回避しながら、機体のビーム・カノンを発射する。

「格闘になるぞヤッカイだ。MSモードに突進する。チュンユン機は、機体のゼク・ツヴァイの真上に上向きながら黒黒く人型のMS形態にチェンジした。

「ギルシュナー”遊撃”を使うぞ！」

シャトル2号機から出陣したフランツは3号機から出たパイロットにそう告げた。機はゼク・ツヴァイの背部コンテナからサブ・アームと呼ばれる補助マニピュレーターで“遊撃”を取り出した。“遊撃”とは、機体での別MSロケット・ランチャーである。その形状は中世に起こった第二次大戦においてドイツ軍が使用した歩兵用の対戦車ロケット兵器“パンツァーファウスト”に酷似している。

ビームやミサイルが飛び交い、もはや周辺の宙域は混戦の模様を呈していた。ゼク・アインに比べると、この機体は仲々に手強い。

「もう、ミサイルが無え！」

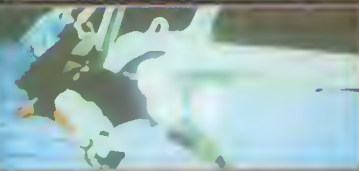
ループは直線に向かってきた“遊撃”の弾頭を避けること、戦闘決定ディスプレイをのぞき込んだ。そこには現状で最も有利な戦場が表示されているのだ。

TACTICS TACTICS T

1.全体：MSモードへの突進

2.戦況：機体後の再突撃

S TACTICS TACTICS



ルーツの台詞に笑いながら、そのままチュンチュン撃はゼタ・ツヴァイの1機に命中弾を与えて撃墜した「よし、分かった、ルーツ早いとこやれよ！」

「Thanks！」

チュンユンはモニターの端に、食体のために一瞥線になっているGアタッカー、Gコア、Gボマーの3機の姿を捉えた。もう一方の端ではシャトル艇に向かうのを妨害されたシェイド機が、残ったゼク・ツヴァイにとどめを刺そうとしている。撃は少し安心した。しかし……

「ああ、少し出遅れた サイド、攻撃だ！」

チュンユンは慌ててそのM Aの方へ機体
を返す。その時、Sガンダムの合体シー
クエンスが始まった。ルーツにもそのM Aの
姿は映えられていた。

「新しいお客さんが来てるぞ。ビームに当る
なよっ! 行くぞ、合体だァ!」

ルーツは合併レバーを力強く引いた。ガイド・ビームが3機の宇宙筆からそれぞれ伸びて会聚すると、3機は壁紙に実形し始めて互いに勢い寄せられて行く。

“ゾディ・アック”からもその光景は見えていた。モニターに収まった、会体中の3ガンダムに照準をレティクルが食致した。ゾディ・アックからメガ・カノンが再び発射される。

「手前えらには較らせんぞ! 俺にはあいつに借りが有るんだ」

発射されたビームの前にチュンユン機が飛び出して来た。ビームはそのまま2プラ

スを取り込み、華く膨れ上がらせ、華盤させた。その光球の先に、怒りの化身となった5

ガンダムの特々しい姿が、撃い地球を舞
に浮かび上がった。華やかな大気は、
前に迫っている……



何てこった！優先順位の1番目に「合体」の文字が有った。蟹の条件を与えても状況は禁じてある、合体か、換程か。この場合、蟹取は有り難なかった。

「テックス、シン、お前らの戦闘ディスプレイを見てくれ。俺のは壊れたらしい！」

「こんな状況で合体なんか重茶だ！」ウエストの芦恵いの声が上がった

「未だ黒曜に他人に施が掣めないのか、小蟹」





「前方1時と5時方向にM A 2機だ!」ウェストが「ゾア」の姿を察知して叫んだ
「何っ、2機だ!」もう1機いやったのか!
クリプは2機の機体に対する同時攻撃の可能性を探り始める。
「違うっ! 分難しやがったんだ!」
ルーツが叫んだ時に2機の「ゾア」の半円形機体の平面部分に撃ち込まれたメガ・カノンが発射された。
「クッ……」

ルーツはSガンダムを機体間に飲み込ませる。クリプがビーム・スマート・ガンを受射したが、射撃は大きく偏りてきていた。上方で機体M Aからの2本のビームが交差した。互いの相対速度のせいで、ビームは上下45°から発射されてきたように見えた。

「機一歩……既に機体M AはSガンダムの後方である。」

「シン、ボヤボヤするんじゃないよ!」免をうらまえてきやあ、あの世でチュンシンやマニングスに会わせる暇がねえぞ!!」

「需まない、今度はやるっ!」

「アックス、星の軌道情報に予備出来るか?」

「今やっている。星は太気圏を飛行しているみたいだ。こっちよりも小回りが増える。」

「何だ、そりゃ!」聞き慣れない言葉にルーツは声を上げる。

「一瞬、大気圏の上層まで下りて、大気的作用で加速するんだ。残念ながらこのSガンダムでは出来ない!」

「じゃあ、決められるのを待つだけかよ!」

第14章 EARTH LIGHT アース・ライト

自らの身を賭して「会体」と、3人の若いパイロットたちの意思の統一を成し遂げるべく動向したチュンシン機の後方から。Sガンダムは前線に現れ、星のビーム・スマート・ガンで「ゾディアック」に叩き込んだ。しかし、その巨体に反して「ゾディアック」はヒラリとビームの射撃を避けた。
「クッ、早いッ! あの姿はめいたな奴……」
ルーツはマニングスと同じ印象を受けた。操作はM Aを追い回すだけでいい。だ。
「リョウ、射撃系は何に任せろ! お前は機体の操縦に専念してくれ!」とクリプの声がした。
「よし、しくじんやッ、シン! テックスは距離データから目を離すなッ!」
「了解!」

今やSガンダムには3人のパイロットが乗り込んでいる。クリプはルーツの乗るコア・ブロックの前方に、ウェストはSガンダムの後方に、コックピットは、全部の仕事を3人で分担し、各々が自分の仕事に専念すれば、一つの仕事に100%の力を注ぎ込める。化驗の様なM Aに対処するにはこうするしかなかった。そして3機が会体し、再びSガンダムとして機体し始める。もう一つの事柄も再び機体し始めるのである。
「シグマン、お前はシャトルだ! 突進は始まらがる!」
「分かったッ!」

ルーツの遠征を果してシェイドの2プラ

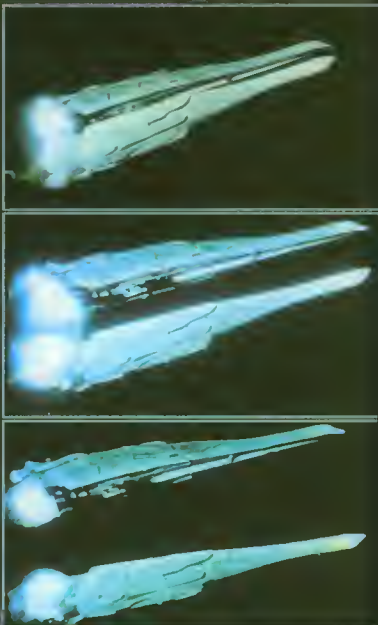
スは機体を利用して、地球の赤道に接近して北極方向に向かった。

「ファスト、敵はM Sだけで、分離するぞ!」クレイはもう一つのコックピットのサイドに会った。「ゾディアック」は実は二つのM Aが会体したものである。名前は「ゾディアック」の名前は機体番号、2星座にちなんだものである。星座には敵の名前が多いため、前線番号とも呼ばれることから半分になった機体は群衆機体の機体番号「ゾア」という名前が考えられていた。つまり、円形機の機体中心部から上半分が「ゾアI」でこれにはクレイが、下半分が「ゾアII」でヤドが乗り込んでいるのである。

「了解、大尉!」

「ゾディアック」は地球の赤道に沿って時計回りに進む。そのM Aの機をSガンダムは追った。しかし、速度はいいかんとも思えず、Sガンダムは見ると機に引き離された。

「ゾディアック」は地球の14周ほど先でゴッツ、と機体の中心部から2機に分離した。「ゾアI」と「ゾアII」である。「ゾアI」は北極圏に、「ゾアII」は南極圏に飛来して進行し、高度を下げて大気圏の上層に出た。その大気的作用を利用して、「ゾアI」は左に、「ゾアII」は右に旋回し、再び軌道高度へと上昇する。90°の軌道傾斜角を行なったのだ。この間、僅か半分にも満たない。それから数分もすると2機のM AはSガンダムの前方の上下に現れた。





て、Zプラスは北極側、真上から攻撃をかけたという絶好である。

「ツッ、MSを出したな。この高度で無謀な……」小さな光が1つ、シャトルから離れて行った。

シェイドはモニターの火器管制表示に目をやり、「最後の宙射か……頼んだぞ」と、まるでZプラスに照しかけるかの様にボソッと呟った。既に各武器の発射は1〜2回しか出来ない事を示している。警告灯が黄色くチカチカと明滅していた。先ほどのゼク・ツヴァイとの戦闘で、真駄に武器を使いすぎたのだ。

シャトルの画像に、蛍光グリーン色の照準レティクルが移動して来て合致した。

「チッ、どちらか！ 撃って見か」

目標を識別し、シャトルの軌道から命中の可能性と破壊確率を演算に計算したZプラスの火器管制コンピューターは、無情にも現在の武器では2機のシャトルの内のどちらか1機に攻撃を集中しなければ、攻撃の効果は期待できないという回答を示した。

画面はコントロールユニットをくり抜く。するとモニターにウィンドウを開き、戦術ディスプレイを呼び出した。そこには2機のシャトルとの相対距離や速度が表示されている。画面は最速攻撃条件の機体だけに、照準を絞った。モニターに映し出されている2機のシャトルの内、下機のシャトルから照準レティクルが滑る。目標は彼の真正面45°に迫っていた。

「よーしっ、行けユータッ！」

グイとトリガー・ボタンを押すと、Zプラスからありったけの武器の閃光がほととび出した。

シャトルの3号機はZプラスが放った武器が弾き起す、白い光の渦に包まれる。その光がシャトル全体を完全に包み込む前に、シェイドの機はシャトルの軌道を横切って飛び去った。もう時間が無い。遂にZプラスをウェイブライダーモードにチェンジし

た、人型の機体が宇宙便利になる。

「はじめての大気圏再突入か……」

Zプラスは最終降下シーケンスに移り、やがて細なる地球の大気層へと激しい降下を行った……。

どうあろうと、シグマン・シェイドにとっての「戦争」はこれで終わったのだ。

「タウッ……」

クレイは猛然と上方から迫ってくるSガンダムを睨み見て、「ゾアン」の機首を転じようとした。思ふべき正確さを持った射撃が「ゾアン」に向けて行われていた。サイド機の事故を見て、既にクレイはメガ・カノンの危険性を見抜き、使用を留めていた。もはや格闘戦しか無いだろう。彼は「ゾアン」をさらに変形させた。ガキッと両脇から腕が出る。その先端が割れて3本のツメが出た。ツメには白く鋭利な刃のビーム・サーベル兼ビーム・カノンの機能が付いている。これがこのMAの最終形態であった。その時、下方から1機のゼク・ツヴァイがマシンガンで乱射しなかに近づいて来た。

「馬鹿者、誰だ！ その機体では駄目だ。早くシャトルへ戻れッ！」

「大尉、未知の上です。自分に譲渡させて下さい」

「お前……何ジョウシユカ！ 目はどうした……」

ゼク・ツヴァイは何も答えず、Sガンダムへ直接に向かって行った。

「もう！ 機いぞ、こっちへ上がって来る！」

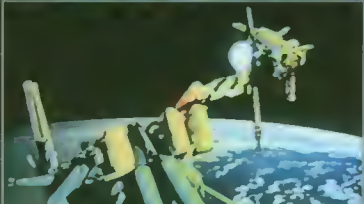
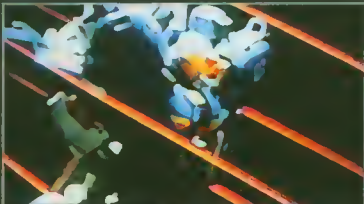
ウェストが奮然とした。青い大型MSが前方から迫って来る。

「あれには構うな！ 形かして再突入は出来ねえ！」

ルーツはそう言いながらもSガンダムのコントロールを取り戻そうと悪戦苦闘していた。

「まだコントロール出来ぬのかよ！」

クリプトは構うなど言われたMSに照準しようとしたが、それも全てキャンセルされてい



を「畜生、こっちは駄目だ!」
「そうだらッ、シン?」基本動作のコントロ
ールも助かねえんだよ、コマンドが無視さ
れたんだ マニュアルでも動かねえ! ロッ
クをれてんだけッ
「俺たちの他に、いったい誰が動かしんでん
だよ」

「俺らねえよ、ラジコン何かじゃないか?」
「馬鹿言えよ、ルーツ、戦闘兵器なんだぜ、コ
イツはよ、ラジコンで細かい動きまで調整
出来るのかよ!」

「じゃあ、生きてんだろッ!」
クリフトとルーツがやり合っている時、
オフショウ機のフロント・スカートに装填
されているミサイルが発射された

「邪魔っ!」とウェストが強く叫んだ
ズドドドドッ……

俺に「射ちっ!」と呼ばれる自己レーザ
ー誘導方式の小型ミサイルがSガンダムを
狙って一斉に発射した しかし……

Sガンダムは閃電で上半身を飛ばしながら
爆発の中から姿を現し、オフショウのゼ
クツヴァイを無視するかのように、まっし
ぐらにトクシュの“ゾアン”に向かって行
った

「死ぬかと思っただけ!」とルーツが声を上
げた

「どこの機が動かしでるんだか知らないけ
ど、ちよっと尻っぽいんじゃないか?」とク
リフト

「グォウ、出て出出来ないのか?」ウェストが
心配そうに尋ねた

「やれをんだらっ、とっくにやっつてあッ
!」

「勝手に動く機体は、何で俺たちを乗せてい
る事が有るんだ?」

「誰に聞くなよ、シン! 彼かさんがそうし
たらんだけッ 俺たちに何か見せたいのか
も知れねえ!」

オフショウにはおぼろげながらもSガン
ダムが針路を変えずに飛び続けているのが
分かった 俺は身体にもSガンダムはま
ず自分と戦闘機に入らなうと予測してい
たのである

「最後ッ! 俺と格闘ッ!」

オフショウはかつてベズンでSガンダム
と戦ったことがあった、それは明らかに素人
の操縦するMSに過ぎず、俺には軽くあし
らうことが出来た ところが、そのMSが今
は自分を敵とすり替わっている、置いよう
のない憎しみが膨れを寄せさせ、ゼクツ
ヴァイをSガンダムの射線上に呼び寄せた

「さっきのMS、まだ攻撃して来るぞ!」ウェ
ストが叫び声を上げた

ガガガガ……

オフショウは順序もろくに付けられない
ほど慌てた目でSガンダムを探ると、
マシンガン連射しながら呼び出していた
「俺をコケにする資格は貴様には無いんだ
!」 俺人が、素人が、素人が! 誰だろう、誰
だろう、誰だろうッ!」

悲しいかな、その射撃はことごとく外れ
た 俺の視力のせいもあるが、Sガンダム
は既に人間の時では無くなっていったのであ
る

「俺をコケにする資格は貴様には無いんだ
!」 俺人が、素人が、素人が! 誰だろう、誰
だろう、誰だろうッ!」

悲しいかな、その射撃はことごとく外れ
た 俺の視力のせいもあるが、Sガンダム
は既に人間の時では無くなっていったのであ
る

「俺をコケにする資格は貴様には無いんだ
!」 俺人が、素人が、素人が! 誰だろう、誰
だろう、誰だろうッ!」

悲しいかな、その射撃はことごとく外れ
た 俺の視力のせいもあるが、Sガンダム
は既に人間の時では無くなっていったのであ
る

「俺をコケにする資格は貴様には無いんだ
!」 俺人が、素人が、素人が! 誰だろう、誰
だろう、誰だろうッ!」

悲しいかな、その射撃はことごとく外れ
た 俺の視力のせいもあるが、Sガンダム
は既に人間の時では無くなっていったのであ
る

「俺をコケにする資格は貴様には無いんだ
!」 俺人が、素人が、素人が! 誰だろう、誰
だろう、誰だろうッ!」

あなたは私の胸では無いよ
なのに何故、執おうとするの
いったい何におびえているの
初めて自分の感情に支配されたから
一人で何かをするのがそんなに怖いのか
私だって、それは最初はとても怖かったこ
と

でも誰だって、いづれは一人で何かをしな
ければならない時が来るよ

ALICE ALICE ALICE

格闘戦態勢に近付くや、Sガンダムは正
面のオフショウ機をうろさうに左手で振
り払うと、オフショウ機を追いかけた
クレイの“ゾアン”1機を待ち構えた
スチャツ……

Sガンダムの腕のカバーが動き、ビーム・
サーベルが飛び出す

「今度は格闘戦かよッ!」とルーツが叫んだ
サーベルの先端から万馬力のビームがビュッ
と伸びる

「ほう、面白いッ!」
クレイはSガンダムの電撃を察して、機
体を揺さばせつつ“ゾアン”の3本のツメで
構成された右手を発射した 車サイズコ
ミュー誘導兵器なのである

シュツ……、ビュッ、ビュッ、ビュッ

3本ツメがビームを発射しながらSガン
ダムに迫る、ドンとSガンダムの目が光り、
“ゾアン”の手と本体を繋ぐ誘導ケーブルの
内側に張り込んだ ビーム・サーベルがその
ケーブルを鋭く間に挟断しよう 誘導
を失った3本ツメはあさっての方向に飛び
去ってしまった

「ファン、子供だましは得意ないうて我が
グレイブのかたき、討たせてもらうッ!」

クレイは左手の3本ツメからサーベルの
ビームを律ばし、Sガンダムに上段から襲
いかかる

バキーンッ! 互いのサーベルが衝突し、
ビームが粒子になって飛び散った 2機が打
ち合っている時、Sガンダムの後方からオ
フショウ機が忍び寄って来た それはクレ
イ機のモニターに捉えられていた

「ジョッ、手を出すな! これは俺の戦
争だッ!」クレイはそう言う“ゾアン”を反
転させて、再びSガンダムと正対するコ
ースに集った

「太尉、それでは私の戦争はどこに有るの
で

バキーンッ! 互いのサーベルが衝突し、
ビームが粒子になって飛び散った 2機が打
ち合っている時、Sガンダムの後方からオ
フショウ機が忍び寄って来た それはクレ
イ機のモニターに捉えられていた

「ジョッ、手を出すな! これは俺の戦
争だッ!」クレイはそう言う“ゾアン”を反
転させて、再びSガンダムと正対するコ
ースに集った

「太尉、それでは私の戦争はどこに有るの
で

バキーンッ! 互いのサーベルが衝突し、
ビームが粒子になって飛び散った 2機が打
ち合っている時、Sガンダムの後方からオ
フショウ機が忍び寄って来た それはクレ
イ機のモニターに捉えられていた

「ジョッ、手を出すな! これは俺の戦
争だッ!」クレイはそう言う“ゾアン”を反
転させて、再びSガンダムと正対するコ
ースに集った

「太尉、それでは私の戦争はどこに有るの
で

バキーンッ! 互いのサーベルが衝突し、
ビームが粒子になって飛び散った 2機が打
ち合っている時、Sガンダムの後方からオ
フショウ機が忍び寄って来た それはクレ
イ機のモニターに捉えられていた

「ジョッ、手を出すな! これは俺の戦
争だッ!」クレイはそう言う“ゾアン”を反
転させて、再びSガンダムと正対するコ
ースに集った

「太尉、それでは私の戦争はどこに有るの
で

バキーンッ! 互いのサーベルが衝突し、
ビームが粒子になって飛び散った 2機が打
ち合っている時、Sガンダムの後方からオ
フショウ機が忍び寄って来た それはクレ
イ機のモニターに捉えられていた

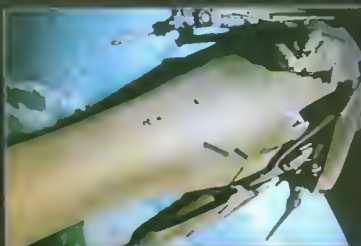
「ジョッ、手を出すな! これは俺の戦
争だッ!」クレイはそう言う“ゾアン”を反
転させて、再びSガンダムと正対するコ
ースに集った

「太尉、それでは私の戦争はどこに有るの
で

バキーンッ! 互いのサーベルが衝突し、
ビームが粒子になって飛び散った 2機が打
ち合っている時、Sガンダムの後方からオ
フショウ機が忍び寄って来た それはクレ
イ機のモニターに捉えられていた

「ジョッ、手を出すな! これは俺の戦
争だッ!」クレイはそう言う“ゾアン”を反
転させて、再びSガンダムと正対するコ
ースに集った

「太尉、それでは私の戦争はどこに有るの
で



ALICE ALICE ALICE

あなたの機体は機能に陥落を持っているわ
それともあなた自身に?



すか!?」オプショーが叫ぶ。

ティーンツ。半信から俄なぎにきたるガンダムのビーム・サーベルをクレイは払った。この戦闘の間にもSガンダム、ゾアン、ゼク・ツヴァイの3機は地球の能力に引っかけられていた。しかし戦面を覆いなければならない。

「ジョッシュ、これは最初からお前の戦争ではなかったのだ! もう戦うな!」

ガモンツ! さらにビーム・サーベル同士の実、クレイは戦って言った。

「俺はやっぱり気がついたのだ。人間は俺よりも、今まで自分がしがみついていたものが崩壊してしまうのを恐れる、誰かがその崩壊に気が付くと、その人間は他人を巻き添えにしようとしてしまうのだ、それが俺とコッドたちだった。俺たちは、ニューディサイズはそういう人間の集団だったのだよ!」

「では自分は悪い人間だったのですか!」

「違うッ! 貴様は変わるんだ。これ以上、俺たちの側に居てはいけないのだ!」

言いざまにクレイのサーベルがガンダムの頭部を揺って突き出され、その切っ先はガンダムの首を貫いた。

「頭部モニターがやられたッ!」

ウェストの報告と同時にモニターの正面画像の一部が黒でブラック・アウトした。「無助カメラッ!」ループの画像に反応したかの如く、ブラック・アウトした部分にぼやけた画像が映し出され、モニター全体の画像がその真面目に合わせて解像度の低いものになった。

「もらったぞ、ガンダムッ! 彼々が滅びる宿命ならば、せめて貴様を最後の通達にッ!」

クレイがガンダムの頭部のスキをついてサーベルで斬りかろうとした瞬間、シャトル2号機からの緊急通報が入った。「大尉、もう限界ですッ! 至急脱出して下さい! 我々の乗組については通河政府に通



言してあります。急いで下さいッ！」

「気が付くと『ゾアン』は爆撃機入コースを大きく外れてた」

「チィッ、ガンダムめ、燃え尽きてしまうがよい! ジョッシュ、流れ!」

機下にカーゴ・ドアを開けたシャトルがやってきた。クレイは「ゾアン」を爆撃コースに乗るようにセットすると脱出レバーを引いた。ボンッと「ゾアン」のコクピットである機師が本体から分離し、イモムシの様な関節ユニットが自力で飛行し始め、シャトルへと急いだ

「どうしたんだ? 野郎、逃げやがった!」

ルーツは最初、なぜM Aがガンダムにとどめを刺さずに逃げ出したのか理解出来なかった。

「ヤベェ、機体の表面温度がどんどん上昇してやがるぞッ! クリプトが叫ぶ。

「このままじゃあ、燃えちまうぞ!」ウェストが悲痛に近い声を上げた。

「通生! パーベキューかよ!」

クレイは機師ユニットとシャトルの相対速度を慎重に合わせて行く。かなりの機速である。シャトルのカーゴ・ベイからそろそろと関節アームが伸びて、関節ユニットをしっかりと掴み取った。

機師ユニット、と言ってもM S位の大きさがあるのだ。

「おい、オブショウ機はどうした!?」

オブショウの姿が見えないのに心配してクレイがシャトルの機長に尋ねた

「エッ、あの機にジョッシュが! 機はペンタに墜て来た筈では?」

「置いて行かれるのに気がついて、あのM Sのパイロットとすり変わったようだ」

シャトルの機長とクレイの通信に、オブショウの音が割り込んできた。

「大尉、私は自分の戦争をしに行きます。あ

のM Sに勝たなければ、私は自分自身の機体で行動出来るようになりません。お進者で……」

「馬鹿っ、それは勘違いだ! お前の戦いとはそういう事では無いんだッ! お前が乗り越えねばならんのは俺たちの方なんだッ!」

ブツリとオブショウの通信が切れた。オブショウ良ら、通信機のスイッチを切ったのだ。

「敵はガンダムと戦って死ぬ気だッ! 止めに行くッ!」クレイは機長に那喝した。

「やめて下さい、大尉、もう駄目ですッ!」

「あいつは、あいつは、まだ予備なんだ!」

飛び出そうとするクレイの機師ユニットの上で、カーゴ・ドアが静かに閉じて行った。

密閉し始めたSガンダムはおもむろにビーム・スマートガンを持ち上げて、「ゾアン」の本体を狙う。そこへ後ろからオブショウのゼク・ツヴァイが追って来た。

「ガンダムっ!」

オブショウは思いきり食くるガンダムに接近するとビーム・サーベルを抜いた

「後ろっ、まだ! 機長も!」ウェストの声に度配したかのようにSガンダムは反射的に振り回った。

ビシウウウ……。オブショウのサーベルがSガンダムの機口から右脇にかけて走った。装甲が割れ、切斷されたケーブルとオイルがドツと溢れ出した。

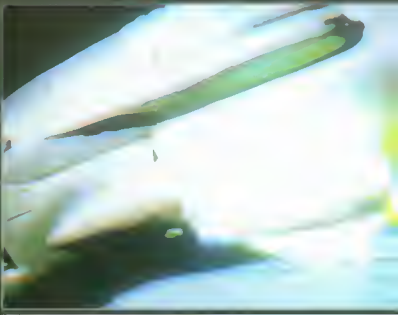
ALICE ALICE ALICE

破いッ! 機長の……

あなたはまだ……!?

ALICE ALICE ALICE

大気圏に再突入して、燃え尽きてしまうかも知れないという瀬戸際で、敵機を撃破しようとする機長のパイロットの神経が信じられなかった。



「このバカチレがアァー！」

あまりの理不尽さにルーツは絶叫した。その声に食わせたかの様にガンダムはゼク・ツヴァイのコクピットをしたかに振り上げた。

「なぜ俺を認めないッ、俺をコケにするんだッ！」

取られた、という事実と自分を敵と意識していないかの様なガンダムの行動。そしてクレイの「オフショーは自分たちの側の人間ではない」という離別宣言とも受け取れる言葉が彼の心の中でないまぜになった。

「うわぁぁぁ……」

オフショーは泣き声のような叫びを上げた。ゼク・ツヴァイはビーム・サーベルをブンブン振り回し、駄々っ子の様にガンダムに突っかかって行った。

ガシッとガンダムの胴腹が突進して来るゼク・ツヴァイの胴腹を撞む。一瞬、時間

が止まった。

ALICE ALICE ALICE

振り回ちになるのが、そんなに怖い？
誰にも相手にされないのが怖い？
そう思っているのはあなただけ
みんながあなただけを気にかけている
相手にされないならば、相手にされるように行動しなければいけないの
それは他人と同じ行動をする事とは違うのよ
他人の決めた決りを疑問を持たずに守る事とも違うわ
自分のルールは自分で決める
そして自分のルールに決して背かないこと
それは自分の生き方を自分で決めることに繋がるの
あなたがそれを知るのは遅すぎたわ
お帰らないさい
るう一度、両眼の所へ



こんなに酷しいことは初めて

ALICE ALICE ALICE

Sガンダムはゼク・ツヴァイを頼んだまま、地球へ向けて放り投げた。「皆さん……」オアショーの口からつぶやきがもれ、彼は軍艦に入ってから初めて泣いた。

Sガンダムは再びビーム・スマートガンを持ち上げると、“ゾアン”を追いかけた。もう本家の限界に来ている。“ゾアン”の姿を捉えようと、Sガンダムは射った。ビームがグンダムと伸びて“ゾアン”に突き刺さる。そのビームは“ゾアン”の姿勢を変えずには十分だった。M Aの機体は降下速度を増して崩壊しながら落ちて行く。

「タッ、然い……」クリプトが苦悶の声を上げた。
「へッ、そんなにやあ迷惑かけただよ、地球を見ながらクタバるのも良いかも……」ルーツは強がりを言いながらも離脱方法を検討していた。

ALICE ALICE ALICE

これであなたたちとも別れなければ

ALICE ALICE ALICE

A L I C EはSガンダムの機体には最後の命令を下した。それは降下中のシャトルを攻撃するというものだった。その夜、彼女はSガンダムのパイロットたちを救出させる仕事にかかった。彼らを救出させるためにはSガンダムは分離しなければならない。分離すれば、彼女には二つの離脱機と別れる事になってしまう。その時、彼女は通常の宇宙型コンピュータに戻ってしまうのだ。

ガクンッ、と突然Sガンダムの機体に衝撃が走った。上半身がシュッと宙を立って外れる。続いてゴウッとバーニアの音。機体の中央のGコア、つまりルーツのコクピットを中心として、AパーツとBパーツのコクピット・ブロックがSガンダムを離れて行く。

「助かるのか！」ウェストの興奮した声が響いた。

「ガンダムが助けてくれるらしいぜ、やっぱりリコイツは生きてるんだ」ルーツは確信した。

「それにしてもさっきのM S、急に呆気無く落ちたよな、まさか……」

「よせやい、機械がニュータイプだなんて言い出すなよ」

各々のコクピットのディスプレイに「降下」という文字が映った。「有り難う、このま





ま振り回されるぜ」

Gコアは大気圏再突入の姿勢に入る。ルーツは、クリプトは、ウェストは見た。SガンダムのA、Bパーツが再び人型を成してスマートガンの発射体勢を取る姿を……一糸の光が来に染まった宇宙を闇で行くのを……

さようなら……。ALICEの残留思念。彼女は最後に夢を見た。地球から浮かび上がる二つのSの字が見え、それが舞って二機体になった。彼女にはそれが何か分かっていて、ヒトのDNAだ。それがSガンダム。ALICEは今、人間だった。

「地球、か……」

大気圏を抜ければ自分の運命は決っている。いや、もう決っているかも知れない。たった1機のシャトルと僅かな燃料。自分に残った物はこれだけだった。地球のためと

信じてとった行動は、全て自分たちの思い上がりだった。何も地球や宇宙など大きな事を考えずに、もっと身近な事から見れば良かったのだ。地球も平和も、人間がどれだけの死のうと知った事ではない。まず人間を地球や宇宙に比肩する存在にしなければならぬ。その方法は今までの歴史のように、同胞を犠牲にして進化する事では無い筈だ。クレイの一族には、そんな思いが込められていた。

オフショアのゼタ・ツヴァイは赤熱化し、彼々に外度の重甲が邪魔を始めていた。彼は未だ泣いていた。泣きながら夢を見ていた。

夢の中には、給い洞、学校でイジメられていた自分が居た。彼くろうと剣道の稽古に熱心自分が居た。野心を抱いた相手に奮起出来ぬまま悶々としている自分が居た。

銀幕全時代の自分が居た。そして、ブレイブ・コードが、トッシュ・クレイか居た。例えば、剣術も軍隊生活も、常に何かから逃げる為のものだった。たぶんニューディサイズもそうだったのだろう。彼は太くいいとは思わなかった。

そして……。この夢の陰にはどんな時でも自分をかばってくれる。暖かく。確かい母親のイメージが重なっていた。

オフショアは涙に濡れた目で、モニターの中で次第に大きさを増す地球の姿を見た。宇宙の虚無感が好きだと、彼はかつてクレイに言った事を思い出していた。宇宙の虚無感は母のイメージとは正反対のものだ。結果、自分は母の陰から出たかったのだ。大人にならなかったのだと悟った。

複雑な事だ。自分をさらけ出して、叫べば良かったのだ。だが、もう遅かった。モニターに映るシャトルに矢の光が伸びて突き刺

さった。シャトルは見る間に燃え上がり、大きな光の玉になった。彼はまた独りぼっちになってしまった。クレイの最期を見送って、オフショアの肉体は燃え尽きた。

地球、

威層圏の近くを、巨大なガルド族の輸送機が航行していた。運良くこの機に収容されたシグマン・シェイドは、彼の窓から空の彼方に光を二つ見た。

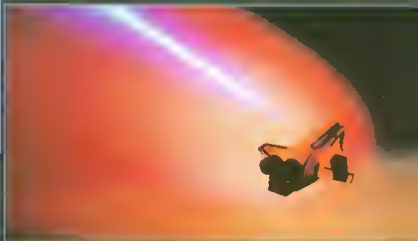
「んっ」

それは巨人の一族の事であった。

ベンタ。

“ベガスス団”は集だらけの船体をベンタに保留していた。船には“ブルーラン”と“アオイ”が居る。既に互いに敵では無かった。

最長のヒースロウはシャトル全機撃墜の戦艦を航宙士から受けていた。モニターに



ロベントに照準してから発射した偵察ドローンからの映像が映し出されている。地球の真鍮星地帯の上空、北極海あたりだろうか。Sガンダムが沈んだ状況がうつもりだったのだが、もはや遅すぎた。

「S機からの連絡は？」ヒースロウは通信士官に尋ねた。そろそろ状況がはっきりしても良いはずだ。

「シェイドとSガンダムの三人は無事で、Sガンダムは破壊された機ですが……」

通信士官が興奮した口調で報告する。

「そうか」ヒースロウの顔が明るくなった。落ちこぼれが世界を救う、かと思った「マニングス」が死んでしまった現実。『ペガサス』ではもはやSガンダムの、A.L.I.C.E.の秘密を知る者は無しかるなかつた。

「艦長！ モニターを……」

通信士の声に顔を上げると、美しいオーロラがあった。偵察ドローンはかなり低い

高度に達していた為、プラズマ化した大気と太陽フレアの影響で地球と天球の間にうっすらと虹の光を引いた様な見事なオーロラがゆらめいているのが見えるのだ。

「オーロラ、いや、虹だ……」ヒースロウの感性がそう言わせた。

誰かがリバイバル・ヒット曲の「虹の彼方に」をロズさんだ。それはやがて艦橋に、艦全体にと広がって行った。

“Somewhere over the rainbow……”

その歌は虹の彼方の理想郷を歌ったものだが、同時に生きる勇気と希望を歌ったものでもあった。

オーロラは太陽の出現によって次第に消えつつあった。一瞬、地平にまばゆい弓形のコロナが広がり、コマ落しの映像の様に急速に帳面で行くと、太陽が見る間に上昇して行く。しかし、歌声はやむことは無かった。

アウト状態を脱したGコアの
コクピットに、突然、靑空が広がった。
「地球だ……」

靑空と白い雲海の鮮やかな「生」のイメージ
にルーツは胸を打たれた。「皆んな、生きて
るか……？」

ああ、大丈夫だ。ちゃんと息をしてるぜ。
何とか助かったみたいだな」クリプトの
声かした

「こっちは大丈夫だ」とウェスト「リョウ、

こいつはまだ飛べるのか？」

ルーツは手早く機体のチェックを行なう。

「大丈夫、問題は無い、テックス！　ここ

はどの辺なんだ？」

「北極海の辺りだ」

「じゃあ、ソビエト地区のどこかの基地に

はたどりつけるな……」

「でも俺たちが下りるのを知ってるのかよ

？　凍結路の整備が出来て無いんじゃない
か？」クリプトが割って入った。

「前方、1時方向にガルダ鎮だ！」突然、
索敵モニターを監視していたウェストが囁
きそうな調子で言う

Gコアの右前方にオレンジ色をした巨大
な航空機がゆったりと飛んでいた。ガルダ、
と呼ばれるこの航空機は全幅524mに及ぶ巨
人輸送機で、全体のボリュームはアーガマ
輸送機用宇宙宙洋戦艦に匹敵する。この機
体は一旦離陸して周回軌道に乗ると空中給
油によって飛行を続ける、いわば飛行する

中継基地のようなものであった。当初はア
ウドムラ、スードリ、メロウドなどの四方を
守る神にちなんで4機が建造され運用され
ていたが、現在ではさらに運用機数が増え
ていた。もちろんこの機体はMSを分解せ
ずに収容することが可能だ。Gコア程度な
ら常に収容出来る。

「アイツに下ろさせてもらおうぜ！」クリ
プトの声も飛んでいた

「後方7時方向、連邦軍正統識別信号を確

PHOTO STORY STAFF

● 〆

SUPREME UNIT

● 〆

YASUYOSHI HASEGAWA

ATSUSHI HAGINARA

NORIO SUZUKI

TOSHIAKI HOSHINO

MITSUMARO HOSHI

KENICHI KURUYO

TAKAHIRO SATOH

MASAHIRO ANDOH

SUSUMU SUGITA

KAZUHIRO AKABA

TOSHIAKI HYAKUTAKE

MIYUKI YOKOSHIMA

REI TAKANASHI

MASAHITO ASANO

BOND WEINGASHIRA

MASAHIRO ISE

● MODELING SUPPORT

NAOKI SATOH

(MODELING MODEL)

YOSHINO SWIMIZU

● THANKS TO COMPANYS

SUNRISE CO.

BANDAI

● PHOTOGRAPHER

MASAMI OKUMURA

KAZUHIRO HOSHINO

KENICHI HIGUCHI

(STUDIO ENTANYA)

● ART DIRECTION

KUNITAKA IMAI

● ART ASSOCIATES

KAZUO MINO

TAKASHI KANEKO

● PUBLISHER

KUJI DOGMA

● BUSINESS ASSOCIATE

KUNYUKI MATSUMOTO

員。乗艦許可を求めています」
 ガルダのコックピットでは乗艦手がGコアの識別信号をモニター上に促していた。
 「あのe任務部隊のMSか？」と機長
 「いえ、MSはど大きくありませんが、e任務部隊の所産のようです」
 「コア・ファイターか……。ただちに乗艦準備を整えよ！ 乗艦許可を出してやれ！」
 「了解」
 「シグマンの奴、無事に下りたのかな……」

ウェストがボソッと言った
 「大丈夫、大丈夫。アイツは抜かりの無い奴だからな！」とクリプトが答えたとき、ガルダからの乗艦許可の通信が入った。
 「よーしッ、見事に乗艦してやっからな。俺の残置、見ておけよ！」ルーツは胸の中で最後は「マニングス」と付け加えた。
 Gコアがグーッと右旋回し、それにつれて乗客が傾いて行く。Gコアから連絡を受けたガルダ編のMSデッキでは、すっかり

乗客誘導の準備が整えられていた。一足先に乗艦していたシェイトはGコアの接近を知らされると、部隊からMSデッキへと駆け出して行った。強風が壁の髪をかきむしったが、そんな事はお構い無しだ。デッキの端に駐機している彼のZプラスの脇を過ぎ、ポツリと西角く口を開けた後部ランブリアにたどりついた。
 「見えた！」
 ポツリと輝いた点が現れ、それが急速に機

体の形になって行く。
 「おおーいっ!!」彼はビュウビュウと鳴る風に負けない様に大声を張り上げる。その声は聞こえたか、聞こえなかったか、恐らくは聞こえなかっただろう。
 しかし、Gコアはその声に答える様子を待った。



ALICEも含めて、今、全ての人々が確実に成長した。
それは大きな目で見れば極めて小さな、緩やかなものだったかも知れない。
だが、これらの人々は大きな満足感を抱いていたのは確かである。
時に宇宙世紀0088、4月5日。α任務部隊、任務完了。

●MECHANIC DESIGN
 & CHARACTER DESIGN
 NAJIME KATANO
 ●SUB-MECHANIC DESIGN
 MIKA KATANA
 ●COORDINATION
 NAJIME KATANO
 ●STORY
 MASARU TAMAKOSHI
 ●DIRECTED & PRODUCED
 MASAMUNE ASANO
 ●SPECIAL THANKS
 KENJI KASAHARA
 KENJI KASAHARA
 MASARU TAMAKOSHI
 MASARU TAMAKOSHI
 SHINJIRO KANE
 NAJIME KATANO
 KENJI KASAHARA
 and many others

P E R I O D

O F

S E N T I N E L

C O N T

MODEL GRAPHIX SPECIAL EDITION

GUNDAM SENTINEL

THE BATTLE OF "REAL GUNDAM"

STORIES

THE BATTLE OF "REAL GUNDAM" 76

CHARACTERS

Amuro Ray	76
Char Aznable	79
Shin Asahi	82
Rey Ayanami	85
... (faded) ...	89
... (faded) ...	90
... (faded) ...	94
... (faded) ...	96
... (faded) ...	100
... (faded) ...	102
... (faded) ...	103
... (faded) ...	104
... (faded) ...	105
... (faded) ...	106
... (faded) ...	107
... (faded) ...	108
... (faded) ...	110
... (faded) ...	112
... (faded) ...	114
... (faded) ...	116
... (faded) ...	117
... (faded) ...	118
... (faded) ...	122
... (faded) ...	123

GRAPHICS

... (faded) ...	238
... (faded) ...	240
... (faded) ...	244
... (faded) ...	260
... (faded) ...	262
... (faded) ...	264

■ガンダム・センチネル 企画書



■アナハイム・ガンダム開発一覧表

アナハイム 開発機体	機体名	機体番号	機体タイプ	機体サイズ (mm)	機体重量 (kg)	機体価格 (万円)	機体性能	機体特徴
ガンダム	ガンダム	MS-01	MS-01	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-02	MS-02	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-03	MS-03	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-04	MS-04	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-05	MS-05	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-06	MS-06	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-07	MS-07	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-08	MS-08	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-09	MS-09	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-10	MS-10	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-11	MS-11	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-12	MS-12	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-13	MS-13	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-14	MS-14	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-15	MS-15	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-16	MS-16	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-17	MS-17	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-18	MS-18	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-19	MS-19	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル
ガンダム	ガンダム	MS-20	MS-20	18.00	18.00	18.00	18.00%	ガンダム・センチネル

■ND討伐隊(地球連邦軍)統一ナンバリング・ロコタイプ

1. 0123456789. 2. 0123456789. 3. 0123456789. 4. 0123456789. 5. 0123456789. 6. 0123456789. 7. 0123456789. 8. 0123456789. 9. 0123456789. 10. 0123456789.

0123456789.

■NO討伐隊(地球連邦軍)統一ナンバリング・ロコタイプ

譯者謝世榮、鄭曉、鄭曉、鄭曉

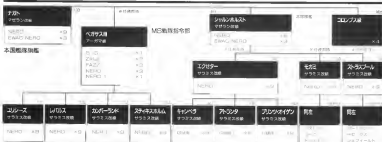
[illegible]

圖 9-10 門窗玻璃



■工イノ一第誌



同社が同様に発展材料になった切替「直利版と一エーディサイズ」の転換式のM20に構造を改良している。

[illegible]

つまり、 \mathcal{H} は、 \mathcal{H}_1 と \mathcal{H}_2 の直和である。このとき、 \mathcal{H} は、 \mathcal{H}_1 と \mathcal{H}_2 の直和である。このとき、 \mathcal{H} は、 \mathcal{H}_1 と \mathcal{H}_2 の直和である。

[illegible]

1. 姓名	2. 性别	3. 年龄	4. 职业
5. 住址	6. 电话	7. 邮编	8. 电子邮箱
9. 身份证号	10. 银行卡号	11. 驾驶证号	12. 行驶证号
13. 护照号	14. 户口本号	15. 结婚证号	16. 离婚证号
17. 出生证明	18. 死亡证明	19. 诊断书	20. 处方单
21. 化验单	22. 影像学检查	23. 手术记录	24. 麻醉记录
25. 输血记录	26. 用药记录	27. 护理记录	28. 会诊记录
29. 转科记录	30. 出院小结	31. 死亡记录	32. 尸检报告
33. 病理报告	34. 影像学报告	35. 检验报告	36. 手术报告
37. 麻醉报告	38. 输血报告	39. 用药报告	40. 护理报告
41. 会诊报告	42. 转科报告	43. 出院报告	44. 死亡报告
45. 尸检报告	46. 病理报告	47. 影像学报告	48. 检验报告
49. 手术报告	50. 麻醉报告	51. 输血报告	52. 用药报告
53. 护理报告	54. 会诊报告	55. 转科报告	56. 出院报告
57. 死亡报告	58. 尸检报告	59. 病理报告	60. 影像学报告
61. 检验报告	62. 手术报告	63. 麻醉报告	64. 输血报告
65. 用药报告	66. 护理报告	67. 会诊报告	68. 转科报告
69. 出院报告	70. 死亡报告	71. 尸检报告	72. 病理报告
73. 影像学报告	74. 检验报告	75. 手术报告	76. 麻醉报告
77. 输血报告	78. 用药报告	79. 护理报告	80. 会诊报告
81. 转科报告	82. 出院报告	83. 死亡报告	84. 尸检报告
85. 病理报告	86. 影像学报告	87. 检验报告	88. 手术报告
89. 麻醉报告	90. 输血报告	91. 用药报告	92. 护理报告
93. 会诊报告	94. 转科报告	95. 出院报告	96. 死亡报告
97. 尸检报告	98. 病理报告	99. 影像学报告	100. 检验报告

■ストーリー・マップ

『カノコ、セコ、オコ』(徳文・ロー・ジョー) 1971年、新泉社出版、新泉文庫

この問題が解決し、日本も北方方向の発展モデルとしてもよい。国産食料を安くするおし、食料の確保は重要な課題を生じている。トータルではかなりよい食料政策だ。アメリカでいって、地球・海洋開発など、ハイ・テクノロジーと関係にある場合、これは一歩進んだ方向に属する。

牛乳でいぼ、乳の詰まり、その後の乳の分泌に
も悪影響がある。乳を吸ったままにしておく

上記の各事項の経緯とは、早稲田大学で研修を行ったサイトへの訪問・取材の様子を記述しており、ミナソキエ・裕子との関係性や、リーダーが全く異なる組織、これもまた関係上理解がゆがみなりえと述べている。

また第7章「早稲田大学でストーリーの進行する」の図では説明した。

- [illegible]

CHARACTERS

ALL MECHANIC DESIGN / Hajime KATOKI

オール・メカニック・デザイン / かとう はじめ

EXPLANATION / Hajime KATOKI + Masahiko ASANO

機体解説 / かとう はじめ (★) ありあけ まさひろ

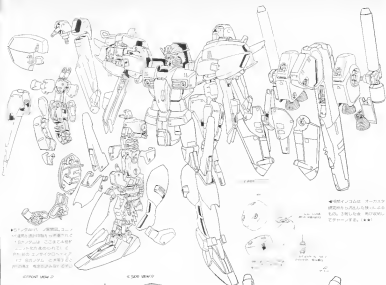
サブ・メカニック・デザイン / 明貴電機

★メカニック図案提供、★は明貴電機デザイン

★は明貴電機デザイン (or クリーン・ナップ) ★はありあけ

ひこクリーン・ナップ





●「エンゲルズは、労働問題、ユートピア運動と政治闘争を切り離された。『社会主義論』にこそ初めて本格的にユートピアに踏みこんでいる。その後の『エンサイクロペディア』で『社会主義』と書写するに当たっては、政治的立場を表明する。」

●鳴門インコ公団は、オーガニック
飼料を配合した健康食品である
もの。大切に育て、毎日新鮮な
アサギを育てる。(鳥飼)

[illegible]

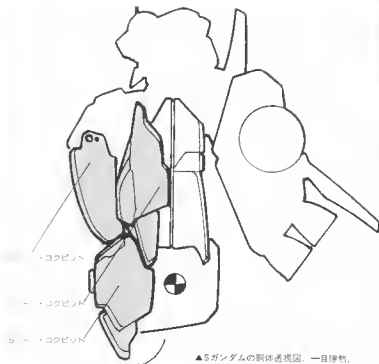
●「読者の心」に訴えるストーリー展開。キャラクター、プロット、セリフ、演出、音楽など、すべてが「読者の心」に訴えるように作られている。（『読者の心』）



▲お土産にもぴったり。フレッシュなマンゴ
を7つにカットし、ストロベリーを飾り、すし
でも大盛りー。エスカルーペで運ばせよう。
1人、1人お楽しみ。このデザートが、お家
で食べるお楽しみ。



"S" GUNDAM'S CORE BLOCK SYSTEM



▲Sガンダムの胴体透視図。一目瞭然、A・B・Cパーツのコクピットは一面所に集中している

コア・ブロック式MSは、連邦軍の最初のMS開発計画であった「V作戦」以来の連邦の特有のシステムである。V作戦で試作されたMSのメインコンピューターは、自己学習機能を持つ当時のMSとしては非常にすぐれた高級なものだった。その結果、ジオン公国軍のMSに勝る性能が得られたが、コンピューターにかかるコストは大きなものになった。又、試験や実戦で得られたデータは大変貴重なので、非常時にパイロットとこのコンピューターを無事回収する脱出システムが必要であった。この要求に応じたのがコア・ブロック・システムな訳だが、このシステムの導入はただでさえ高い試作中のMSのコストを、増や押し上げた。その為RX-78-9番生産型のRGGM-79では、コスト切りつめの為に同システムは廃止される事になってしまった。

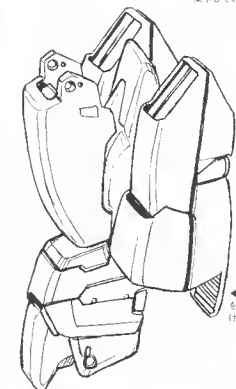
しかし非常時のパイロットの生還率の低さが問題となり、旧大戦後は新しいコクピット・システムとして、カプセル搬出式のリニア・シートが全MSに積まれる事になった。(これを第2世代MSと呼ぶ)リニア・シートは大変良好であったが、この脱出システムでも、熱核反応炉の誘導からは逃れられない事が多く、一方でMSの可変や極端化に伴ない、搭載されているコンピューターも増々高価になった。

そこで、かつてコストの上昇を理由に採用が見送られたコア・ブロック・システムが、再び脚光を浴びた。

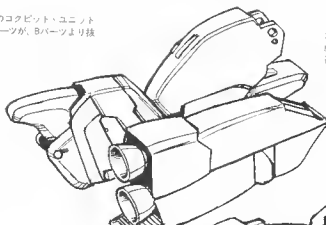
一年戦争のRX-75、76、78以来のコア・ブロック式MSは、MSZ-010「Zガンダム」だ。アナハイム・エレクトロニクス社ではリガンダムと呼ばれたこのMSは、A・Bパーツに分離変形しそれぞれ飛行可能な機体だが、Aパーツのパイロットを搭乗させた場合コア・ブロックに搭乗してはいないので、脱出困難なのが問題点だった。

コア・ブロック式第3のガンダムとして計画されていたSガンダムでは、コア・ブロックのコクピット・ユニット(Gパーツ・コクピット)にA・Bパーツのコクピット・ユニットが直接接続して、MS状態では互いに結合固定されている。非常時にはA・Bパーツのコクピット・ユニットをコア・ブロックに残して排除され、コア・ブロックはA・B・C、各パーツのパイロットを安全圏へ逃れさせる。この形態はお世辞にもバランスの良い機体と言えないが、脱出システムとしては上等の性能を持っており、熱核ジェット/ロケット・エンジンによって、パイロットが失神等で寝てこない状態でも、母艦又は基地に帰還する能力がある。

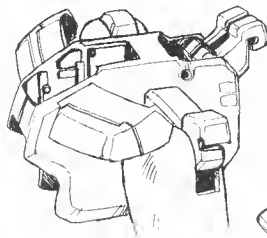
特にSガンダムは無人MS構想の試験機でもあったので、「ALICE」と呼ばれるメイン・コンピューター・システムを準備して回収する必要があった。故に、この様な究極的な脱出システムはSガンダム開発当初からの要求性能のひとつであった。



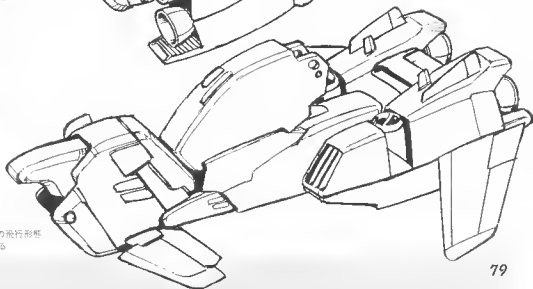
◀A・Bパーツのコクピット・ユニットを装着したCパーツが、Bパーツより抜け出した図。



◀A・Bパーツのコクピットを装着した、Cパーツのコア・ブロック形態。劇中では、ALICEに強制分離された後、この形態で大気圏へ突入した



▶大気圏内航行をも可能とする、コア・ブロック・システムの飛行形態。当然の事ながら自力飛行により回復率・生存率は大幅にUPする



SPECIFICATION

[REAR VIEW]

全高：25.18m 諸元高：21.73m
 本体重量：36.40t 全機重量：73.00t
 パワーシエネレーター出力：7,180KW
 移動用ロケット推力：24,700kg×4
 (1,200kg×4)

固定武装：60mmバルカン×4
 背部ビームカノン×2 (出力12MW)
 大腿部ビームカノン×2 (出力14MW)
 ビームサーベル×2 (出力9.5MW)
 頭部インコム (出力3.8MW)
 テールスタビレーター・60mmバルカン×4

オプション：ビーム・スマートガン (出力58MW)
 (その他、状況に応じて各種装備可能)

近接制敵バーニア：15基
 センサー有効半径：18,800m
 使用材質：ガンダリウム7コンポジット

、フレームで接続され、通常MSが装備しているビーム・ライフルに比べ有効距離、構造と性能面両方向上しているように、重量がフリーになるが、さらに他の有線系も自由に生かせる。

両ビーム・サーベル・ボックス・ユニット
 脚のムーバブル・フレームで接続されているこのユニットは、テール・スタビレーターと同等。AMBACで機体制御をこなす。重量は小さく、主に射撃時などの機体制御に使われる。ビーム・サーベルのラック以外にも、オプション・パーツを用意されており、代表的な物としてはEX(モーター)で駆動されているリフレクター・インコム・ユニットが挙げられる。

第二章・カバ

脚のムーバブル・フレームを覆う。膝関節は、変形の際に大きく曲がるので、ニー・カバも下方へスライドする仕組みになっている。

関節エンジン・カウリング

股に内蔵されたバネの動力をまかなう駆動ジェノ/ロケット・シエネレーターを覆うカウリング。Gボマー、Gクルーザー時には爪先のムーバブル・フレームを覆う位置にスライドする。

関節部エア・ダクト(兼スラスター)

関節部エア・ダクトと基本的に同じ構造。爪先ムーバブル・フレーム

股上での歩行や重心移動のため動くムーバブル・フレーム。Gボマー、Gクルーザー・モードでは、脚エンジン・カウリングがスライドして、ここをカバーする。歴代ガンダム系MSと異なり爪先がフレーム色なのは、この為。

両パーツ主翼ユニット

MSN-00100「百式」は背中に2枚のウィング・バインダーを設け、AMBACに生かした。Gガンダムは両パーツの主翼を左右の背中にレイアウトしMS時にウィング・バインダーとして機能するようにしている。テール・スタビレーターをメインとするならば、サブのスタビレーターであり、重量は3つ平行に吊り下げられている。3度分離のシチュエーションが有り得ず、又、状況的に必要と判断された場合など(例えば大気圏内)は、取り外して出撃する事も可能。

両大口徑ビーム・カノン

エネルギーCAPを用いたビーム兵器。バック・バックにムーバブル・フレームで接続されており、自由に操作出来る。バック・バックの代わりにフースター・ユニットを装備した場合は、最大4門までの搭載が可能。又、両ビーム・カノンは比較的コストパフォーマンスが高く、FZZにも転用されている。

両バック・バック

テール・スタビレーター基部の両側に取り付けられ、それぞれ異なる射撃ロケットと1基のムーバブル・フレーム・マウントがある。取り付け基部はこれもムーバブル・フレーム接続で、バック・バック本体自身もAMBACとして使用可能。又、フースター・バック等のオプションとの接続も可能。

両テール・スタビレーター

Gアタッカー Gクルーザー時の機首に当たる部分。MSモード時は先述センサー部が収まっている。管轄はプロペラントが大半を占め、その他機首としてのセンサー、電子装置が備わっている。MSモードでは大きな回転モメントを生かしAMBACを行なう。ハルカス×4門を装備したタイプも存在し、その用途によって変換が可能。

両背部モニター・カメラ

後方の境界を導くためのカメラ。機体各部の各カメラの映像を合成して、リア・シート内の3Dモニターに再生される。

両センサー・センサー

スタビレーターのセンサーは、MS時に後方を警戒する物と、飛行形態の機首としてのセンサーの2種類があるが、これは飛行時に前進方向の障害物を感知するセンサーである。同システムはEX(機首)増設パーツの下面に並列でセットされている他、セク・ツマヤの胸などにも見受けられる。

両射撃用センサー

テール・スタビレーターが機首となる時前方の律動に対し、射撃管制用のメイン・センサーとなって働く一連のセンサーの集合体。飛行形態ではこのユニットが若干前方に延びる。

両パーツ主翼ユニット

Gボマー・モード、Gクルーザー・モード双方で主翼として展開される。MSモードでは、テール・スカート部に位置し、垂直尾翼は折りたたまれ単なる翼になっている。

両脚部ベンチレーター

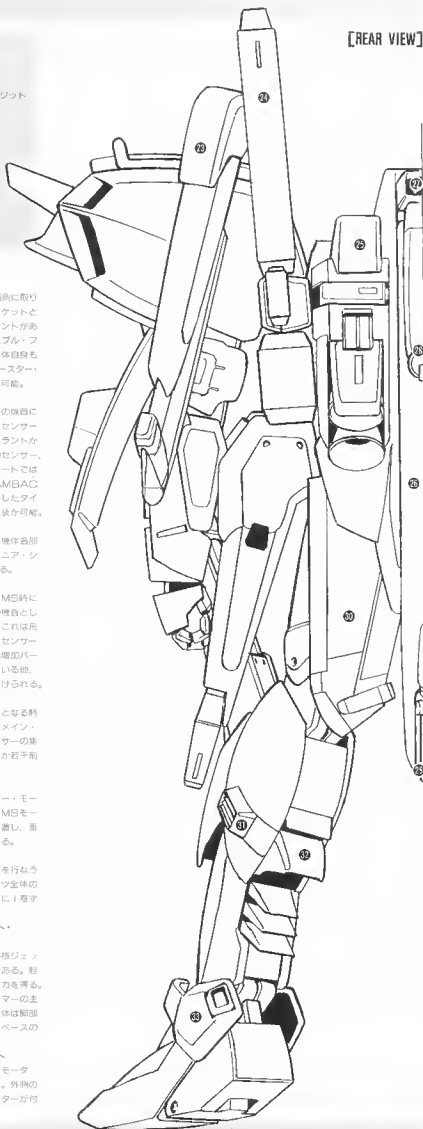
脚部のシエネレーター等の冷却を行なうベンチレーターのダクト。両パーツ全体の冷却率は高くはくはくの内・外側、1基ずつの計4基でまかなわれている。

両脚部熱核ジェノ/ロケット・ジェネレーター

両足根元は各の脚には、熱核ジェノ/ロケット・ジェネレーターがある。種々の可変ノズルからの排気力で推力を得る。また、下半身及び、分離時のGボマーの主動力源である。シエネレーター本体は脚部フレームの一部を兼ね、重量とスペースの軽減を図っている。

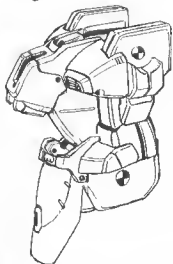
両足首フェアリング・ユニット

左右の足首のフィールド・モーター補給や制御機器の入ったユニット。外側のパーツにのみ、ハニア・スラスターが何いている。

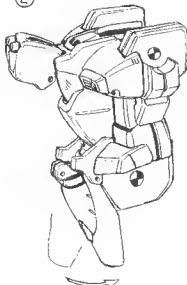


Ex-Sガンダム 胸部ギミック

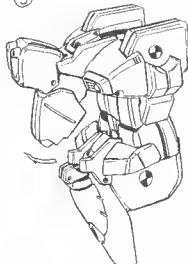
①



②



③



▶Ex-Sガンダムでは胸・腹部に増設パーツが装着され、着うぶも無いがこれらのパーツを装着した状態で、パイロットの昇降は可能だ。A・B・Cパーツのコクピットは胸部中心線上に存在している為、その周辺のみを後面に吊り下げている訳である。

▼胸部ブロックをアソビで見ると（腰部増設パーツは装着していない）、胸部増設パーツの形状がよくわかる。1フィールド発生装置下の円形パーツは、シーカー。

▼既定動とはいえ、コクピット周囲にハリアーを添える1フィールド発生装置を内蔵する胸部増設パーツ。

▼Ex-SガンダムのサイドVIEW。そのホリ、ムは、このパーツから一掃伝わりやすい。フ・スタ・ユニットを含めた、胸部周辺の厚みかすこい。

▲毎に装着されるリフレクター・インコム・ユニットは、この様に展開する。両ユニットはビーム・サーベル・ボウツスも兼ねており、更に多機能なユニットである。

SPECIFICATION

全高：25.90m 頭頂高：21.73m
 本体重量：69.24t 全備重量：182.50t
 パワージェネレーター出力：7,180kW
 移動用ロケット推力：267,500kg×4
 56,000kg×2

姿勢制御バーニア：15基
 センサー有効半径：18,800m
 装甲材質：ガンダリウムアコンボジット
 固定武装：60mmバルカン×4

バック・バック部ビーム・カノン
 ×4（出力12MW）

大胸部ビーム・カノン×2（出力4MW）

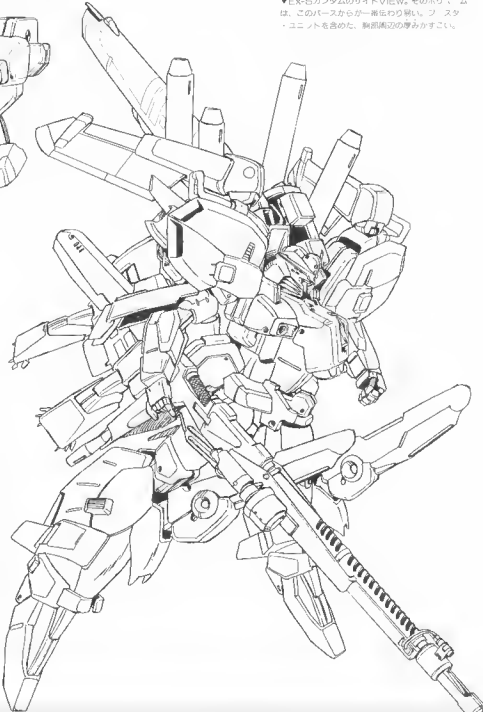
1フィールド発生器

胸部インコム（出力3.8MW）

リフレクター・インコム×2

ビーム・サーベル×2（出力0.9MW）

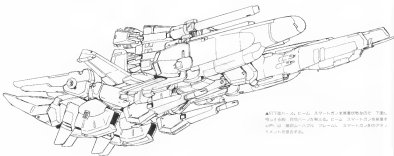
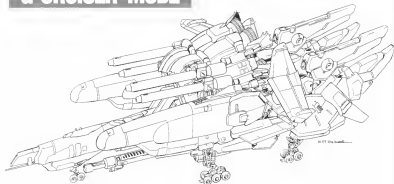
テル・スタビレーター60mmバルカン×4



MSA-001[Ext]Ex-S GUNDAM

G-CRUISER MODE

▼フレーム・コアを必要に応じて展開して武装のバリエーションを確保する。フレーム・コアは、必要に応じて展開して武装のバリエーションを確保する。



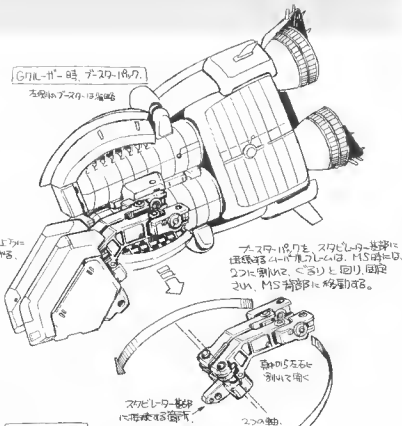
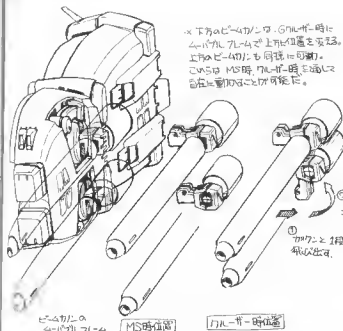
▲右はフレーム・コア、スタートガンと推進ロケット、下は、推進ロケット、推進ロケットと推進ロケット、フレーム・コア、スタートガンと推進ロケット、フレーム・コア、スタートガンと推進ロケット。

戦時のMSの欠点のひとつとして、その駆動装置・及び行動範囲の狭いことが挙げられる。これは半固定動作型となるメカニズムが機体構造の大半を占めてしまうため。MSの長距離飛行を助けるための手段として、一年戦争中ゾオンが使用したト・タイアロを模倣するシャトルズやゲッターなどの「ロケット飛行補助装置」があるが、これとは別に運用では一年戦争中、RX-78の中心としたMSの導入計画において、ロアーマーと呼ばれるMSの飛行形態が考案されていた。しかし、高度性能低下の、GMが採用された時の中絶されてしまった。これはコストの高騰

の他に、当時のMS技術が未熟だったため、合体機体にトラブルが集中したのが原因であった。その後、ムーバブル・フレームと一時的になるにつれ、MSの飛行形態は再び見直され（それがMSの発展的発展は遅延している）MSZ-000はWRへの可変能力の機体とされた。そして、大気圏突入能力と、宇宙及び大気圏内での必要能力を兼ねる事が出来た。これは格闘戦術を重視したMSの発展と通って、格闘戦術のない試作に過ぎない。また、主なる推進力方向は垂直方向に、また、手動で制御が失くさる様に設計されている。

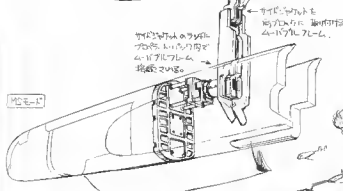
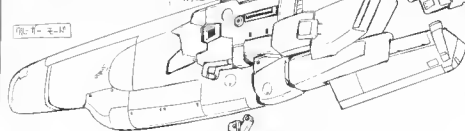
MSZ-000は、コア・プロセッサシステムを有して、中と大気圏突入機体を兼ね、これを機体は、MSZ-000とほぼ同等の機体であった。変換に際してコア・プロセッサに大きな負担が掛かる。Aパーツの追加と、機体の構造システムに大きな負担が掛かる。これら2つのMSは、実質に単独パーツを必要としたコア・システムで、追加型になる内には追加パーツを必要とする方式を知り、MSZ-000の問題を全て解決して、Gクルーザー・モードを実現した。バック・パンクを強化して、機体はプロペラント・パンク、あるいは

さらに強力なバック・パンク、単に、プロペラント・インカム・ユニット、そして、バック・パンクには、推進ロケット・コア・プロセッサと、合体システムの特徴を兼ねる）を構築して、MSとして、通常のガンダムより、格闘能力が向上した巨大型と呼ばれるヴァージョンになり、機体も同等をそれ以上、機体もずっと大きくなった。大気圏突入、月面降下〜再降下可能なクルーザーは、MSの発展的発展としては、RX-78以降の発展的発展されていた機体と見えてくる。



▲ フースター・ユニットのヒーム兵器用線向ムーバフル・フレーム（エネルギー供給用コネクタ）に取り付けられる大口ビーム・カノンは、Gフル・時に、モード時はムーバフル・フレーム可動によって上方へはね上がる。これによりユニットの干渉を減らし、トランスフォームをより容易にする。

▼ 右腕のフロベント・ユニットを切り離すと、MS 時に、トランスフォームする。サイズ、コネクタの位置は、MS 時に、ムーバフル・フレームが通っている。

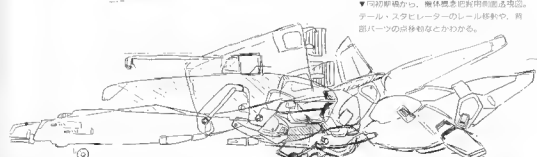
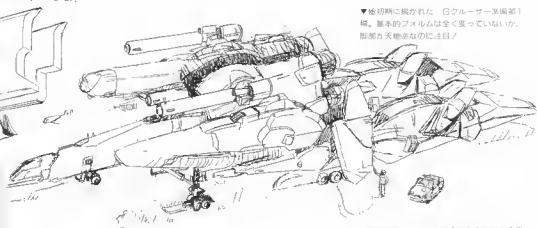


SPECIFICATION

全長: 43.63m 全幅: 22.89m
 本体重量: 79.28t 全機重量: 242.36t
 パワージェネレーター出力: 12,260KW
 移動用ロケット推力: 267,500kg×4
 82,000kg×2

近接戦闘用バーニア: 15基
 センサー有効半径: 18,800m
 装甲材質: ガンダリウム7000ボジット
 固定武装: バック・バック部ビーム・カノン
 ×4 (出力12MW)

1 フィールド発生器
 リフレクター・インコム×2
 大発射部ビーム・カノン×2 (出力14MW)
 80mmバ・カ×4

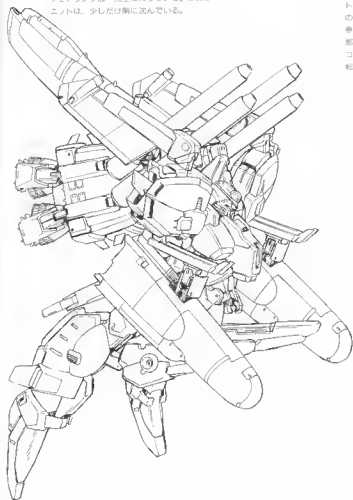


▼ 右腕のフロベント・ユニットを切り離すと、MS 時に、トランスフォームする。サイズ、コネクタの位置は、MS 時に、ムーバフル・フレームが通っている。

▼ 右腕のフロベント・ユニットを切り離すと、MS 時に、トランスフォームする。サイズ、コネクタの位置は、MS 時に、ムーバフル・フレームが通っている。

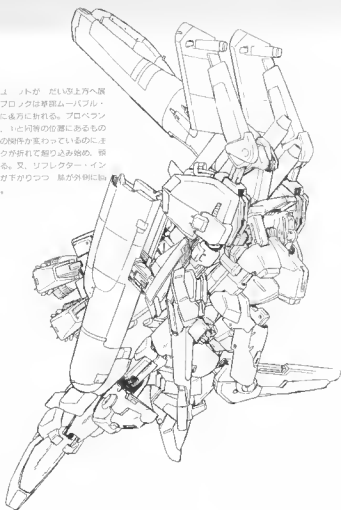
3

各サイド・バックが、両腕の取付部を支点に、ぐるりと外に回って前方回転している。プロベラント・ユニット側の付け根は、同ユニットが姿勢正進を向く様に半回転する。郭フェアリックは、完全に動いている。脚部ユニットは、少しだけ動いている。



4

△Aパーツ主翼ユニットが、だいたい上方向展開している。機体ブロックは基盤ムーバブル・フレームを基軸に左右に折れる。プロベラント・ユニットは、1と何層の位置にあるもの。機体ブロックの折れ方によって、折れ方が、胸に入る。又、シフトレター・インコム・ユニットが下がりつつ、基が外側に回転を始めていて、

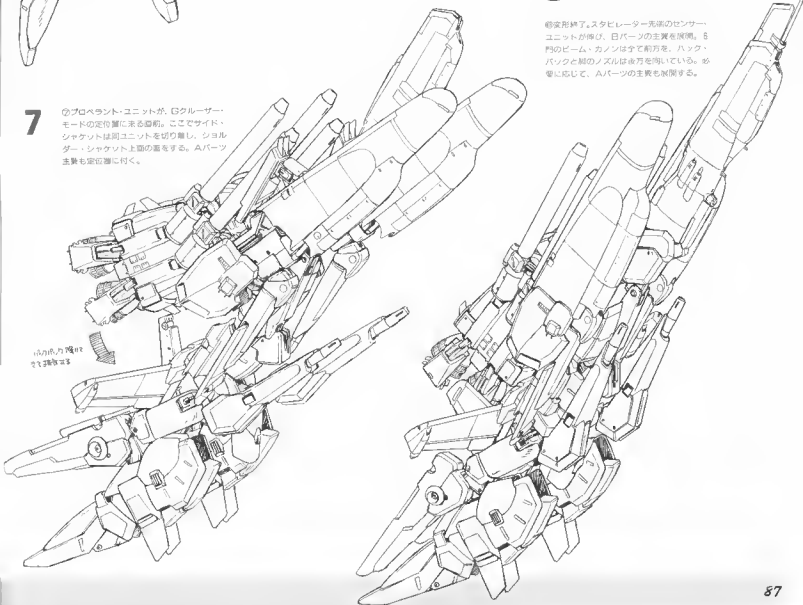


8

前変形終了。スタビライザー系のセンサーユニットが伸び、日パーツの主翼を展開。8門のビーム・カノンは今度前方を。バック・バックと脚のノズルは今度前方を向いている。必要に応じて、Aパーツの主翼も展開する。

7

プロベラント・ユニットが、Gクルーザーモードの定位置に来る直前。ここでサイド・シャケットは同ユニットを切り離し、シールド・シャケット上面の面をする。Aパーツ主翼も定位置に付く。



バック・バック
ユニット

MSA-0011(Bst)
"S" GUNDAM plus BOOSTERUNIT

▲胸部デール・スタビレーター基部下にマウントされる多目的バック。プロペラント・タンク等を収容するのに使う。

▲レームスマートガンセットしたBst型。肩部ブースター・ユニットを胸部ブースター・ユニットは全くの同型。つまり、同型のブースターを4個装着している状態である。

MSA-0011(Bst)は、巨大な強化型バック・バック4基を装備した、Sガンダム的高速高機動タイプである。

強化型バック・バックは、元々Sガンダム巡航形態である「Gクルーザーモード」用装備の一環として、月面降下・遊脱及び、地球の大気圏離脱の要求性能を満たす為に設計された物だった。しかし後にBパーツの代わりに、これを2基アダプターを介してSガンダムの下半身に取り付け、合計4基を装備しようというプランが提出され、それが急遽Sガンダムのバリエーションの1つとして採用された。

強化バック・バックは、MS本体からのエネルギー供給が一切なくても稼

動するので、動力系に手を加えなくてもBst型に改造が可能。またBパーツにもロケット・エンジンはあるものの、推力は強化型バック・バックに比べてケタがちいさい。大加速/高速度を目的とするなら、MAと同様に脚は不要なので、取ってしまった方が軽量の点でも有利になる。

各バック・バックには2個づつ計8個のビーム・カノン用フレームがあり、スマートガンもここに接続出来る。両中のバック・バックには、4門のビーム・カノンを装備することが多い。

全機重量でもExx型の3倍近い10G以上の加速が可能で、質量比も大きい事から宇宙船並みの大軌道移行も

できる。例えば地球低軌道から、単独飛行で月に達するだけの速度機分を得られるなど、サイズが小さい分MAよりも優れた部分もある。

テール・スタビレーターと肩ブロックのAパーツ主翼ユニットによるAM

BACで、射撃時の姿勢制御も、通型MSに劣る事はない。

「人型」にこだわる産邦のMSとしては異例とも言える機体だが、アナハイム/エゥーゴ開発スタッフの柔軟な発想の成果であると言える。

SPECIFICATION

全高：19.18m 頭頂高：15.81m
 本体重量：82.18t 全機重量：220.13t
 パワージェネレーター出力：12,250kW
 移動用ロケット推力：267,500kg×8
 姿勢制御バーニア：18基
 センサー有効半径：18,800m
 装甲材質：ガンダリウム合金ボジット

固定武装：60mmバルカン×4
 肩部ビーム・カノン×4
 (出力12MW)
 胸部インコム(出力3.8MW)
 テール・スタビレーター
 60mmバルカン×4